

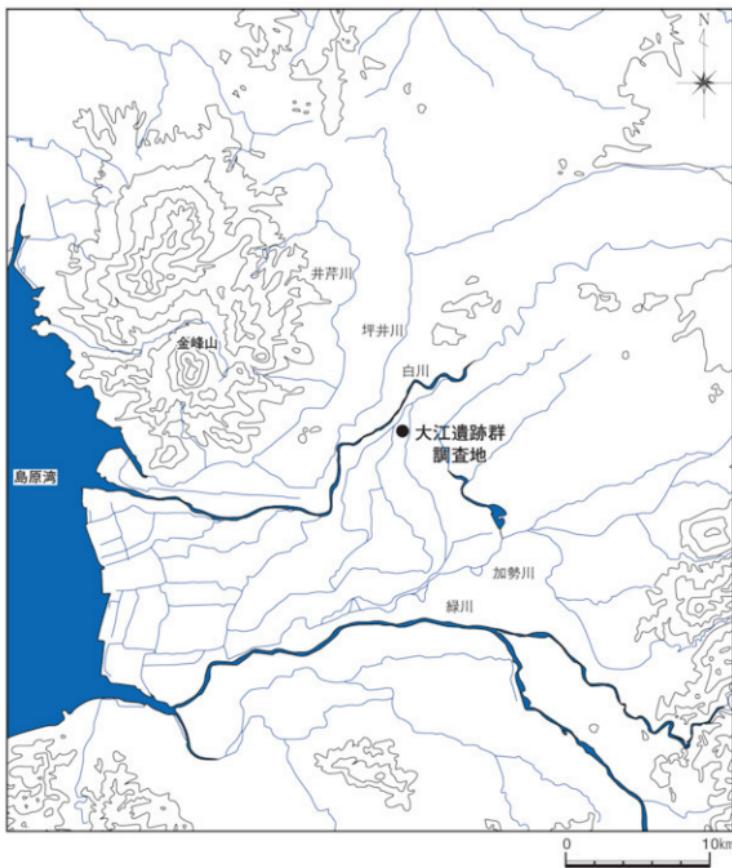
おお え い せき ぐん
大 江 遺 踪 群 III

—県営九品寺団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2006. 3

熊本県教育委員会

大江遺跡群 III



2006.3

熊本県教育委員会



図絵一 1 熊本市中心街より江津湖方面を望む



図絵一 2 調査地周辺



図絵-3 調査地全景（1区と2区の合成写真）



図解-4 窟の袖石の石材として切り出された自然流路（1号溝）



図解-5 住居址や溝から出土した遺物

おおえいせきぐんはくつちょうさ　がいよう 大江遺跡群発掘調査の概要（ダイジェスト版）

1 調査のきっかけ

大江遺跡群は、北は熊本市渡鹿から、南は九品寺に至る約3.4km²に及ぶ広さをもつ遺跡です（P5、図-5）。今回の調査は、遺跡の範囲の中でも、南西部の九品寺3丁目にある県営九品寺団地の敷地内で行いました。県営九品寺団地は、昭和28年に建設されましたが、老朽化にともなって建て替え工事を行う計画が出されました。「文化財保護法」では、工事などを行うことによって、遺跡を壊したり、この先見ることができなくなる場合、発掘調査を行わなければならないとしています。そこで、今回建物の建つ範囲の発掘調査を行いました。調査は、平成17年1月から3月までの期間で、約1,660m²の範囲を行いました。

2 調査によってわかったこと

（1）遺構・流路について

古墳時代から平安時代初期（今から約1,400年前から約1,200年前）にかけて、集落があったことがわかりました。遺構は、竪穴住居21軒、掘立柱建物1軒、何かの目的があって掘られた穴21基、溝5条、畑に伴う溝3条が確認されました（P11-12、図-10）。古墳時代の住居は、あまり重なって出てきませんが、奈良時代から平安時代の住居は、いくつも家が重なって出でます。これは、ある一定の期間に、何回も家を建てたことを意味しています。おそらく、住宅密集地であったと思われます。また、竪穴住居の大きさの傾向としては、古墳時代から奈良時代全盛期までは、1辺が約4m程度あり、竪穴住居がつくられていた時期の最後の方では1辺2.5～3m程度のやや小さめのものに変化していくことがわかりました。

① 竪穴住居の建築順序

今回の調査で、竪穴住居がつくられる手順を知ろうと、慎重に竪穴住居の中を埋めた土や当時の人が人為的に埋めた土を取り去りどのような手順で家を作ったのか調べました。図-1に示すような工程で家を築いたようです。平らな土の床を作ったり「かまど」を作ったりなど、ひと昔前とあまりかわらないようなものをつくりていたようです。ただし、壁や屋根については、今回の調査では、わかりませんでした。また、煮炊きにつかう「かまど」の基礎となる石は、隣接する小川から材料となる石を切り出してきて使用していました。今回、石の成分を調べた結果、かまで使用されていた石と小川の川底に出ている地層の成分が一致しました。また、実際、川底から切り出したあとが発見されました。これらの事実から、この小川から石を切り出したことがわかったのです。この石は、この大江遺跡群だけでなく、近隣の遺跡でも「かまど」の石として使用されているようです。

② かまどの基礎となる石を切りだした川

川幅は広いところで約17m、川底は約6m、深さは約2m50cm程度あるような川ではなかつたかと思っています。今回調査したところからは、人為的につくったような規格性のあるつくりはしていませんでした。川を埋めていたものは、しま模様のある砂と粘土からできています。

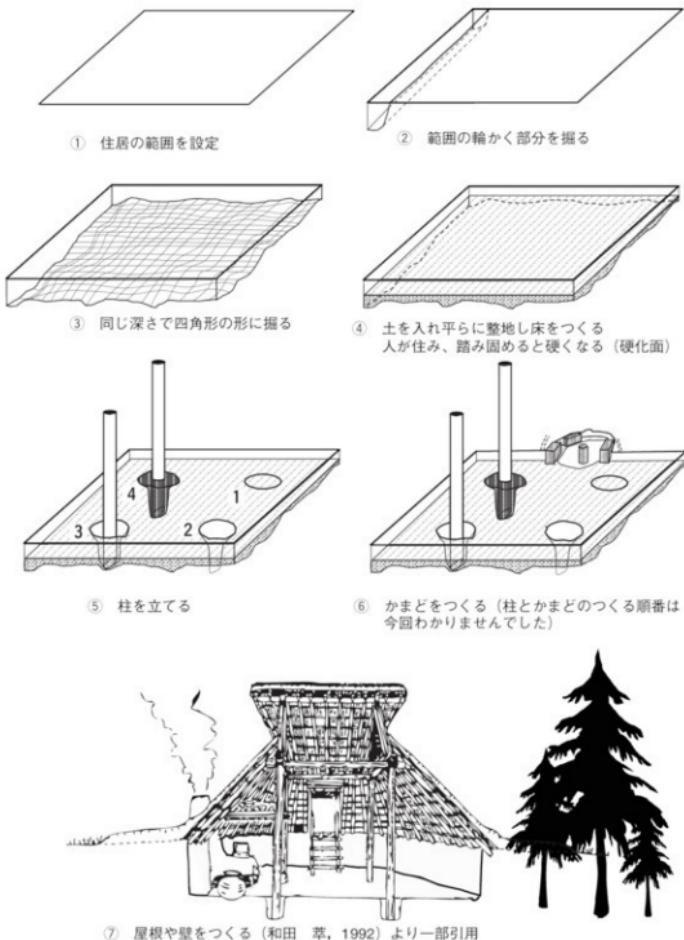
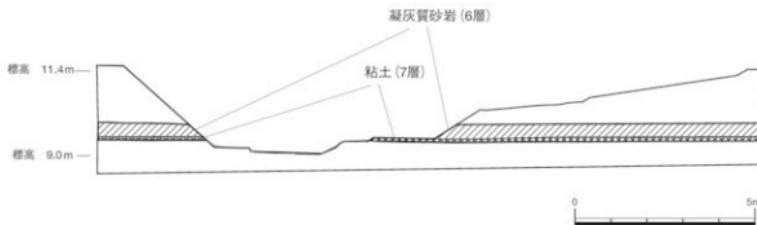


図-1 今回の発掘調査でわかった竪穴住居の建造順序

た。これらの埋まった土などから、いつも水の流れのある川で、ある時期から流れのあまりないよどんだ川になったことが推定できます。

この川底から、硬くなった凝灰質砂岩や粘土(図-2)がとれます。これらを切り出しては、「かまど」の基礎の石として使っていました。この凝灰質砂岩や粘土は、九品寺一帯に堆積しているようです。この粘土は、多くの分析をおこなった結果、阿蘇の火山活動で発生した泥水だけが低いところに留まってできたのではないかと考えています。



図－2 流路の断面図（左側が東側）

川から切り出した石が古墳時代（6世紀後半）の竪穴住居で使用されており、川を埋めた土から奈良時代から鎌倉時代（13世紀前半）までの遺物が出土しています。これらのことから、この川は、古墳時代にはできており、鎌倉時代には完全に埋まったことがわかりました。

（2）遺物について

出土した土師器・須恵器の土器には、甕、壺、壺、壺、高壺、蓋、皿、酌（写真－2）



写真－1 石鐵と鐵鐵



写真－2 いろいろな種類の土器



写真-3 刀子、鉄・石製の紡錘車と土鍤



写真-4 墨で字が書かれた土器

などいろいろな種類のものがありました。これらは、日常生活のなかで、煮焼きにつかったり、食べ物を盛ったり、食べ物を貯蔵したりなど多くの用途につかったと考えられます。

土器以外では、魚網につけられていたと思われる土鍤、糸をつむぐための鉄または石でできた紡錘車、刀子とよばれる小刀（写真-3）、鉄鍤や石鍤（写真-1）など多くの日常生活で使用されたと考えられる遺物が出土しました。

その他、特殊な遺物として、遺構や遺構を覆っている遺物を含んだ土（遺物包含層）から墨で文字が書いてある土器が見つかっています。奈良時代には、読み書きのできるのは、役人や僧侶など一部の人に限られていましたので、おそらくこの近くに役人や僧侶と考えられる人々が住んでいたのではないかと推測されます。8世紀半ばには、託麻郡に国府が設置され、その推定地が熊本市国府本町周辺（P5、図-5）とされていますからうなずけるところです。

かまどの中に残っていた土を洗って観察したところ、ガラス製の小玉やモモ、カラスザンショウ、センダン、カヤツリグサ科、ケシ科などの種子（P95、写真-67）が出てきました。当時の人々の食物等はどのようなものだったのでしょうか。

（3）過去の自然環境を復元

調査を行った九品寺団地の地下に堆積している土に含まれている花粉・ケイソウ化石・植物珪酸体などの微化石の種類を調べ、九品寺一帯の昔の植物や地面の様子などを推測してみました。

図-3は、古墳時代の九品寺一帯の様子を復元したイメージ図です。微化石分析の結果をふまえ復元しています。奥に見える山が金峰山で、真ん中に右から左に流れている川が白川です。最も手前に見えている川が今回確認された小川です。集落には、堅穴住居などがたっており、集落の周辺では畑作や稲作が行われていたようです。遺跡周辺の稲作の開始時期を探るため、約6千年前からの層ごとの年代と微化石を調べたところ、約2千年前から急激にイネの化石が増加することが確認されました。おそらく弥生時代の半ば頃からこの地域では稲作が行われるようになったようです。また、当時の植物として、川の周辺にはススキ、ヨシ、メダケ、ネザサなどが生え、その周囲には、イスノキなどの照葉樹が生えていたと考えられます。

ケイソウ化石をしらべたところ、標高4m付近の地層に海水に見られるケイソウが確認され



図-3 古墳時代の調査地周辺の様子（イメージ図）



写真-5 遺跡の見学に来た中学生



写真-6 現地説明会の様子

ました。約6千年前（縄文時代）には海水が九品寺付近までできていたようです。これは、縄文時代に地球の温暖化が進み、海面が上がったからです。これを縄文海進といいます。熊本でも、現在の海面よりは約3m～4mは上昇していましたことになります。縄文時代の遺跡が、熊本市の内陸部にあるのも理解できます。

3 おわりに

私たちは、今回の発掘調査によって出土した遺構、遺物及び土壌分析によって、その時代に生きていた人々の暮らしぶりや当時の人たちが見ていたであろう自然環境を知ることができました。今回の私たちが調べた成果を、学校教育や生涯教育の中で、生きた教材として活用していただければ幸いです。

序 文

熊本県教育委員会では、県営九品寺団地建替事業に伴う埋蔵文化財調査として、熊本市大江から九品寺にわたり所在する大江遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査の結果、6世紀から9世紀にかけての住居址や流路などが多く確認されました。特に、流路の川底から住居の竈に使用する石を切り出し、使用していたことは貴重な発見でした。

この報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する認識と理解を深めていただく一助となれば、幸いです。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大のご協力をいただいた県土木部、熊本市教育委員会及び地元の方々、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成18年3月31日

熊本県教育長 柿塚 純男

例　言

- 1 本書は、県営九品寺団地建替事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県土木部の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地調査は、平成16年度に実施し、馬場正弘が担当した。
- 4 現地での図面作成及び写真撮影は、馬場・中尾健照・土野雄貴・内田成香・松野直子で分担した。
図面作成では、一部(株)九州文化財研究所に委託して行った。
- 5 国土座標軸による測量基準杭の設定は、(有)坂井設計コンサルタントに委託した。
- 6 自然科学分析は、(株)古環境研究所に委託した。
- 7 空中写真撮影は、九州航空(株)に委託した。
- 8 遺構製図は、西口(松野)直子が行い、位置図作成は、加藤早織が行った。
- 9 報告書作成業務は、平成17年度に実施した。出土遺物の整理作業は、三宅由華・加藤が担当し、遺物実測を三宅・加藤・井島秀子・金子美代子・平木智子・草野千鶴子が行い、遺物製図は、三宅が行った。
- 10 出土遺物の写真撮影は、村田百合子・手嶋裕子・馬場が行い、三宅・加藤が補助した。
- 11 本書の執筆および編集を、馬場が行い、編集で三宅・加藤・西口・米村俊治が補助した。
- 12 発掘調査・報告書作成にあたっては、業務の迅速化、情報の共有化、普及資料の作成を試みた。
 - ①業務の迅速化・・・トータルステーションによる電子図化を行った。電子図化のソフトウェアにはアイシン精機製の遺構実測支援ソフト「遺構くん」を使用した。
 - ②情報の共有化・・・事業に伴う地質調査で派生するボーリングコア試料の活用方法を模索した。
 - ③普及資料作成・・・報告書の巻頭においてダイジェスト版を配置し、住民向けに調査の概要を付した。
- 13 遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室(熊本市渡鹿3丁目15-12)に保管されている。
- 14 鉄器の透過X線撮影では、福岡市埋蔵文化財センターの片多雅樹氏に御協力頂いた。

凡　例

- 1 本書で使用している方位は、真北を示す。
- 2 本書に掲載した実測図の縮尺は、不統一であり各頁に明記した。
- 3 出土遺物の縮尺は、土器類が3分の1、紡錘車・刀子・土錐が2分の1、石器・ガラス小玉は原寸である。
- 4 須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
- 5 土師器裏および高環の内面の調整で、ヘラ削りは矢印で方向を示した。
- 6 土層及び土器の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(日本色研事業株式会社:1997)に準拠した。
- 7 遺構図におけるパターンの表記法は、以下のとおりである。



本文目次

口絵

大江遺跡群発掘調査の概要（ダイジェスト版）

序文

例言・凡例

本文目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の過程	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査成果	
第1節 調査の方法	7
第2節 地層層序	
1 完新世の堆積物の層序と古環境調査	8
2 基本層序(調査地の層位と遺物包含層)	
	10

第3節 遺構

1 はじめに	13
2 住居址	13
3 方形竪穴遺構	16
4 土坑	17
5 畝状遺構	19
6 溝	19
7 ピット群	21
8 遺構実測図	21

第4節 遺物

1 はじめに	46
2 遺構内出土遺物	46
3 1号溝（自然流路）からの出土遺物	48
4 遺物包含層からの出土遺物	50
5 出土遺物実測図	51

第Ⅳ章 理化学分析

1 放射性炭素年代測定	58
2 花粉分析	59
3 珪藻分析	62
4 植物珪酸体分析	66
5 瓷石部材の蛍光X線分析	69
第Ⅴ章 総括	71
出土遺物観察表	72
写真図版	75
報告書抄録	96
参考文献	97

挿図目次

図-1 今回の発掘調査でわかった竪穴住居 の建造順序	卷頭	図-35 3号・4号・5号・6号・7号住居址 出土遺物実測図	51 (以下 実測図の記載省略)
図-2 流路の断面図	卷頭	図-36 7号・10号・11号住居址出土遺物	52
図-3 古墳時代の調査地周辺の様子	卷頭	図-37 16号・17号住居址出土遺物	53
図-4 熊本市及び周辺地域の表層地質図	2	図-38 17号・18号住居址、2号方形竪穴遺構 出土遺物及び遺構内出土鉄器・石器	54
図-5 大江遺跡群周辺遺跡分布図	5	図-39 7号土坑及び1号溝上層出土遺物	55
図-6 調査地点位置図	6	図-40 1号溝下層出土遺物	56
図-7 グリッド設定図	7	図-41 1号溝下層、1159・1116ピット、遺物 包含層出土遺物	57
図-8 完新世における総合柱状図	9	図-42 大江遺跡群ボーリング試料における花 粉ダイアグラム	61
図-9 基本土層模式図	10	図-43 遺物包含層、2b層、白色粘土における 主要珪藻ダイアグラム	62
図-10 遺構配置図	11・12	図-44 大江遺跡群ボーリング試料における主 要珪藻ダイアグラム	63
図-11 1号住居址平面図及び断面図	21 (以下 平面図・断面図の記載省略)	図-45 遺物包含層、2b層、白色粘土における 植物珪酸体分析結果	66
図-12 2号住居址、14号・15号・19号土坑	22	図-46 大江遺跡群ボーリング試料における植 物珪酸体分析結果	67
図-13 3号住居址	23	図-47 大江遺跡群における蛍光X線分析結果	70
図-14 4号住居址	24		
図-15 5号住居址	25		
図-16 6号住居址	26		
図-17 7号住居址	27		
図-18 9号住居址	28		
図-19 10号・19号住居址	29		
図-20 11号・12号・21号住居址	30		
図-21 13号住居址、7号・8号土坑	31		
図-22 14号住居址、2号方形竪穴遺構、13号 土坑	32	表-1 遺跡地名表	3-4
図-23 15号住居址、11号土坑	33	表-2 放射性炭素年代測定試料一覧	58
図-24 16号・17号住居址	34	表-3 放射性炭素年代測定結果	59
図-25 18号・22号住居址、3号土坑	35	表-4 遺物包含層等における花粉分析結果	60
図-26 1号方形竪穴遺構	36	表-5 大江遺跡群における蛍光X線分析結果	69
図-27 1号・2号・4号・5号土坑	37	表-6 出土遺物観察表	72-74
図-28 6号・9号・10号土坑	38		
図-29 12号・16号・17号・18号土坑	39		
図-30 畠状遺構	40	写真図版目次	
図-31 1号溝	41・42	口絵-1 熊本市中心街より江津湖方面を望む	卷頭
図-32 2号・4号溝	43	口絵-2 調査地周辺	卷頭
図-33 3号溝	44	口絵-3 調査地全景	卷頭
図-34 5号溝	45	口絵-4 竈の袖石の石材として切り出され た自然流路(1号溝)	卷頭

写真図版目次

口絵－5	住居址や溝から出土した遺物	卷頭	写真－40	7号住居址出土遺物	86
写真－1	石鎌と鉄鎌	卷頭	写真－41	7号・10号住居址出土遺物	86
写真－2	いろいろな種類の土器	卷頭	写真－42	7号住居址出土遺物	86
写真－3	刀子、鉄・石製の劔鍤車と土鍤	卷頭	写真－43	11号住居址出土遺物	87
写真－4	墨で字が書かれた土器	卷頭	写真－44	11号住居址出土遺物	87
写真－5	遺跡の見学に来た中学生	卷頭	写真－45	16号住居址出土遺物	87
写真－6	現地説明会の様子	卷頭	写真－46	17号住居址出土遺物	88
写真－7	基本上層	75	写真－47	17号住居址出土遺物	88
写真－8	作業風景	75	写真－48	17号・18号住居址出土遺物	88
写真－9	1号住居址完掘状況	75	写真－49	18号住居址・2号方形竪穴遺構出土	
写真－10	5号住居址完掘状況	76		遺物	89
写真－11	6号住居址完掘状況	76	写真－50	5号・6号・19号住居址出土遺物	89
写真－12	7号住居址完掘状況	76	写真－51	7号土坑・1号溝上層出土遺物	89
写真－13	11号住居址完掘状況	77	写真－52	1号溝上層出土遺物	90
写真－14	13号住居址完掘状況	77	写真－53	1号溝上層出土遺物	90
写真－15	15号住居址完掘状況	77	写真－54	1号溝下層出土遺物	90
写真－16	17号住居址完掘状況	78	写真－55	1号溝下層出土遺物	91
写真－17	18号住居址完掘状況	78	写真－56	1号溝下層出土遺物	91
写真－18	5号住居窓址出土状況	78	写真－57	1号溝下層出土遺物	91
写真－19	6号住居東側窓址出土状況	79	写真－58	1号溝下層出土遺物	92
写真－20	7号住居窓址出土状況	79	写真－59	1159ピット・遺物包含層出土遺物	92
写真－21	11号住居窓址出土状況	79	写真－60	遺物包含層出土遺物	92
写真－22	5号住居址遺物出土状況	80	写真－61	遺物包含層出土遺物	93
写真－23	7号住居址遺物出土状況	80	写真－62	遺物包含層出土遺物	93
写真－24	18号住居址遺物出土状況	80	写真－63	1116ピット・遺物包含層出土遺物	93
写真－25	2号方形竪穴遺構完掘状況	81	写真－64	墨書き器	94
写真－26	2号土坑完掘状況	81	写真－65	10号住居窓址出土ガラス小玉	94
写真－27	6号土坑完掘状況	81	写真－66	竈の袖石とその原岩	94
写真－28	7号土坑完掘状況	82	写真－67	住居窓内埋土から出土した種実	95
写真－29	19号土坑完掘状況	82			
写真－30	1号溝完掘状況	82			
写真－31	1号溝石材切出部出土状況	83			
写真－32	2号溝完掘状況	83			
写真－33	3号溝完掘状況	83			
写真－34	4号溝完掘状況	84			
写真－35	5号溝完掘状況	84			
写真－36	竈状遺構完掘状況	84			
写真－37	4号・5号住居址出土遺物	85			
写真－38	6号住居址出土遺物	85			
写真－39	7号住居址出土遺物	85			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

県営九品寺団地において、建物の老朽化に伴い県土木部住宅課により、県営九品寺団地建替事業が計画された。この事業の実施に先立ち、県土木部住宅課から熊本県文化課に対して、埋蔵文化財の所在の有無に関する照会があった。当地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である大江遺跡群に該当していた。

そこで、県土木部住宅課から熊本県文化課に対して、埋蔵文化財確認調査の依頼があり、文化課では、その依頼に基づき、平成15年8月13日から15日まで確認調査を実施した。その結果、遺構及び遺物が確認された。文化課では、確認調査終了後、埋蔵文化財確認調査の結果を通知した（平成15年10月24日付け教文第2153号）。これを受けて文化課へ発掘調査の依頼がなされ、平成17年1月11日から平成17年3月31日までの約3ヶ月間発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織

【2004（平成16）年度 発掘調査】

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 島津義昭（文化課長）

倉岡 博（課長補佐）

調査総括 西住欣一郎（調査第2係長）

調査担当 馬場正弘（文化財保護主事）

中尾健照（嘱託） 士野雄貴（嘱託）

内田成香（嘱託） 松野直子（嘱託）

調査事務 吉田 恵（課長補佐）

欄杭正義（主幹兼総務係長）

天野寿久（主任主事）

小谷仁志（主任主事）

調査指導及び協力者

師富国博（熊本市文化財課）、廣田静学、木村龍生、松村洋史（熊本県教育委員会）

【2005（平成17）年度 報告書作成】

整理主体 熊本県教育委員会

整理責任者 梶野英二（文化課長）

倉岡 博（課長補佐）

整理総括	西住欣一郎（調査第2係長）
整理担当	馬場正弘（文化財保護主事）
	三宅由華（嘱託） 加藤早織（嘱託）
	西口（松野）直子（嘱託）
調査事務	吉田 恵（課長補佐）
	四元正明（主幹兼総務係長）
	塚原健一（参事）
	小谷仁志（主任主事）

第3節 調査の過程

調査の経過は以下のとおりである。

1月11日よりⅠ区（981.7m²）の表土剥ぎを開始。当初から想定していたとおり、既存の建物の基礎により調査区の中央部（252.1m²）はかなり破壊されている。1月17日より作業員を入れ清掃作業・遺物包含層の掘り下げを始める。カクランがひどく除去するのにかなり手間取る。2月3日から調査区東側の深さ3m50cmをこえる巨大な流路の上半分の埋土を重機により掘削する。2月4日にカクラン及び遺物包含層の掘削がほぼ完了し、遺構検出を行う。その後、遺構のボリュームを検討するため、光波測距儀にて測量し遺構配置図を至急作成する。ここで、遺構密度が高いことが判明し、今後の調査体制の検討を行う。2月7日から遺構の掘削に入る。2月15日、自然科学分析のためのボーリングコアの採集を始める。3月4日にヘリコプターによるⅠ区の空中写真撮影を行う。3月7日にⅠ区は南側の埋め戻しを行いながら、Ⅱ区（674.9m²）の表土剥ぎを開始する。遺物包含層は、試掘で確認しているとおりほとんど削平されていた。Ⅰ区同様、調査区の中央部（242.4m²）は、既存の建物の基礎によって破壊されている。3月14日に、Ⅱ区の清掃作業を行う。カクランが非常に多い。3月15日に遺構検出を行い溝とピットが数十基検出された。その後、カクランの除去を行う。3月17日、選択社会の授業で桜山中学校から来訪される。3月18日から遺構の掘削に入る。3月26日に現地説明会を行う。午前と午後の2回行い、140名の参加者を集め。3月30日にⅡ区のラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行う。3月31日に全調査を終了する。

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

大江遺跡群が所在する熊本市は、東方に阿蘇火山がそびえ、西部は有明海（島原湾）に面している。

熊本市の北西部は、金峰火山からなり、北部・東部・南部一帯は、台地及び沖積平野によって構成されている。熊本市の地形は、阿蘇火山や金峰火山の火山活動により大方が形成され、その後の白川等の河川の堆積・浸食・活断層による断層運動及び干拓によって現在の地形が形成された。

熊本市の北部から東部にかけ台地が分布する。この台地は、火碎流台地と河成段丘からなる。火碎流台地は、ほとんどが約9万年前に阿蘇火山の大噴火の際に発生した火碎流による堆積物（Aso-4火碎流堆積物）である。これらを取り囲むように分布するのが、河成段丘の堆積物である。河成段丘の堆積物は、託麻砂礫層と保田窪砂礫層に区分できる。託麻砂礫層は、約3万年前から9万年前の間に形成され、託麻台地一帯に分布し中心街の地下にも広く伏在している。また、保田窪砂礫層は、約2万5千年

前から6千3百年前に形成され、託麻台地を縁取るように龍田付近から木山付近まで分布している。

さらに、熊本市の中央を流れる白川一帯には、海拔20m以下の低地（沖積平野）が分布している。この低地には、自然堤防と後背湿地が発達し、自然堤防は、現流路沿いのほか、離れた所（①平田町から川尻方面、②南熊本から田迎方面、③八王寺から江津町、④江津から下江津）でも見ることができる。このことは、白川が現在の流路をとる以前に、過去に他方面に流れていることを示唆しており、遺跡の分布や広がりを考察する上でも注意を払わなければならないと考えている。これらの自然堤防の多くは、現在、市街地化して平坦な低地に見えるが、その中には集落等を形成するのに都合の良い自然堤防が伏在していることを意識しなければならない。しかし、これらの自然堤防の形成時期や白川の変遷史等は十分解明されていない。これらの自然堤防上に縄文時代以降の多くの遺跡が分布しており、海面変動とともに解明されれば、過去の人々の生活についてもかなり理解されていくであろう。

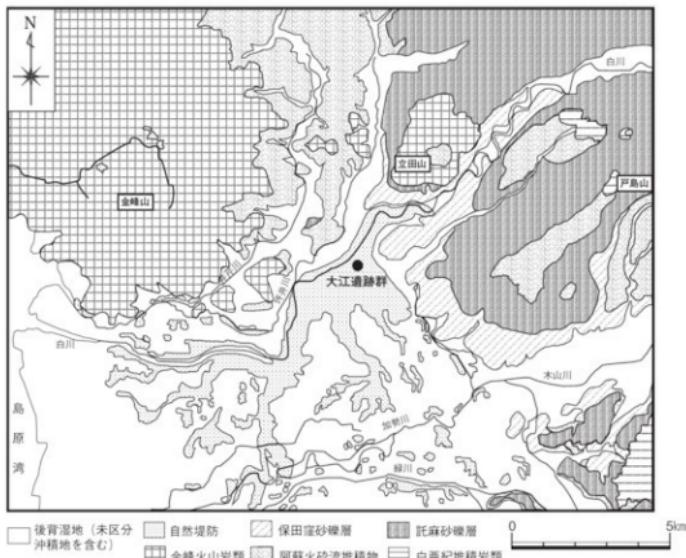


図-4 熊本市及び周辺地域の表層地質図（熊本市史研究くまもと第2号より引用、一部加筆）

尚、本調査地周辺の地下には、シルト・砂で形成される自然堤防が表層にあり、その下に砂礫で形成される託麻砂礫層が堆積している。その下位には、Aso-4 火砕流堆積物、砥川溶岩、古金峰火山岩類が順に不整合関係で堆積している。

第2節 歴史的環境

大江遺跡群が位置する託麻原台地には、多くの遺跡があり縄文時代から現代にわたって人々が営んできている。長年にわたり継続的に生活してきていることから古代人の生活立地条件としては非常に恵まれていた土地であることがうかがわれる。大江遺跡群周辺の各時代ごとの歴史的環境を概観し、最後に過去の大江遺跡群の発掘調査の成果を記しておく。

【旧石器時代】(約 13,000 年前まで)

現在のところ大江遺跡群周辺では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。

【縄文時代】(約 13,000 年前～約 2,300 年前)

縄文時代早期には、新南部遺跡群・大江遺跡群・新屋敷遺跡などから、押型文・撚糸文・塞ノ神式土器が出土している。縄文時代前期・中期には、気候の温暖化による海面の上昇(縄文海進)があったことで知られている(詳細は、後述する)。この時代の遺跡としては、轟式・曾畠式・阿高式土器が出土している大江遺跡群や新南部遺跡群がある。後期には、周辺地域では数少ない貝塚である渡鹿貝塚や後

期の標識土器名(北久根山式土器)となった新南部遺跡群等がある。晩期では、晩期末の遺物が多量に出土している江津湖遺跡群がある。

【弥生時代】(約 2,300 ～約 1,700 年前)

弥生時代前期では、江津湖遺跡群や新屋敷遺跡があり集落址が確認されている。中期から後期の遺跡としては、新南部遺跡群・大江白川遺跡・神水遺跡などで集落址が確認されている。表-1 中の他の遺跡では、甕棺が出土している。

【古墳時代】(約 1,700 ～約 1,400 年前)

古墳時代に入ると、江津湖遺跡群・神水遺跡・国分寺跡では、集落址が確認されている。後期になると、大江遺跡群・本庄遺跡・新南部遺跡群・新屋敷遺跡で集落址が確認されている。

【歴史時代】(約 1,400 年前以降)

奈良・平安時代になると、大江遺跡群周辺では隆盛をみせる。奈良時代中ごろに益城國府から託麻郡に國府が移り(諸説あり)、741年の國分寺・國分尼寺建立の詔により國分寺・國分尼寺が建立された。このように政治・文化の中心地となつたためか、大江遺跡群周辺では、集落も急速に繁栄したようである。その後、9世紀に入り集落が縮小されているようである。その縮小された区域では、水田がつくられ中世まで存続している。

最後に、これまでの大江遺跡群の調査で、検出

表-1 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	大江遺跡群	大江 3 丁目	縄文～明治	包藏地		弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
2	新屋敷遺跡	新屋敷町	弥生～中世	包藏地		甕棺
3	大江白川遺跡	大江 1 丁目	縄文～平安	包藏地		熊大埋文調査室調査
4	本庄遺跡 (熊大病院敷地)	本荘 2 丁目	古墳～平安	包藏地		大江義塾：県指定史跡、徳富旧邸：市指定史跡
5	大江義塾跡 (旧徳富邸)	大江 4 丁目	明治	建造物	県	九品寺 4 丁目
6	不動院跡の六地蔵塔	九品寺 4 丁目	中世	石造物	県	県指定重要文化財
7	出水國府跡	九品寺、國府、國府本町	弥生～中世	包藏地		
8	熊本平野条里跡		古代・中世	生産		
9	北水前寺遺跡	水前寺 3 丁目	奈良・平安	包藏地		
10	西水前寺町遺跡	水前寺 1 丁目	縄文～中世	包藏地		縄文阿高系
11	水前寺庵寺跡	水前寺公園	奈良・平安	包藏地		
12	水前寺庵寺塔心礎石	水前寺公園	奈良	寺社	市	塔部分について市指定史跡

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
13	水前寺成趣園	水前寺公園	江戸	庭園	国	国指定史跡及び名勝、細川忠利、山 水式
14	古今伝授の間	水前寺公園	江戸	建造物	県	県指定重要文化財、細川藤孝古今 集伝授、かやぶき茶室
15	陣山廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安	寺社		国分尼寺推定地
16	洋学校教師館	水前寺公園	明治	建造物	県	県指定重要文化財
17	肥後國分寺	出水1丁目 熊野 神社	奈良	寺社	市	塔心礎並びに礎石が市指定
18	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	包蔵地		県・市による多数の調査あり
19	神水遺跡	神水本町・出水2 丁目	縄文～平安	包蔵地		県・市調査。
20	江津湖遺跡群	神水町・画岡町ほ か	縄文～中世	包蔵地		
21	八丁馬場板碑群	神水本町	中世	石造物	3基	
22	健軍神社杉馬場	健軍2丁目・神水 1丁目	江戸	参道	市	市指定史跡
23	健軍京塚下遺跡	神水1丁目	縄文・古代	包蔵地		
24	南平上遺跡	新大江3丁目南平 上	奈良・平安	包蔵地		
25	帶山遺跡群	帶山1丁目	縄文～平安	包蔵地		布目瓦、曾畠、阿高、竹崎
26	渡鹿板碑	大江渡鹿	中世	石造物		积迦座像、天文16年
27	渡鹿遺跡群	渡鹿5丁目	縄文・弥生	包蔵地		渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖 式甕棺、板碑积迦像天文16年銘
28	渡鹿菅原神社境内	渡鹿6丁目		寺社	市	市指定史跡
29	辻遺跡	渡鹿7丁目	縄文～平安	包蔵地		縄文後晩期、へら描き土器・墨書き 土器
30	新南部西原遺跡	新南部町	縄文～平安	集落		
31	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平 安	包蔵地		県北バイパス調査、市マンション 調査、田辺昭三調査などあり
32	宇留毛B遺跡	黒髪6丁目	縄文～平安	包蔵地		
33	宇留毛A遺跡	黒髪6丁目	縄文	包蔵地		
34	カブト山遺跡	黒髪町宇留毛字甲 山	縄文	包蔵地		早期、轟B、北久根山、黒川、山 の寺
35	桜山中学校校庭遺跡	黒髪5丁目	古墳～平安	包蔵地		
36	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		一帯に甕棺墓群
37	旧第五高等中学校本 館・化学実験場・表 門	黒髪2丁目	明治	建造物	国	国指定重要文化財、イギリスの フィーン・アン様式
38	上河原遺跡	黒髪町	縄文～古代	包蔵地		
39	七軒町遺跡	七軒町	縄文～中世	包蔵地		
40	一夜塘	小幡町	近世	建造物		
41	子倒遺跡	子倒町	縄文～中世	包蔵地		
42	お菜園跡遺跡	菜園町	近世	包蔵地		藩主重寶開園
43	安元元年笠塔婆塔身	坪井4丁目	古代	石造物	県	県重要文化財、本光寺
44	報恩寺境内外造物	坪井3丁目	中世	石造物		豪潮宝篋印塔・坪井の跡
45	採鈎園跡	坪井4丁目	近世	園池		
46	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	包蔵地		
48	峰雲院跨墓地	中坪井	中世	墓地		
49	淨国寺跡	壇川1丁目	中世	寺社		

された遺構は、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、土坑、水田址、道路址、井戸址などが確認されており、その数500軒以上にも及ぶ。また、出土遺物については、須恵器・土師器・鍛錬車・刀子・石器等数多く出土しているほか、瓦・円面鏡・墨書き土器など特徴的な遺物も少なくない。竪穴住居址は、こ

れらの遺構・出土遺物から、時期的には6世紀後半から9世紀前半と考えられており、特に8世紀後半から9世紀前半にかけ隆盛をみせていると考えられている。本遺跡群は、古代の集落の伸張と衰退をうかがい知ることができる貴重な遺跡であると考えられる。

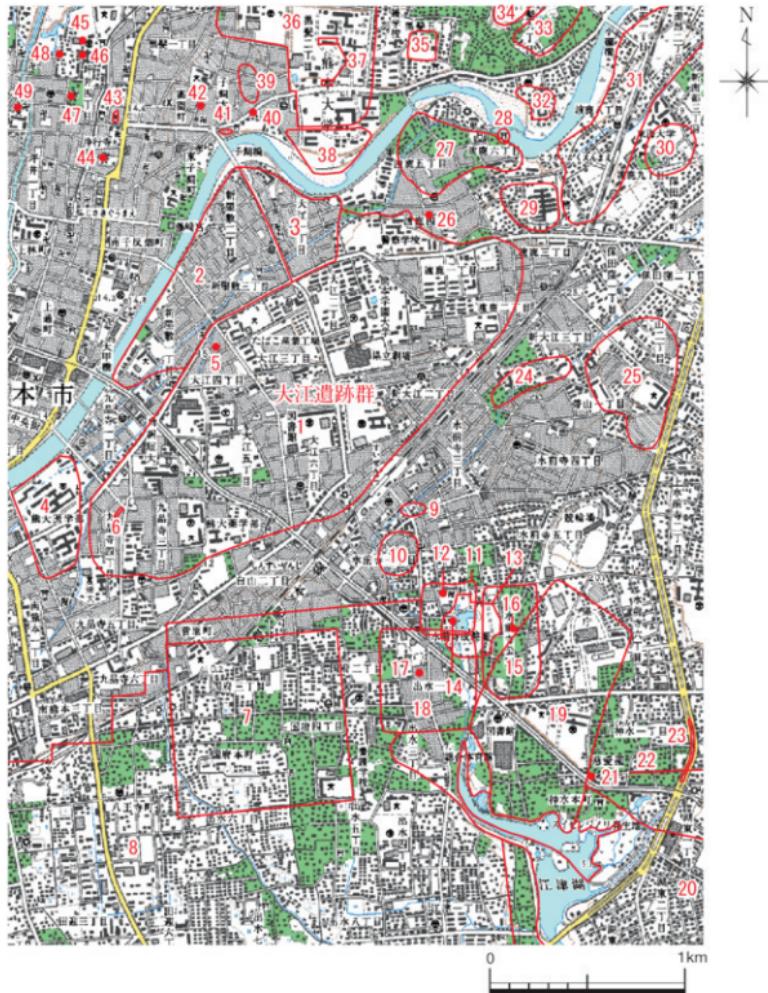


図-5 大江遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25,000)



図-6 調査地点位置図

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の方法

調査にあたっては、以下の方法により実施した。

1 調査区設定

調査総面積は、1,657m²である。調査地は、東西に長い長方形の形状を呈している。廃土等の仮置き等の影響で西半分をI区、東半分をII区として設定し調査を行った。

2 グリッド調査法

国土座標に準拠した10mグリッドを基本単位とするグリッド法を用いた。国土座標に基づき大江遺跡群座標を設定した。国土座標(X, Y)=(-23100, -26440)を大江遺跡群座標の原点(x, y)=(0, 0)として、三桁の正の整数で表すこととした。その変換式は、以下の通りである。

$$(x, y) = (23100 + \text{国土X座標}, 26440 + \text{国土Y座標})$$



図-7 グリッド設定図 (縮尺1/500)

() 内の数値は、遺跡内座標値

尚、座標系は、旧日本測地系で行っている。

また、グリッド杭名は、その座標値 (X=100a+10b, Y=100c+10d) を「acbd」として表し、各グリッドの南西隅の杭名をグリッド名とした。

3 分層調査法

層位については、遺構外と遺構内の層の区別を行うため、遺構外の層については、算用数字で上層から1層、2層と記標し、遺構内の層はこれと区別するため算用数字の前に「埋」を付け埋1層、埋2層と記標した。尚、漸移層や新たに認識された層が出てきたときには、アルファベットの小文字をつけ細分した。

4 実測図作成

遺構の実測図は、1/20の縮尺で断面図、平面図及び遺物出土状況図を作成した。竈については1/10の縮尺で作成した。

尚、遺構の実測図作成、地形測量、長大な土層断面図作成にあたっては、実測の迅速化を図るために光波測距儀を活用したデジタル図化を行った。デジタル図化には、アイシン精機製の遺構実測支援ソフト「遺構くん」を使用した。

5 写真撮影

検出時、遺物出土時、使用（使用当時の状態）時、掘方時の各段階において、適宜モノクロとカラーで、小型カメラと中型カメラを使用し撮影した。

6 遺物取り上げ

出土遺物の取り上げについては、一括で取り上げる方法と出土位置と標高を記録して取り上げる方法を必要に応じて採用した。

尚、座標は遺物のドットマップに対応できるよう光波測距儀により3次元データとして記録している。

7 地形測量

当時の地形復元のため、遺構検出面にて、20cmピッチの等高線図を作成した。

第2節 地層層序

1 完新世（1万年前から現代）の堆積物の層序と古環境調査

本調査地における完新世の堆積物の層序については、図-8の総合柱状図に示すとおりである。

本調査地が、所在する九品寺一帯は、宅地化や開発が進み旧地形は残っておらず過去の地形を復元することもままならない。また、本遺跡や周辺の遺跡では、有効な鍵層も検出できないことから、層ができる時代を特定できず、地層について不明な点も多い。そこで、これらの不明な点を調べるために、放射性炭素年代測定や花粉分析、珪藻、植物珪酸体などの微化石分析により各層ごとの生成年代、堆積環境や植生の調査を試みた。尚、試料は、本調査地で行ったボーリングのコア試料を使用した。また、詳しい分析結果は、第IV章 理化学分析に掲載している。以下、これらの自然科学分析の結果より古環境の変遷を考察する。

年代測定では、深度0.85mの黒褐色土（2b層）で $1,960 \pm 40$ y BP（年前）、深度2.9mの黒色粘性土（9層）で $3,740 \pm 40$ y BP、深度6.1mの褐灰色粘性土（12層）で $3,840 \pm 40$ y BP、深度7.4mの暗灰色粘性土（13層）で $4,300 \pm 60$ y BP、深度8.0mの黒色砂混り粘性土（15層上部層）で $5,910 \pm 50$ y BP、深度8.9mの暗灰色砂混り粘性土（15層下部層）で $19,420 \pm 90$ y BPの年代が得られている。このことから、2b層が弥生時代、3層から8層は、弥生時代から縄文中期の幅をもち、9層から12層が縄文中期、13層が縄文前期、15層上部が縄文早期、15層下部になると旧石器時代に相当するものと考えられる。

花粉分析結果により、本調査地周辺の植生は大きく5期に分類される。下位から順番に第I期（15層～16層）、第II期（13層）、第III期（12層）、第IV期（5層～9層）、第V期（2b層）とする。第I期は、イネ科、タンボボ亜科、ヨモギ属などの草木類が少量検出された。タンボボ亜科、ヨモギ属が認められるため、この時期は、比較的乾燥していたと考えられる。第II期は、カシ類やシイ類などの照葉樹を主体とし、ハンノキ属、エノキ属、ニレ属など

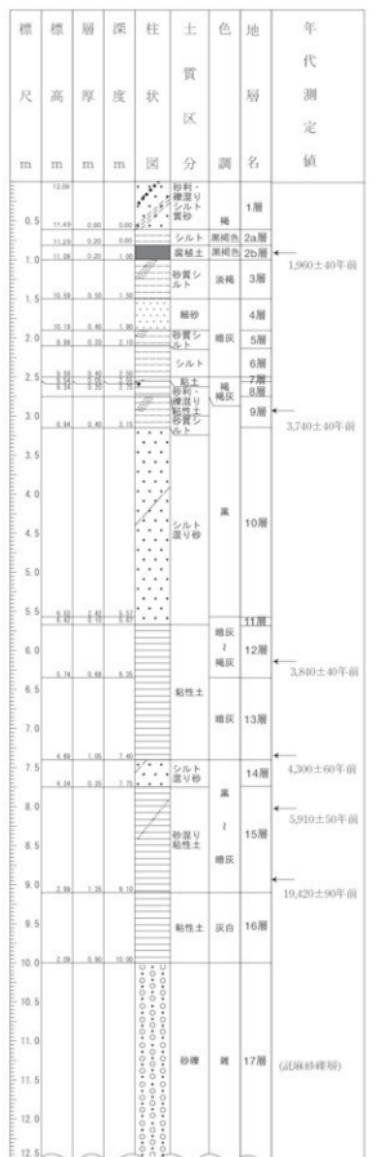


図-8 完新世における総合柱状図

どの落葉樹などの森林が生育しており、森林の周辺では、イネ科、カヤツリグサ科などの草木類が生育していたと考えられる。第Ⅲ期は、森林がやや減り、カヤツリグサ科、イネ科などの草木が主体となり、周辺ではカシ類やシイ類などの照葉樹林が分布するような環境であった。第Ⅳ期は、花粉はほとんど検出されないことから、乾燥を繰り返す環境、水流のある環境、土層の堆積速度が速かった環境などが考えられる。第Ⅴ期は、ネギ属、ニガウリ属、ヨモギ属、ケシ属近似種が生育しており、日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられる。

珪藻分析結果により、15層から16層では、珪藻がほとんど検出されないことから、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境や水流のある環境等が考えられるが、堆積環境を推定するのは困難である。ただし、15層上部の深度8.0m付近から、微量の汽水～海水生種が認められるため何らか海水の影響を受けていると考えられる。13層下部の深度7.4m付近では、淡～汽水生種が比較的多く検出できることから、温潤な環境であり、淡水から汽水の影響を受けていると考えられる。13層上部深度6.9m付近になると、汽水の影響が若干あるものの、ほとんど受けなくなり、河川の影響を受けるような環境となったと考えられる。12層の深度6.1m付近では、陸城が拡大し付近には水流の影響のある湿地があるような環境であったことが考えられる。10層付近は砂が卓越していることから、珪藻分析は行っていない。砂が堆積するような環境であったことから、河川の自然堤防付近の環境であったことが推測できる。9層は、流水性種が検出できることから、河川等の流水の影響もある環境であったことが考えられる。6層では、ほとんど珪藻が検出されないため、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境や水流のある環境等が推定される。弥生時代中期の2b層では、珪藻がほとんど検出されないことから堆積環境を特定することは困難であるが、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境、水流のある環境及び堆積速度が速かつたことが推定される。古墳時代及び古代の遺物包含層である2a層では、温潤な陸域の環境で、季節的・一時的に流水域と止水域を伴う環境であった

ことが推定できる。また、この2a層から海水砂質干涸環境指標種群が認められる。地質的に海水の影響を受けた層相を示していないことから、人為的に海草等を持ち込まれたことが推定される。

植物珪酸体分析により、16層は、比較的乾燥した環境である。15層の下部は比較的乾燥し寒冷な気候であったことが推定できる。15層上部では、草原的な環境で周辺には照葉樹林が分布するような比較的温暖な気候であった。13層から14層では、海綿骨針が見られることから海水の影響を受ける環境にあったことが推定される。12層から13層にかけ河川の影響でイネ科植物が生育できない環境で、深度6.1m付近の12層では一時的にヨシ属が繁茂するような湿地になっていたと考えられる。8層から9層では、ススキ属やヨシ属が見られ河川の影響のある環境であったことが考えられる。6層では、植物珪酸体はほとんど検出できなかったため、河川の影響のある環境であったことが予想される。弥生中期の2b層では、ススキ属などが生育する日当たりの良い草原で、部分的にヨシ属が生育する湿地もあるような環境であったことが推定でき、調査地及び周辺では稲作が行われていたと考えられる。また、古墳時代及び古代の遺物包含層である2a層からイネが多量に検出されていることから、主に稲作が行われていたことが推定できる。この時期の後半では、ムギの栽培も行われていたと考えられる。周辺は、ススキ属や照葉樹が生育していた。

以上をまとめると、深度8m下位の環境は乾燥し、比較的寒冷であった。深度8m下位を境に植生・環境・年代に大きな差異が見られ環境的に温暖化する。深度8m下位を境に不整合がありこの間堆積物が欠落している可能性がある。約6,000年前の深度8m付近で温暖化の海面上昇（縄文海進）のピークを示し、海水の影響を少なからず受けている。その後、海平面が後退するものの、約3,800年前までは湿地が存在していたと考えられる。その後は、河川の影響を受ける陸域となり草原化する。約2,000年前には稲作が行われるようになり、古墳時代・古代では盛んに行われていたと考えられる。

2 基本層序（調査地の層位と遺物包含層）

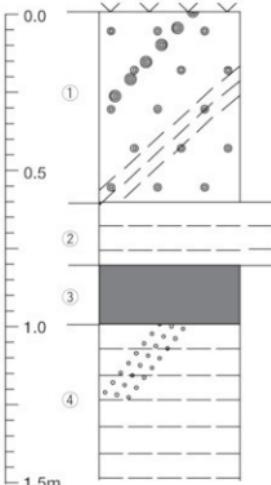


図-9 基本土層模式図

基本層序は、調査区南面にて作成した。

- ① 1層 表土。暗褐色(10YR3/3)シルト。ややしまりがあるが、粘性はない。やや砂質が強い。6・26水害の堆積物が厚いところで10cmほど堆積している。
- ② 2a層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト。層厚は約20cm程度である。遺物包含層であり、土師器片及び須恵器片を含む。出土量は少ない。しまりは強く、粘性は中間程度である。下位の2b層よりは、灰色及び褐色味が強く、やや明るく見える。本層は、Ⅱ区内には堆積しない。
- ③ 2b層 黒褐色(7.5YR2/2)土。層厚は、約20cm程度ある。腐植に富み土壤化している。いわゆる「クロボク土」である。しまりは中間程度であり、粘性に富む。本層は、調査区一円にあるわけではなく、調査区西側から南西側に主に堆積し、Ⅱ区内には堆積しない。
- ④ 3層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。層厚は50cm以上ある。しまりは弱く、粘性はない。この層からの出土遺物はない。遺構検出面である。



図-10 遺構配置図（縮尺1/220）

第3節 遺構

1 はじめに

遺構として、竪穴住居址・掘立柱住居址・土坑・溝・方形竪穴遺構・畝状遺構・ピット群を検出した（図-10）。時代的には、ほとんど古墳時代から古代にかけての遺構である。調査区の中央に1号溝（自然流路）があり、これより西側に上記の遺構が認められたが、1号溝の東側には住居址は認められなかった。東側については、遺物も極めて少なく生活の痕跡が極端に少ない。1号溝（自然流路）は、住居域の境界をなしているようである。

尚、以下記載する主軸方向は、住居址については、遺構の中心からみて竪方向、竪がなければ長軸方向を指している。また、土坑や方形竪穴遺構については、長軸の北方位方向を指している。主軸の表記の仕方は、真北から 27° 西方向に向いていれば、 $N27^{\circ}W$ としている。

2 住居址

住居址として確認したのは、総数22軒である。カクランが非常に多く、激しい切り合いがあり、その一部しか残存せず、住居址として認定することが非常に困難であった。そこで、住居址の基準として、規格化された形状、硬化面、柱穴、竪の残存の有無によって住居址として認定した。なお、方形を呈しており、竪址、柱穴もないような遺構で小規模なものは、住居址とは別に方形竪穴遺構として扱った。

1号住居址（図-11）

西側半分は調査区外であり詳細は明らかでないが、1辺約4.1mの規模をもつ隅丸方形プランを想定している。主軸は、N $27^{\circ}W$ である。柱穴は2本確認でき、南東隅の柱穴周辺に硬化面が検出できた。竪の位置は西側半分が調査区外であるため不明である。検出面から床面までの深さは、約20cmである。出土遺物は少なく、土師器の細片が出土する。

2号住居址（図-12）

1辺約5.2mの規模の方形プランを想定している。主軸は、N $51^{\circ}W$ である。北側は調査区外で、住居址と複雑に切り合っているため詳細は不明である。柱穴

は、2基検出できた。検出面から床面までの深さは、約12cmである。竪は、検出できていない。床面は平坦であり、硬化面は柱穴を中心に中央部に広がる。埋土中から土師器の碎片が若干出土している。南側の15号土坑は、付帯設備ではないかと考えている。

3号住居址（図-13）

1辺約5.5mの規模の方形プランを想定している。主軸は、N $49^{\circ}W$ である。周囲の5軒の住居址と複雑に切り合う。調査中、周囲の遺構との切り合い関係を把握するためにかなりの時間を要した。柱穴は、4基検出した。検出面から床面までの深さは、3cm～4cmで非常に浅い。明瞭な硬化面は、住居北側と南側の柱穴周辺に確認できた。出土遺物は、柱穴から土師器の碎片が若干出土する。

4号住居址（図-14）

1辺約5.6mの規模の方形プランを想定している。主軸は、N $23^{\circ}W$ である。南側は、九品寺团地の基礎により破壊されているため正確な規模は不明である。5号・6号住居址、1号方形竪穴遺構と切り合う。硬化面は、東側の一部しか存在が認められなかつた。検出面から床面までの深さは、16cm～23cmである。柱は4本柱を想定しており、北側の2本の柱穴を確認した。竪は、北辺の中央部に設けられていたが、上部の構築物は、破壊されており中央部に袖石の部材（凝灰質砂岩）が1点だけ崩落していた。出土遺物では、土師器蓋が出土した。

5号住居址（図-15）

南側は、4号住居址により破壊されている。1辺が、約3.7mの規模の方形プランを想定している。主軸は、N $62^{\circ}W$ であり、他の住居址と比べやや西に軸が傾いている。硬化面は、竪周辺から中央部を中心に認められる。検出面から床面までの深さは、約10cmである。柱穴は、3隅に3基あり、4本柱を想定しているが、もう一隅にあるだろうと考えられる柱穴は検出できなかつた。床面直上から、須恵器蓋と高杯が出土している。竪は、西辺の中央部に設けられており、袖部には凝灰質砂岩と粘土の袖石が

地中に埋め込まれていた。これらの上には、天井部の粘土が崩落していた。

6号住居址（図-16）

住居址の南側は、団地の基礎及び16号住居址によって破壊され、全体の7割程度の残存率と思われる。方形プランであるが、1辺の長さは南側の破壊のため不明。残存している部分だけでも1辺が5mを超えており。主軸はN31°Wであり、竈は2箇所検出され、北辺と東辺に設けてある。硬化面は、北辺の竈の周辺に残存している。検出面から床面までの深さは、約10cmである。北辺の竈の構築物は北辺の内にあるのに対し、東辺の竈は、東辺の外にあり、張り出している。もともと東辺の竈を使用しており、これを廃棄した後北側の竈を使用したようである。竈の上部の構築物は、ほとんど破壊されており残存していないが、袖石のみが残っている状態である。尚、東辺の竈の袖石の石材は、粘土であり、北辺の袖石の石材は凝灰質砂岩である。北辺の竈の袖石は、埋土中にあり竈周辺に散乱した状態で出土した。床面上から土師器環が出土している。

7号住居址（図-17）

7号住居址は、東側を1号方形竪穴遺構によって切られており、畝状遺構の溝によって竈の南側を破壊されている。長辺が約4.7mで短辺約4.3mの隅丸方形プランであり、主軸を、N37°Wにもつ住居址である。検出面から床面までの深さは、約15cm程度である。硬化面は、ほぼ床全面に広がる。柱穴は、整然と並ぶものは検出されなかった。南辺には、2～3cm程度掘りこんだ側壁溝が認められた。北辺でも部分的ではあるが、その痕跡が認められた。竈は、北辺の中央部に施してあり、残りもかなり良い状態である。竈の掘方は、住居址の北辺より張り出しまなく内側で納まっていた。表土を掘削した時点での竈の袖石と竈の天井部の粘土が検出できた。長辺30cm程度の凝灰質砂岩と粘土の部材が竈の袖部両サイドに埋め込んで配置され、中央部には崩落したと考えられる粘土でできた部材が埋まっていた。崩落した粘土の後方に角柱形の凝灰質砂岩の支柱を立った

状態で検出した。土師器の甕が竈と住居址の南辺の床面上から、高环は竈西側より出土している。

8号住居址（図-10）

8号住居址は、10号住居址や6号住居址によって南側は切られており、北辺も中央部を現代のカクランによって破壊されている。また、硬化面も残存しておらず、柱穴や竈も検出できず詳細は不明である。

9号住居址（図-18）

北側の一部は調査区外である。南側は、3号住居址によって破壊されている。1辺が約5.6mの隅丸方形プランを想定している。主軸は、N54°Wである。竈の痕跡はない。埋土もほとんど残っておらず、検出面と床面がほぼ同じ高さであり、床の硬化面が露出した状態で検出される。柱穴は、主軸と直行する軸方向に2基検出している。他整然と並ぶ柱穴は検出されていない。出土遺物も細片のみである。

10号住居址（図-19）

10号住居址は、1辺が5.0mの方形プランを想定している。主軸は、N24°Wであり、北辺に竈が設けてある。検出面から床面までの深さは、残りの良いところで16cmである。埋土中から破壊された竈の袖石が竈位置周辺及び南側の19号住居址上の埋土の広範囲にわたり散乱した状態で出土した。竈の南側は、現代のカクランで破壊されている。柱穴は4基を検出し、内1基は、南側の19号住居址内から1基を確認した。床面上から須恵器環や土師器甕の破片が出土する。尚、明瞭な硬化面は、検出できなかつたが、硬化した部分が竈周辺から中央部にかけ検出できた。

11号住居址（図-20）

遺構の西側及び北東部は、現代のカクラン等により破壊されている。平面形は、1辺が4.5mの方形プランである。主軸は、N75°Eで、4本柱をもつ住居址を想定しており、東辺側に2基柱穴を確認した。竈は東辺に設けてあり、竈の袖石が周辺に散乱した状態で検出した。尚、本調査地においては、東辺に

竈を持つ住居址は3軒であるが、その内の1軒である。竈は、上部の構築物が破壊されている。袖部には、構築物の粘土が焼土を覆うように堆積していた。竈の中央には、支柱として、粘土を角柱形に加工したものを埋め込んでいた。炊き出し口周辺には炭化物が多く検出できた。検出面から床面までの深さは、約20cm程度ある。硬化面は竈前や柱周辺で顕著であり、かなりしっかりした硬化面である。床面直上の竈西側において、土師器壺、高壺が竈の袖石の部材と伴に出土した。

12号住居址（図-20）

12号住居址は、11号住居址及び17号住居址によって切られている住居址である。残存部は、南側の一部であり、住居址の平面形や住居址内の全体的な構造を知ることは不可能である。残存する南辺で、少なくとも4.2mはあり、南隅の形状等から、1辺が4m以上はある方形プランであることが推測できる。検出面から床面までの深さは、8cm程度あり、硬化面は中央から東側にかけ分布する。柱穴は1基検出した。11号住居址により、12号住居址のほとんどが破壊されているため、詳細は不明である。また、遺物も出土していない。

13号住居址（図-21）

住居址の北側は、団地の基礎によって破壊され、中央部も部分的に削平されており、詳細は不明である。また、北西隅は、17号住居址によって切られしており、中央部から東側においては7・8号土坑によって切られている。残存する部分から判断すると、1辺が4.5mの方形プランで、主軸はN25°Wであると考えられる。かなりしっかりした硬化面が中央の削平部の南側に残っていた。柱穴は、削平部から2基検出しており中央部に配列されている。検出面から床面までの深さは、約6cmである。竈は、住居址北側及び東側が破壊されているため有無についてわからず。出土遺物は細片のみでほとんどない。

14号住居址（図-22）

方形の竪穴住居址の北東隅部分が、15号住居址

と2号方形竪穴遺構によって切られ詳細は不明。硬化面があり、床を貼っていた。検出面から床面までの深さは、約10cm程度である。

15号住居址（図-23）

1辺が、長軸5.2m、短軸4.4mの方形プランである。主軸は、N24°Wである。検出面から床面までの深さは、約10cm程度ある。中央部は、11号土坑によって、西側は2号方形竪穴遺構によって切られている。竈の構築物は、破壊され検出できなかったが、粘土でつくられた袖石が床面より約10cm程度盛られた土に置かれていた。袖石の下には、多量の炭化物と焼土塊が認められ、北辺中央部では、埋土中に竈の袖石の部材が散乱していることから、北辺の中央部に竈が設けられていたと考えられる。掘方において北辺に張り出し部があるわけではなく、張り出し部を設けず、床面よりやや高い位置に竈が設けられていた可能性がある。柱穴は4基確認されており4本柱を想定している。硬化面は北辺側の2本の柱周辺に認められた。出土遺物は、極端に少なく、細片のみである。

16号住居址（図-24）

16号住居址は、6号住居址を切って検出される。北辺の一部のみの検出であり、ほとんどが団地の基礎のため破壊されていた。平面形は、規格化された方形ではなく、不定形で検出される。柱穴を1基検出した。検出面から床面までの深さは、約16cmあり、硬化面は、部分的に点在して検出された。竈の残りも非常に悪く、構築物はほとんど破壊されている。掘方のみが残存している状態である。土師器盤が床面直上から出土している。

17号住居址（図-24）

1辺が、約4.1mの方形プランを想定している。東側は、団地の基礎によって破壊され詳細は不明である。主軸は、S67°Wである。検出面から床面までの深さは、約16cmある。硬化面は、かなりしっかりしており床全面に分布している。柱穴は西側の両隅にあり4本柱の竪穴住居址と考えられる。竈は、西辺の

中央部に設けてあるが、上部の構築物は破壊されており詳細は不明である。炊き出し口付近では、床面から約10cm掘り込んでおり、その両脇に袖石などの構築物を設置していたものと考えられる。炊き出し口周辺では、多量の炭化物と焼土が認められた。床面直上から土師器の皿、壺、甕が出土している。

18号住居址（図-25）

平面形は、基本的には方形であるが、南東隅に竈を含む張り出し部があり、かなりいびつな形状を呈する。主軸は、S74°Eである。北東部は、3号土坑によって切られている。竈の位置は、東辺の中央部にあるのではなくやや南に設ける。本調査区では、特異な住居址である。硬化面は、中央部に分布している。柱穴は、検出されなかった。竈位置には、袖石の部材が散乱した状態で検出され原形を留めておらず、構築物はほとんど破壊されている。竈付近から土師器の甕、床面直上から土師器の皿、須恵器の蓋が出土した。

19号住居址（図-19）

長軸4.7m、短軸3.5mの長方形プランを想定している。検出面と残存する貼床がほぼ同じ高さであり、壁の残りも非常に悪い。硬化面も上位の10号住居址によってほとんど削平されている。主軸は、N27°Wであり、北辺の中央付近に竈が設けてあったようである。北辺中央部付近で竈内の埋土が検出されている。床面より掘り込まれた部分（火床部）に酸化して赤色化した焼土塊が堆積し、袖石の破片が上から被さっていた。出土状況から判断してこの位置に竈があったことは確実であろう。しかし、竈の位置である北辺に、現代のカクランがあり大部分が破壊されているため詳細は不明である。遺物は、ほとんど細片である。

20号住居址（図-10）

10号・19号・3号住居址の埋土を取り除いた後検出された住居址であり、埋土の残りも非常に悪く、短軸が約3.7mであることは、僅かに残存する部分からわかるが、平面形全体を想定することは不可能で

ある。整然と並ぶ柱穴も検出できなかった。遺物は出土しなかった。

21号住居址（図-20）

11号・12号・17号住居址の下位に残存する住居址であり、2隅と各辺などの遺構の周辺部を検出したが、ほとんどが上位の新しい住居址によって破壊されており詳細は不明。本調査区の他の住居址の特徴を参考に、平面形や規模から、住居址として分類しているが、遺構内から明瞭な硬化面、竈、柱穴も検出できなかった。残存部から推定すると1辺約5.3mはある方形プランの竪穴住居址であるようである。

22号住居址（図-25）

桁行約5.4m（18尺）、梁行3.6m（12尺）の3間×2間の掘立柱建物である。桁行方向は、N63°Eである。柱間寸法は、桁行約1.7m、梁行約1.8mである。柱穴は、直径約50cm程度であり、深さは30cm～40cmである。北西隅の柱穴は、やや浅い。柱穴に柱痕は確認できなかった。

3 方形竪穴遺構

方形を呈しており、竈、柱穴を作わないような遺構については、方形竪穴遺構として扱って記載する。調査区から2基検出した。用途は不明である。

1号方形竪穴遺構（図-26）

0047グリッドと0048グリッドにまたがって検出した。また、床面と検出面が同じレベルであるため、図-26では下場のみ図化した。中央部に硬化面が認められたものの、竈や柱穴はなく本調査区の他の住居址と比べ規模が小さく性格を異にしていることにより、住居址と区別して方形竪穴遺構として取り扱った。4号住居址や7号住居址と切り合いを示すが、これらよりも新しい。長軸3.2m、短軸2.9m程度で、主軸は、N9°Wである。やや北に寄っているようだが他の住居址とは主軸を異にすることはない。

2号方形竪穴遺構（図-22）

0037グリッドで検出した。1号方形竪穴遺構と同様、中央部に硬化面が認められるが、竈や柱穴が

検出できない。14号住居址や15号住居址と切り合いで示すが、いずれよりも新しい。南側は調査区外で不明。長軸は少なくとも3.1mよりは長く、短軸は3.0mである。主軸は、N10°Wである。1号方形竪穴遺構と規模・主軸の方向が非常に似ている。同じ性格の遺構と考えられる。床上に埋土は1層であるが、この層から須恵器蓋が出土している。時期的には、竪穴住居の規模が小型化し、集落が衰退していく時期のものではないかと考えている。

4 土坑

調査区から、総数19基検出した。平面形で分類すると円形、楕円形、方形に区分できる。方形のものには長軸が2m以上の長さがあるものが4基ほどあった。現在のところ土坑墓と推測している。どの土坑も言えることであるが出土遺物が少なく、ほとんどが細片である。時代を決定するには不足している。切り合い関係や出土遺物の細片から多くは古代の土坑であるようである。

1号土坑（図-27）

0150グリッドで検出した。切り合い関係はなく、長径約1.4m、短径約1.1mの楕円形プランであり、主軸は、N17°Eをとる。検出面からの深さ約10cmである。

2号土坑（図-27）

0150グリッドで検出した。2号土坑は、北側にあるピットを切っている。直径約1.1mのほぼ円形プランを呈している。検出面からの深さは、約20cmである。埋土には、少量の炭化物が混入していた。

3号土坑（図-25）

0150グリッドで検出した。西側は、18号住居址を切っており、東側では、4号土坑と接する。長径約1.0m、短径0.8mの楕円形プランであり、主軸は、N66°Eをとる。検出面からの深さは、約15cmである。埋土は、2層あり上層から土師器の細片が出土している。

4号土坑（図-27）

0150グリッドで検出した。東側は、カクランによって破壊されており詳細は不明。残存する形状から長軸方向を東西にとする楕円形プランの土坑と推定している。残存する長径が約52cm、短径65cmであり、主軸は、N70°Wである。検出面からの深さは、約10cmである。

5号土坑（図-27）

0038グリッドで検出した。南側は、調査区外であり全容は不明。残存する部分から推定すると南北に軸をとる楕円形の土坑ではないかと考えられる。残存する長径約60cm、短径約90cmであり、主軸はN8°Wをとる。検出面からの深さは、約45cmである。

6号土坑（図-28）

0038グリッドで検出した。西側は、15号住居址と接する。長径約1.5m、短径約1.2mの楕円形プランであり、主軸はN18°Wである。検出面からの深さは、約50cmである。

7号土坑（図-21）

0038グリッドで検出した。13号住居址と切りあっており7号土坑が新しい。北側は、団地の基礎によって破壊されている。長径約1.3m、短径0.8mの楕円形プランであり、主軸はN43°Wである。検出面からの深さは、約25cmであり、南側で20cmほどピット上に掘り込まれていた。埋土は2層あり、上層から土師器坏が出土している。

8号土坑（図-21）

0038グリッドの13号住居址内の位置で検出。8号土坑周辺は、団地の基礎により13号住居址の埋土が削平されており13号住居址との切り合い関係は不明。直径約60cmのほぼ円形プランである。残存する壁高は約35cmである。

9号土坑（図-28）

0140グリッドで9号住居址と接して検出した。長軸1.4m、短軸1.1mの隅丸方形プランの土坑で

ある。主軸は、N71°Eである。検出面からの深さは、約40cmあり、他の土坑よりは深い。須恵器の甕胴部片が出土している。

10号土坑（図-28）

0151グリッドで検出した。南側は、カクランによって破壊されている。東側は、18号土坑と接する。直径約70cmの円形プランである。検出面からの深さは、西側に傾斜して深くなり約10cmである。浅いところは、約6cmである。

11号土坑（図-23）

15号住居址を切っている土坑である。土坑周辺が削平を受けており埋土の残りが悪い。15号住居址の貼床を切っていることから、土坑が新しい。長径2.3m、短径1.2mの隅丸方形プランである。主軸は、N38°Wである。残存壁高は、約10cmであり、埋土には、炭化物が混在する。床面は比較的平坦である。平面形・規模から土坑墓ではないかと現時点では考えている。このような形状・規模のものが他に3基ほど調査区から検出されている。調査区の中央部は、団地の基礎で破壊されているため詳細はわからないが、全て1号溝（自然流路）の上端より20m以内の範囲に分布する。

12号土坑（図-29）

0150グリッドの16号土坑を切って検出した土坑である。北側は、カクランによって破壊されている。直径約1.0mの円形プランを想定している。残存する壁高は、約25cmである。

13号土坑（図-22）

0037グリッドの14号住居址の下位から検出される。長径70cm、短径50cmの楕円形プランであり、主軸は、N69°Eである。検出面からの深さは、約45cmであり北側を方形に掘り込み、南側に緩やかに立ち上がる形状を呈する。

14号土坑（図-12）

0059グリッドで、2号住居址下位から検出した。残存する部分からN10°W方向に向くと推定できるが、詳細は不明。残存する壁高は、約14cmである。埋土は、1層からなるが、焼土と炭化物が多量に混在する。

15号土坑（図-12）

0059グリッドの2号住居址内から検出される。南側は、一部カクランによって破壊されている。長軸2.2m、短軸1.4mの隅丸方形プランの土坑を想定している。主軸は、N71°Wである。残存壁高は、西側で26cm程度であるが、埋土の表面では、2号住居址の床面と同じ高さで炭化物が混在していた。この土坑は、2号住居址のプラン内できれいに納まっていることや土坑の規模等から、住居址の付帯設備の可能性が高いと考えられる。

16号土坑（図-29）

0150グリッド南東隅付近で検出した。12号土坑と切りあっており16号土坑が下位になる。北側は、カクランによって破壊されているため、長軸は不明である。残存する長軸は、2.0m、短軸は、約1.7mで南側がやや広がるいびつな楕円形を呈している。主軸は、N7°Eである。埋土は、残りの良いところで約10cmあった。床部は、南に向かって傾斜している。平面形・規模から土坑墓ではないかと現時点では考えている。

17号土坑（図-29）

0140グリッドで検出した。18号住居址南側の壁の一部を切っている。長径1.1m、短径0.6mの楕円形プランであり、主軸は、N44°Eをとる。

18号土坑（図-29）

0151グリッドで検出した。長径1.1m、短径0.7mの楕円形プランである。東側に張り出し部があり1号溝を切っている。主軸は、N10°Eである。深さ約16cmである。1号溝を切っていることから、中世以降の所産と考えられる。

19号土坑（図-12）

0059グリッドの2号住居址埋土で検出された。2号住居址よりは新しい。北側の一部が調査区外である。19号土坑の下位からは、2基ピットが検出されている。長軸2.6m、短軸1.4mの隅丸方形プランである。主軸は、N68°Eで、東に竈をもつ建物群と一致している。埋土は1層であり、全体的に焼土と炭化物が散在していて、上部に竈の袖石の部材が混入していた。現段階では、規模や形状から判断して、土坑墓ではないかと考えている。

5 畫状遺構（図-30）

調査区北西隅に3条が約2m間隔で主軸をN53°Eにとり、北東-南西方向に並ぶ。深さは、25cm～30cmありそれぞれの溝の東端は並んで収束するわけでもなく北にあるものほど東側へ長く伸びる傾向にある。検出した時点では、溝のプランとして検出して埋土を除去したが、底部からピットが検出された。ピットは溝の部分に納まっている。そこで溝は、検出当時、掘立柱建物を建造するとき付随するものではないかと想定した。しかし、ピットは並ぶものの深さがまちまちであり規格性がない。また、ピット内埋土の断面からも柱痕らしいものが検出されていない。そこで、現時点では、畑に伴う畝状遺構の溝の部分の可能性が高いのではないだろうかと考えている。古代の住居址と切り合い関係にあり、上位にあることから、8世紀より新しいものであると考えている。

6 溝

溝は、5条検出した。ただし、1号溝は、他の溝とは性格を異にしており自然流路と判断している。4号溝を除くと、1号溝と同方向に伸びている。

尚、1号溝を境に、住居址が西側域におびただしく分布するが、東側域には1軒も検出されなかつた。また、東側域では、他の遺構及び遺物もほとんど検出・出土せず生活の痕跡が極端に少なくなる傾向を示した。土地利用の境界もあるようである。

1号溝（図-31）

調査区の中央部で検出した1号溝は、竈の袖石に

使用した石材を切り出した産地であることや住居域の境界であることから、以下詳細に記載する。

① 自然流路である根拠

1号溝は調査区の中央を縦断するようにやや蛇行しながら、北から南に流れていた。溝の底は、ほとんど高低差は認められなかつたが、溝の埋土の縦断面からクロスラミナが認められ、南下していることが判明した。埋まった堆積物には、水が流れた痕跡があり、単なる溝にしては規模も大きい。また、無規格であり、河川の堆積物の構造であるチャネルバーや攻撃斜面等を持ち合わせていていることから自然流路であると考えている。尚、当初自然流路として形成され、その後整形し水路として利用したことは疑わない。今後、調査地が増えることにより、詳細な事が理解されるものと考えている。

② 溝の規模と堆積物

本調査区では、水の影響を受けた流路幅は、約16mである。當時流れていた河床部は、約6m幅である。検出面からの最大深度は、約2.5mである。河床は、褐鉄鉱が沈着し、かなり固結していた。また、河床の高さ（標高）もほぼ現在の水位（試験ボーリングの結果では標高約9mが水位レベル）に相当する深度であり、水が流れる条件下ではあったようである。

埋土は、大きく2区分し、河床を直接埋めている層を下層（図-31、④⑤⑥⑦⑧⑨）、下層の上に堆積し溝を埋め尽くした層を上層（図-31、①②③）と呼ぶこととする。

上層は、土・シルト・粘土から構成され、下層は砂・礫・粘土から構成される。下層は、砂を中心に構成されることから、水流がある流路であったことがわかる。特記すべきこととして、上層下位（図-31、③）・下層上位（図-31、④）には、白色の粘土が熱したガラスのように引き伸ばされ堆積していることがあげられる。これは、上流域から粘土が流れてきたものが流速が遅くなつた本調査区付近で堆積してレンズ状に引き伸ばされたものと考えられる。河川で自然に堆積したものとしてはかなり特異的である。このことは、上流域で白色の粘土が盛んに切り出され、不必要的部分は捨てられ下流に流

れてきて堆積したものではないかと現時点では考えている。この粘土が、竈の袖石の石材として使用されていることからもこのように考察する方が自然である。上層は、シルトや土壤から構成され、水の関与が少なくなった堆積物であり、水がなくなった後徐々に埋まっていたことが理解できる。水が流れなくなった理由として、河川争奪（河川が流域を越えて隣の河川の水域を奪う自然現象）か、もしくは人為的に流路方向を変えたかが考えられるが、本調査区のみで解明は困難である。今後の発掘調査の成果を待ちたい。

③ 竈の袖石の石材としての粘土と凝灰質砂岩

1号溝の河床の両岸の壁付近に層厚約5cmの粘土（7層）とその直上に凝灰質砂岩が自然堆積している。埋土の最下部の層（図-31、④⑤）と標高的に同じ高さで、両岸に粘土が認められる。成因としては、堆積物の肉眼及び偏光顕微鏡観察、珪藻化石分析及び蛍光X線分析などの結果から総合的に判断して、現在のところ、阿蘇火山中央火口丘の噴火活動（杵島岳？・往生岳？）により火山泥流が発生し、泥質部分が選択的に堆積したものと考えている。堆積物には湖沼性の堆積物によく見られる葉理も見られない。1回限りのイベントであったことが推測できる。

粘土の直上には、固結した凝灰質砂岩（6層）がある。おそらく下位に堆積する粘土中の粘土鉱物によってセメント化した砂質な堆積物と考えられる。

河床の左岸側（東側壁）からは、この粘土と凝灰質砂岩を30×20cm程度の規格で切り出した痕跡が認められた。前述しているように、この粘土等と竈の袖石の蛍光X線分析及び岩石薄片観察の結果、分析値等が一致しており産地であることが判明している。今後は、各遺跡で出土した竈石を調べることで、流通範囲も理解していくものと考える。

④ 出土遺物

本調査区で、調査できた範囲は、法面を設定しなければならず、約16mであった。ほぼ完形の出土遺物が多量にあった。遺構ではなく自然流路ではあるが、大江遺跡群内を北から流れてきているものであり、遺跡の性格等を考察する上で貴重な参考資料になると考え、多くの出土遺物を掲載した。

河床付近の下層では、古墳時代後期から古代の遺物を中心に出土している。流路をほぼ埋めてしまった上層からは龍泉窯系青磁碗II-b類等が出土している。古墳時代後期の竪穴住居址の竈の袖石として河床の粘土類を切り出されていることから、古墳時代後期には流路が形成されていて、生活に欠かせない流路となり、13世紀前半にはほぼ埋まってしまったと考えられる。

2号溝（図-32）

0039グリッドで検出した。調査区中央に位置する1号溝の右岸側を北東から南西に伸びる溝である。主軸は、N40°Eをとり、幅40～50cm、深さ約20cm前後の比較的規模の小さい溝である。底面は比較的平らである。北側は、途中、団地の基礎によって破壊されているため断言はできないが、埋土に焼土粒や炭化物が混入しており、3号溝とほぼ同じである。また規模的にも近似しているため3号溝とつながるのではないかとを考えている。溝の床は、褐鐵鉄が沈着しており流水の痕跡を残す。水路として使用されていたと考えられる。古代の遺物とともに中世の遺物も出土しているため、中世の溝と考えられる。

3号溝（図-33）

調査区北側の0141グリッドから0151グリッドにかけ検出した。幅は約50cm、深さは約20cmの規模の小さい溝であり、主軸はN22°Eをとる。底面はU字形を呈する。埋土は、焼土や炭化物を含み、土師器細片が出土した。流水の痕跡があり水路として使用されていたようである。流れた方向は、北から南である。2号溝が北側で3号溝方向である東に屈曲していることや埋土が酷似していることにより2号溝とつながっていた可能性があるが、途中、団地の基礎で破壊されているため詳細は不明である。

4号溝（図-32）

0039グリッドで検出した。調査区内で検出した他の溝とは性格が異なっており、主軸はN39°Wであり他の溝の主軸に直行している。埋土も2号溝とは異なる特徴があり、流水の痕跡がない。幅は約

1mあり、深さも10cm程度である。2号溝と交差したところで切れていることから、2号溝に伴うものであった可能性がある。

5号溝（図-34）

II区で検出した唯一の遺構である。幅約1m、深さ40cmで、主軸をN41°Eにとる。ほぼ他の溝と軸方向を同じくする。調査区の南側で1号溝と切りあっている。5号溝が新しい。北から南に向かって傾斜しており、埋土は粘性土と砂から構成されている。溝の底

部には、褐鉄鉱やマンガンが沈着し、激しく固結して、明らかに流水の痕跡を残しており、溝は水路として使用されていたと考えられる。埋土からの出土遺物は、土師器の細片が中心であるが、近世の遺物も出土しているため、近世の所産と考えられる。

7 ピット群（図-10）

I区で109基とII区で45基、総数154基のピットを検出した。I区は全域に分布する。II区は極端に少なくなる。

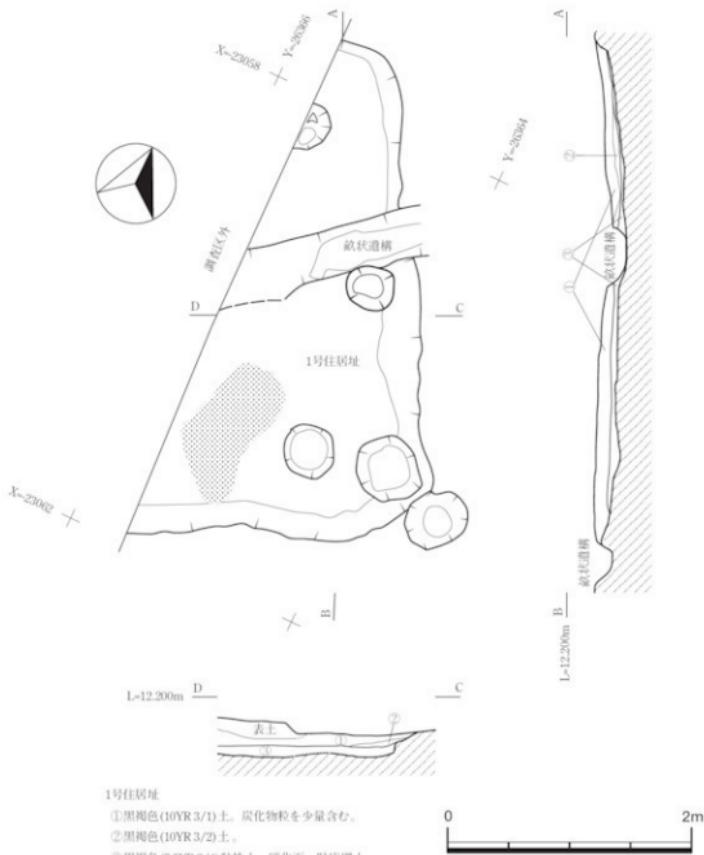


図-11 1号住居址 平面図及び断面図（縮尺1/40）

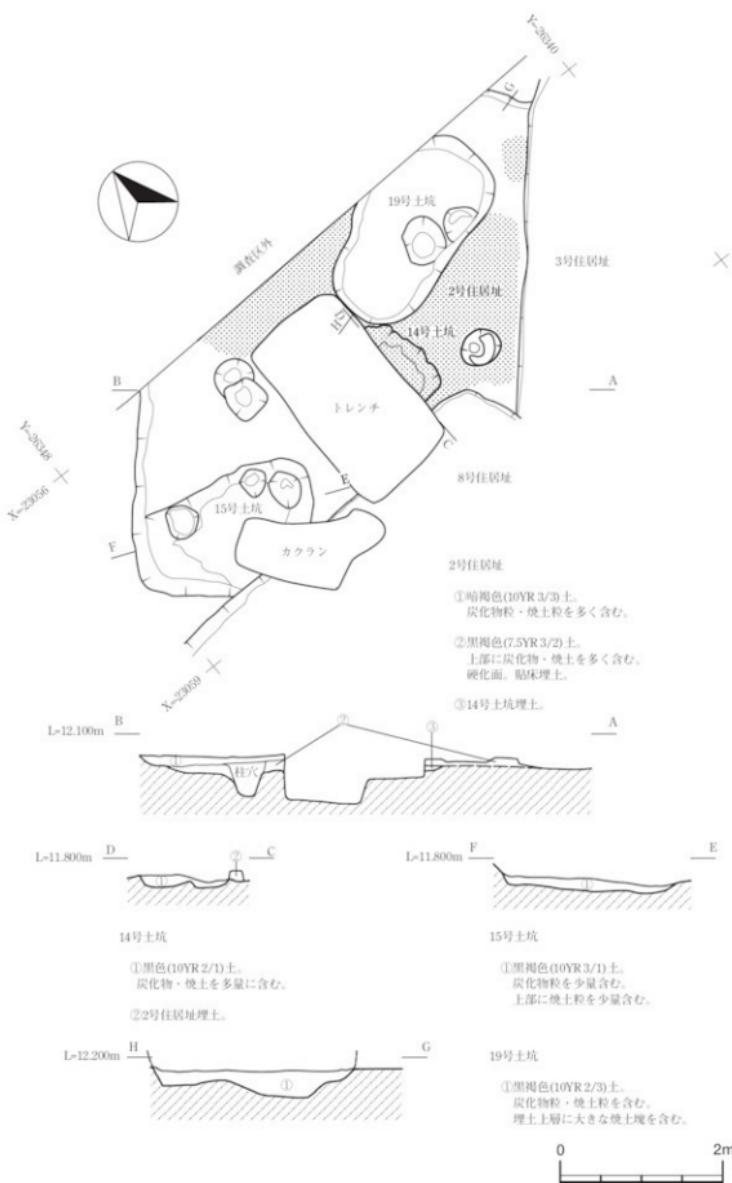
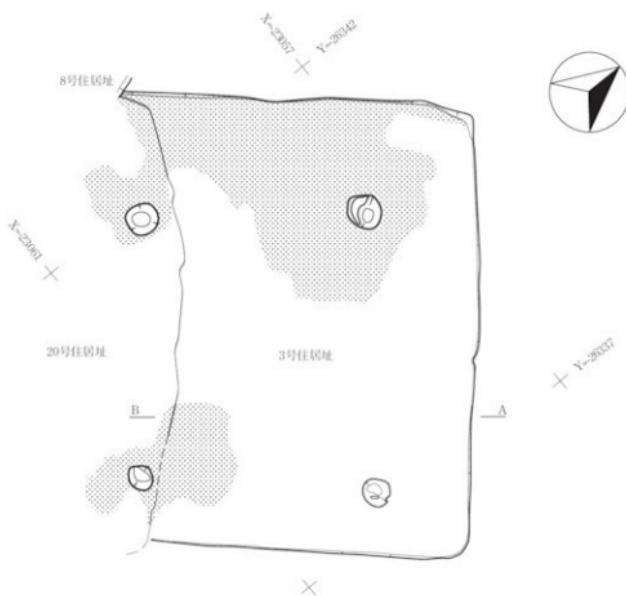


図-12 2号住居址、14号・15号・19号土坑 平面図及び断面図 (縮尺1/60)



3号住居址

- ① 黒褐色(7.5YR 3/2)シルト。炭化物を多く含む。
- ② 黒色(7.5YR 2/1)土。炭化物・焼土を少量含む。硬化面。貼床埋土。
- ③ 20号住居址埋土。
- ④ 9号住居址埋土。



図-13 3号住居址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

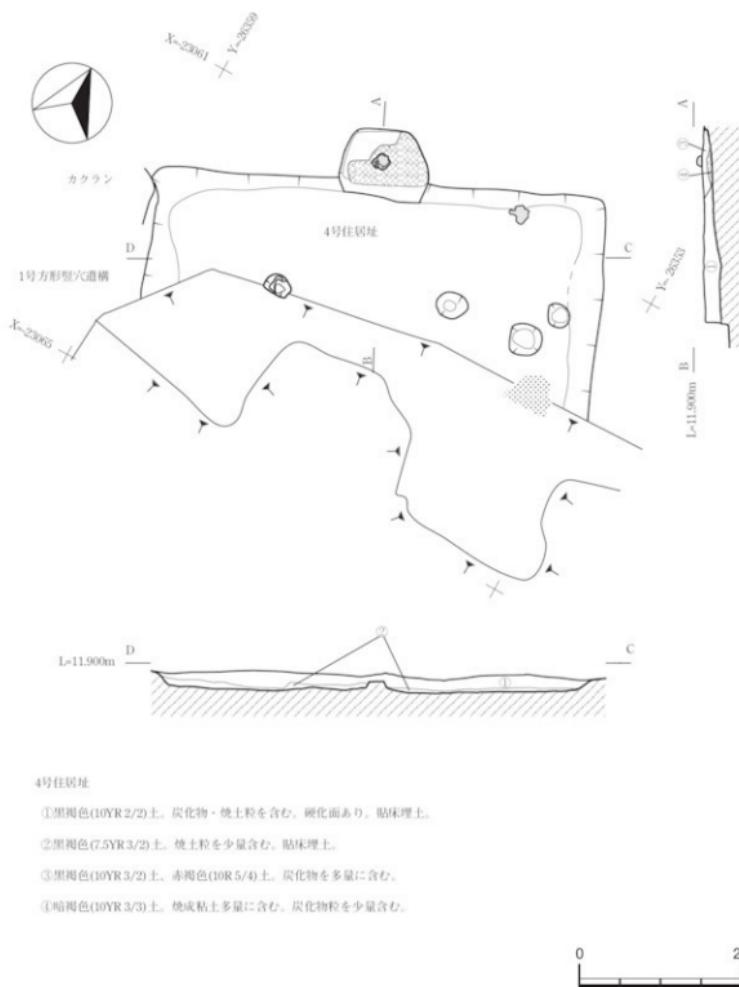


図-14 4号住居址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

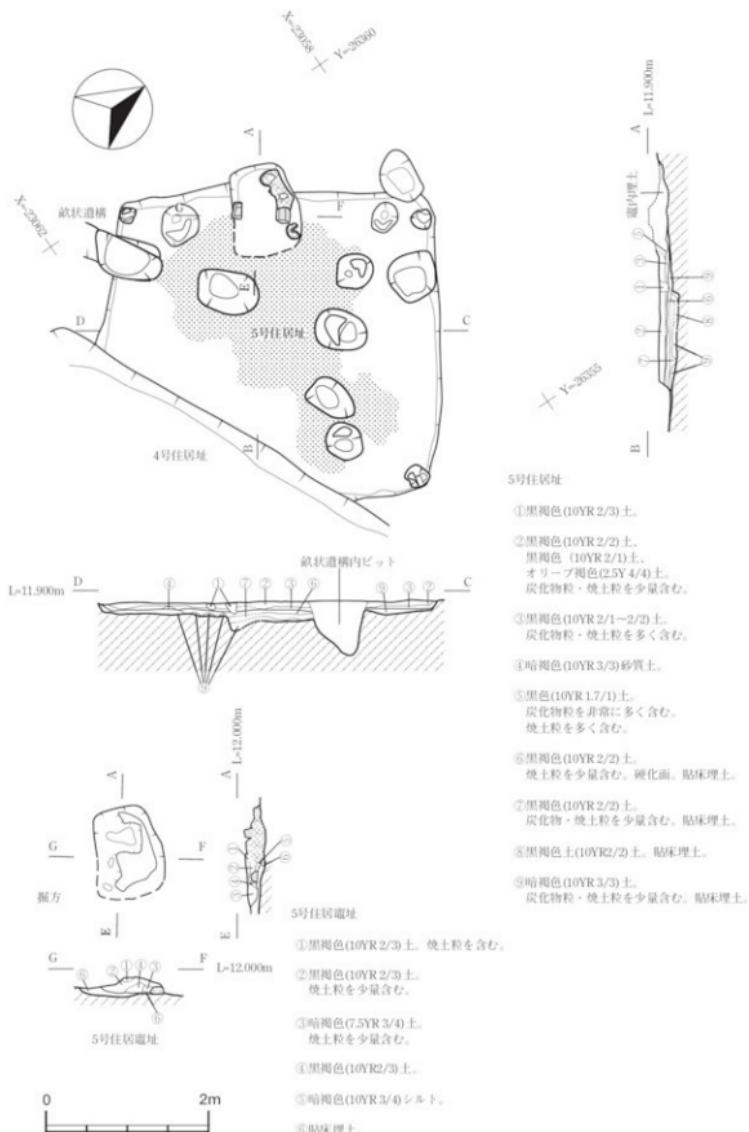


図-15 5号住居址・5号住居遺址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

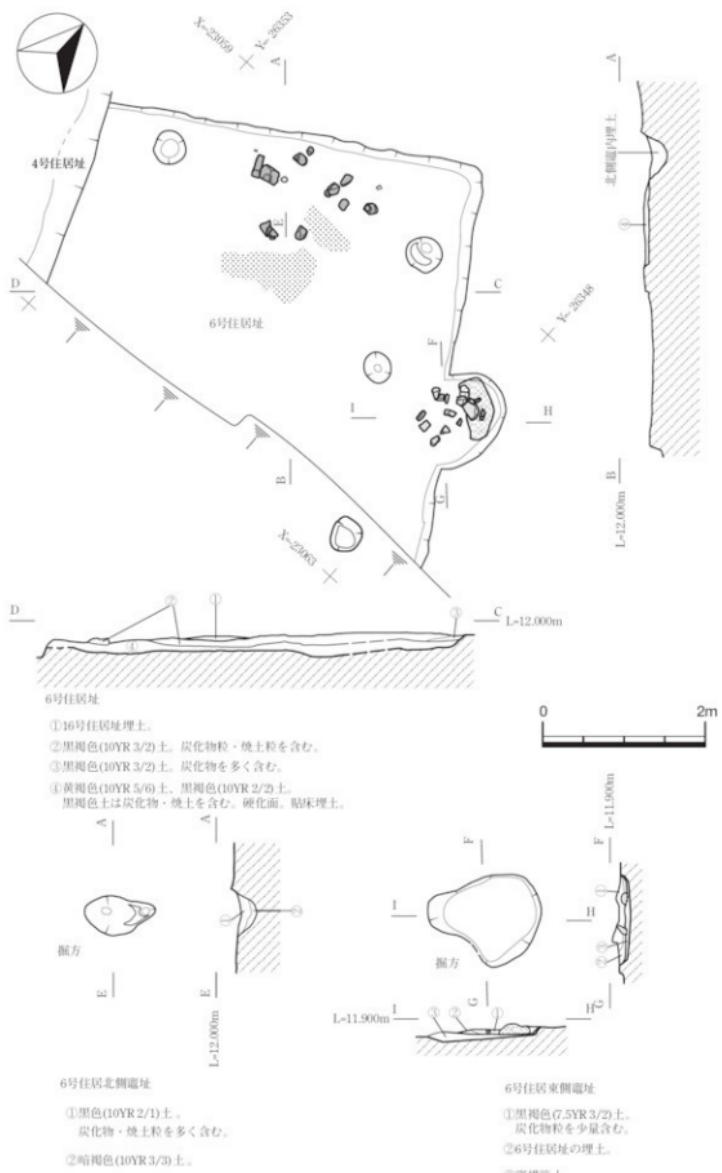


図-16 6号住居址・6号住居竈址 平面図及び断面図 (縮尺1/60)

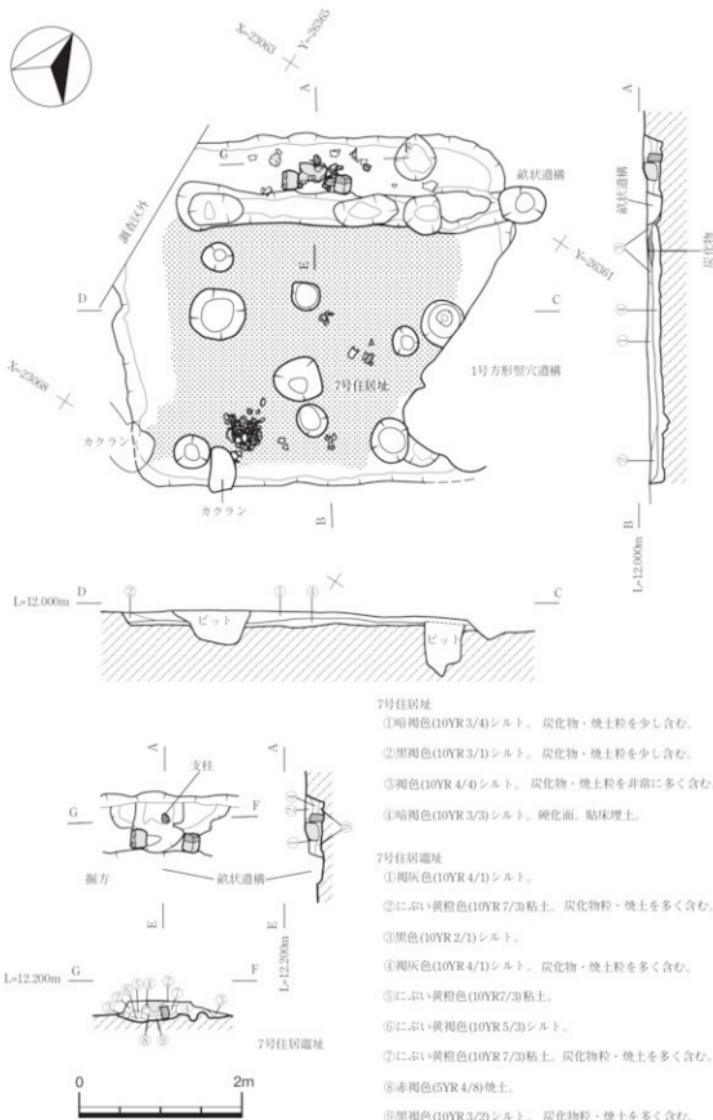


図-17 7号居住址・7号住居遺址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

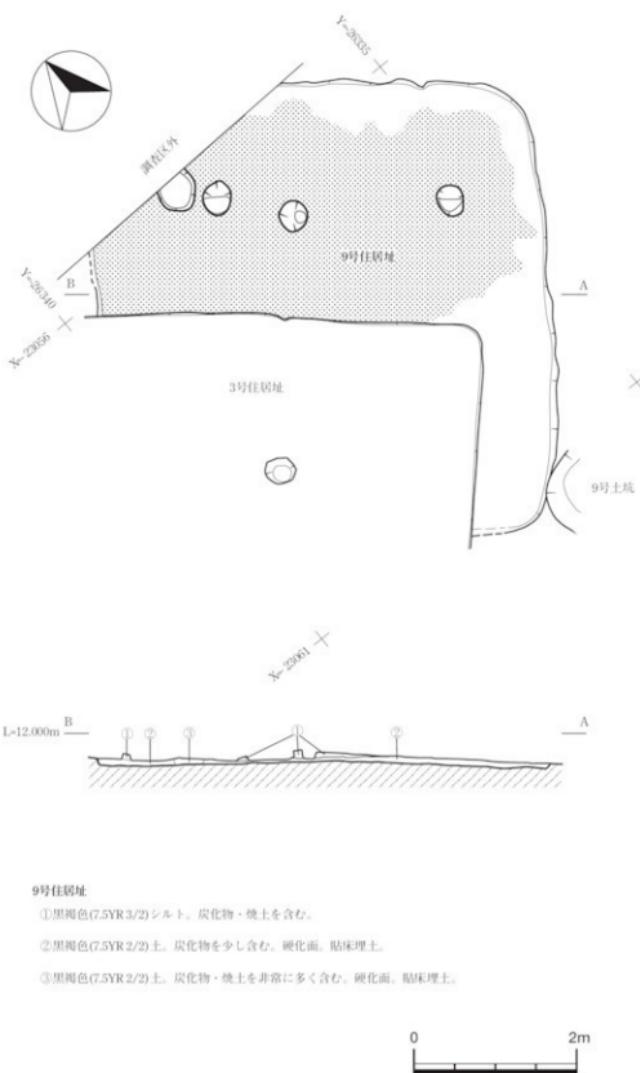


図-18 9号住居址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

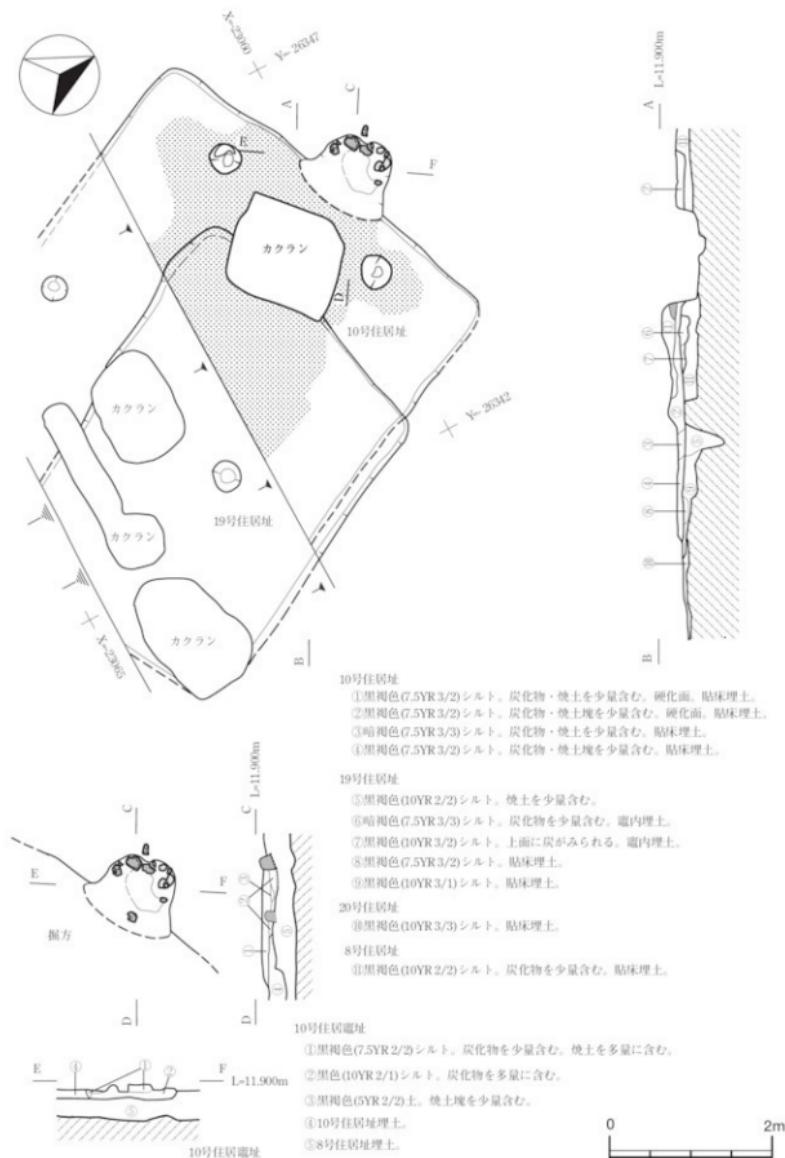


図-19 10号・19号住居址・10号住居遺址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

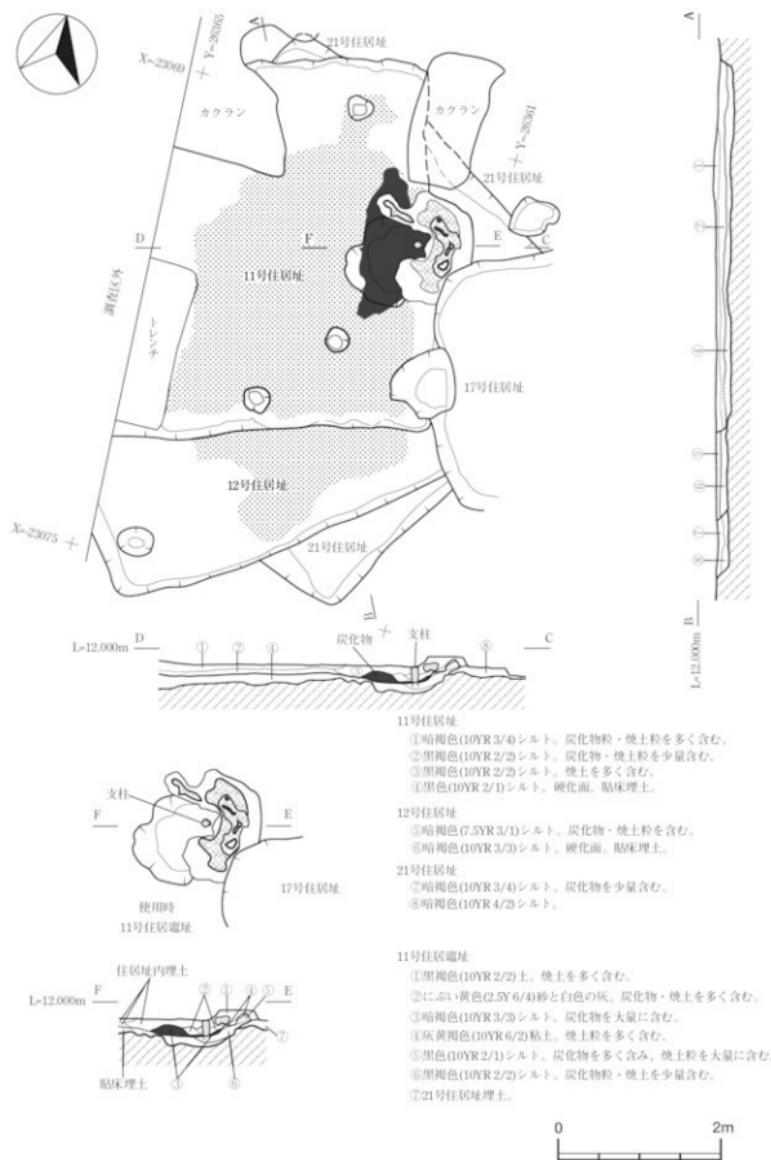


図-20 11号・12号・21号住居址・11号住居遺址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

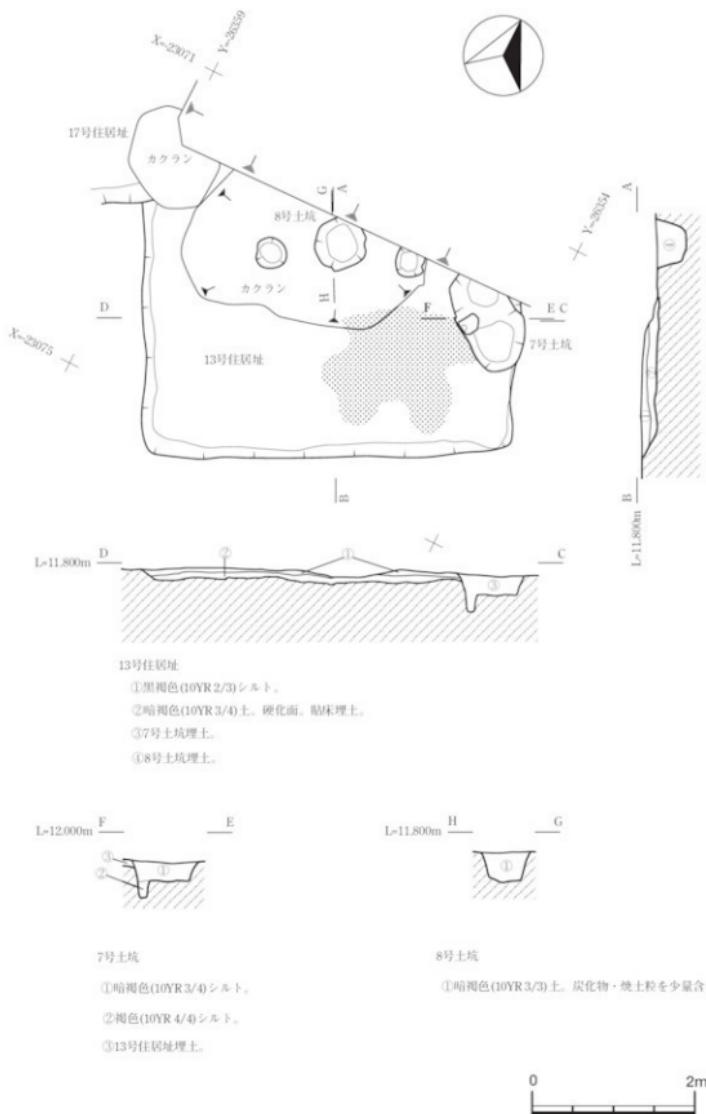


図-21 13号住居址、7号・8号土坑 平面図及び断面図（縮尺1/60）

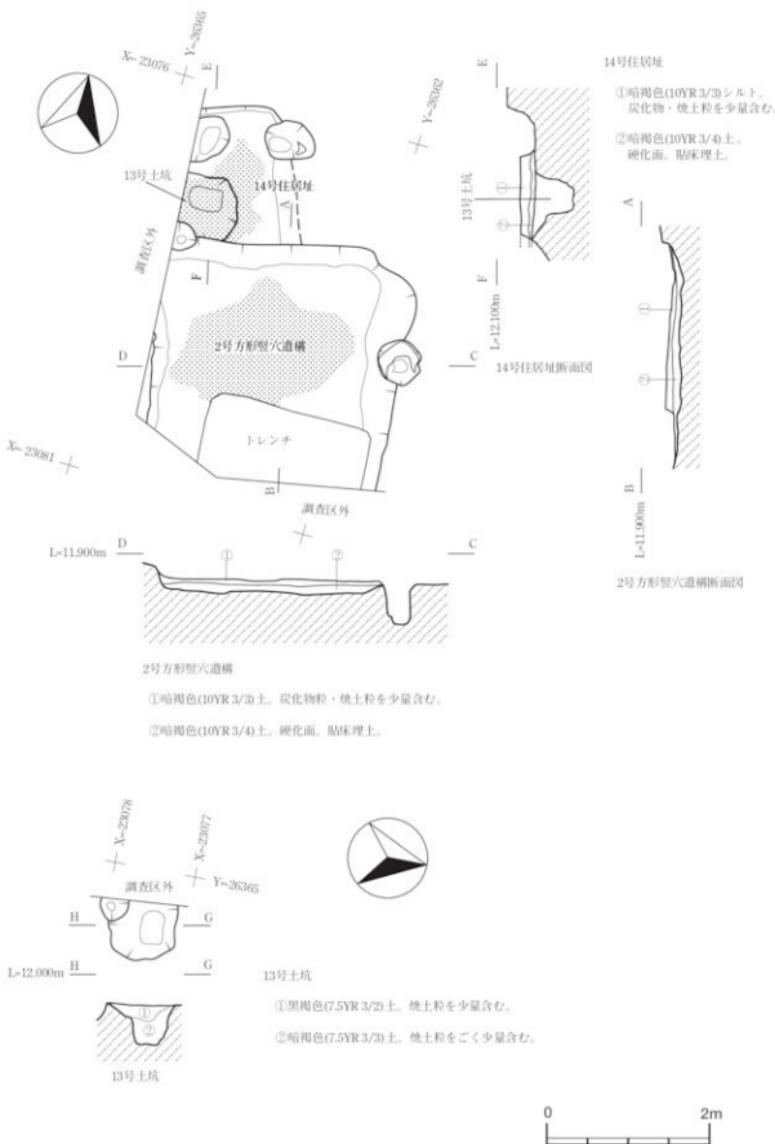


図-22 14号住居址、2号方形竪穴遺構、13号土坑 平面図及び断面図（縮尺1/60）

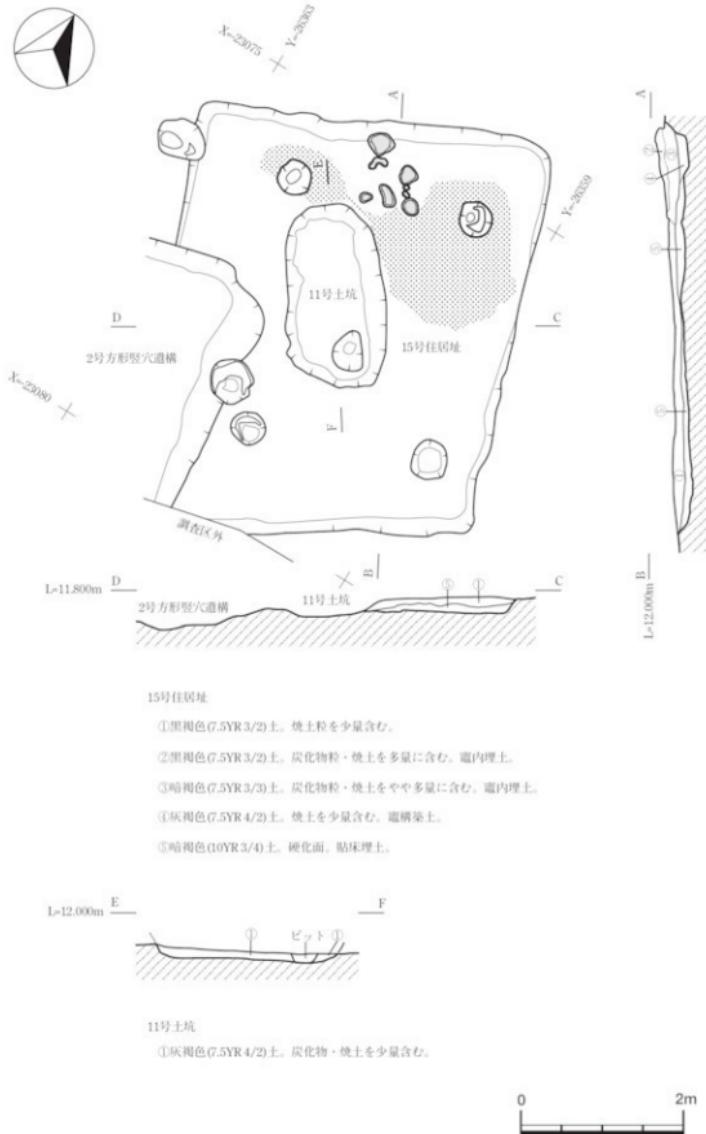


図-23 15号住居址、11号土坑 平面図及び断面図（縮尺1/60）

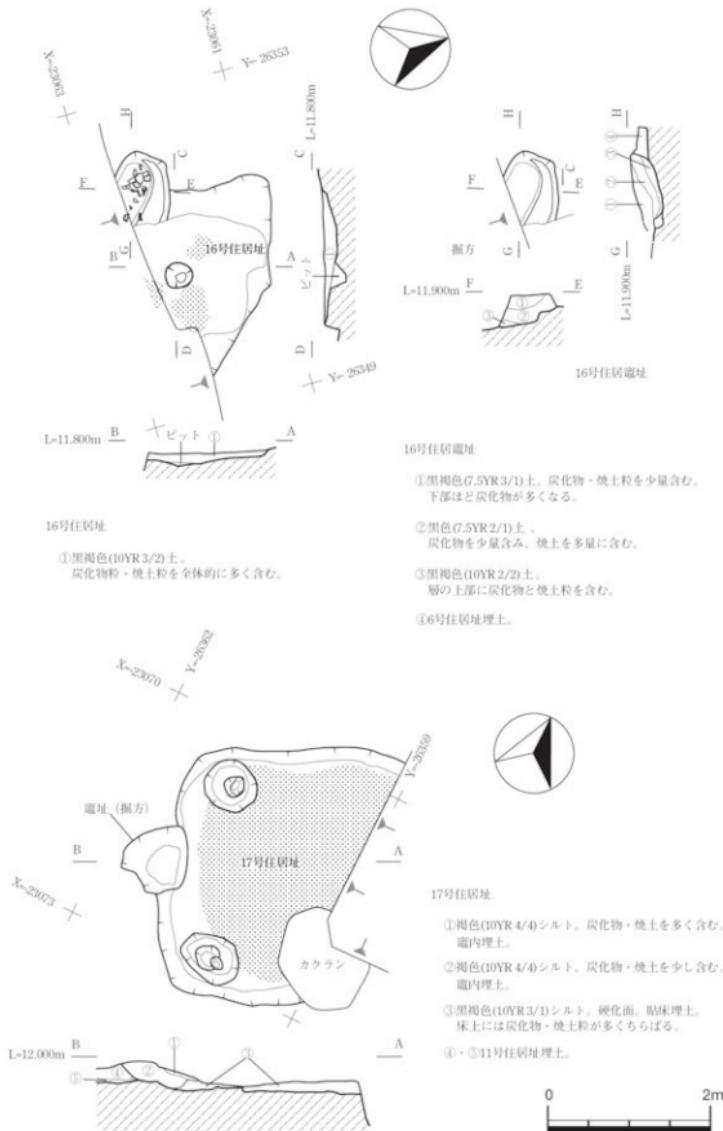


図-24 16号・17号住居址 平面図及び断面図（縮尺1/60）

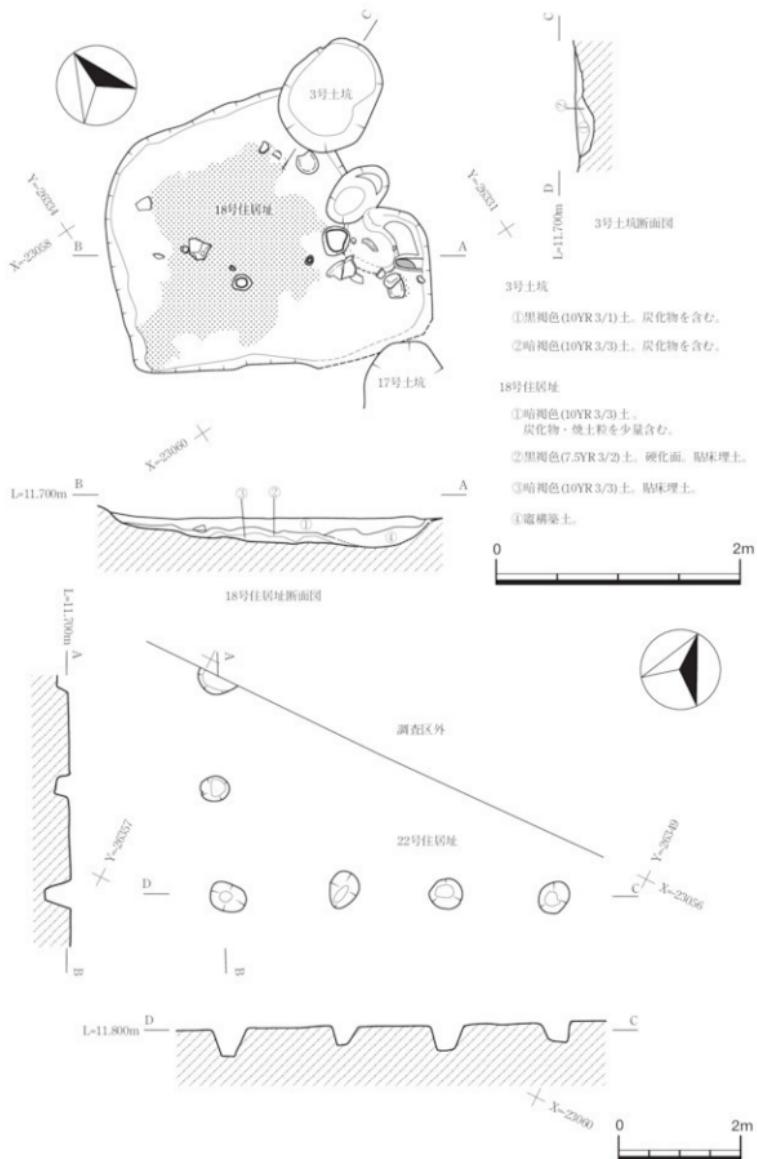


図-25 18号（縮尺1/40）・22号住居址（縮尺1/80）・3号土坑（縮尺1/40）平面図及び断面図

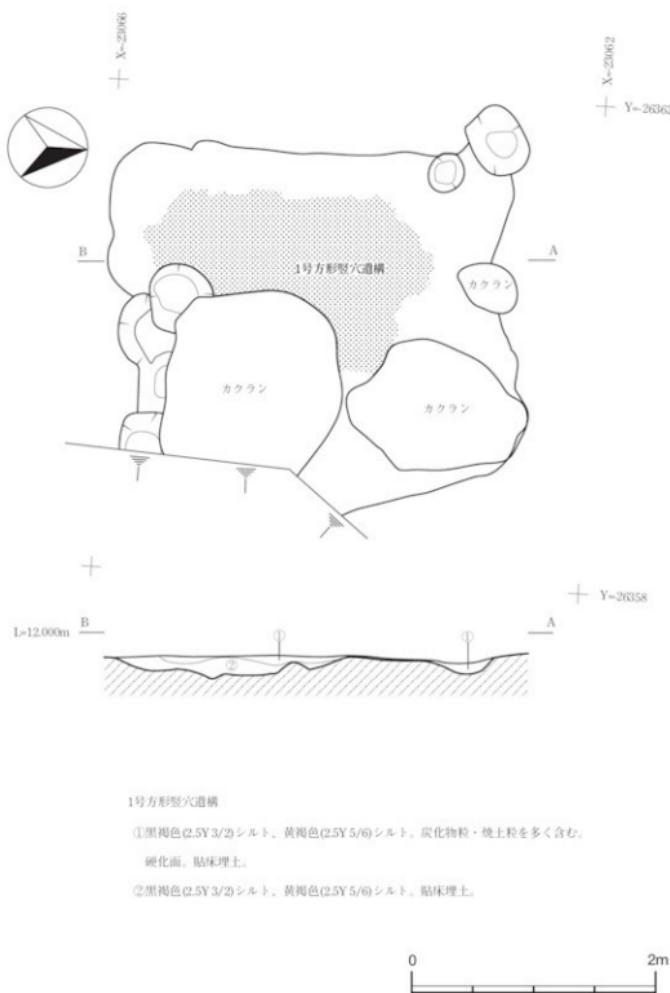


図-26 1号方形竖穴遺構 平面図及び断面図（縮尺1/40）

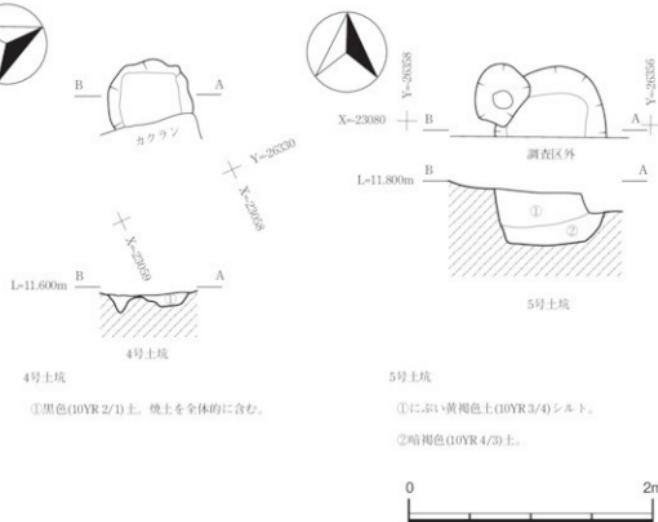
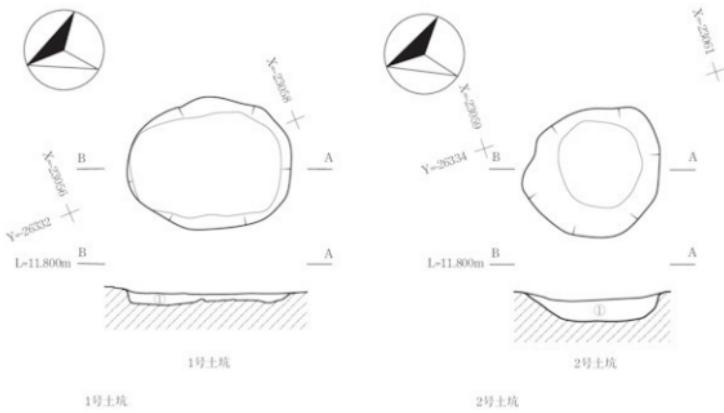


図-27 1号・2号・4号・5号土坑 平面図及び断面図（縮尺1/40）

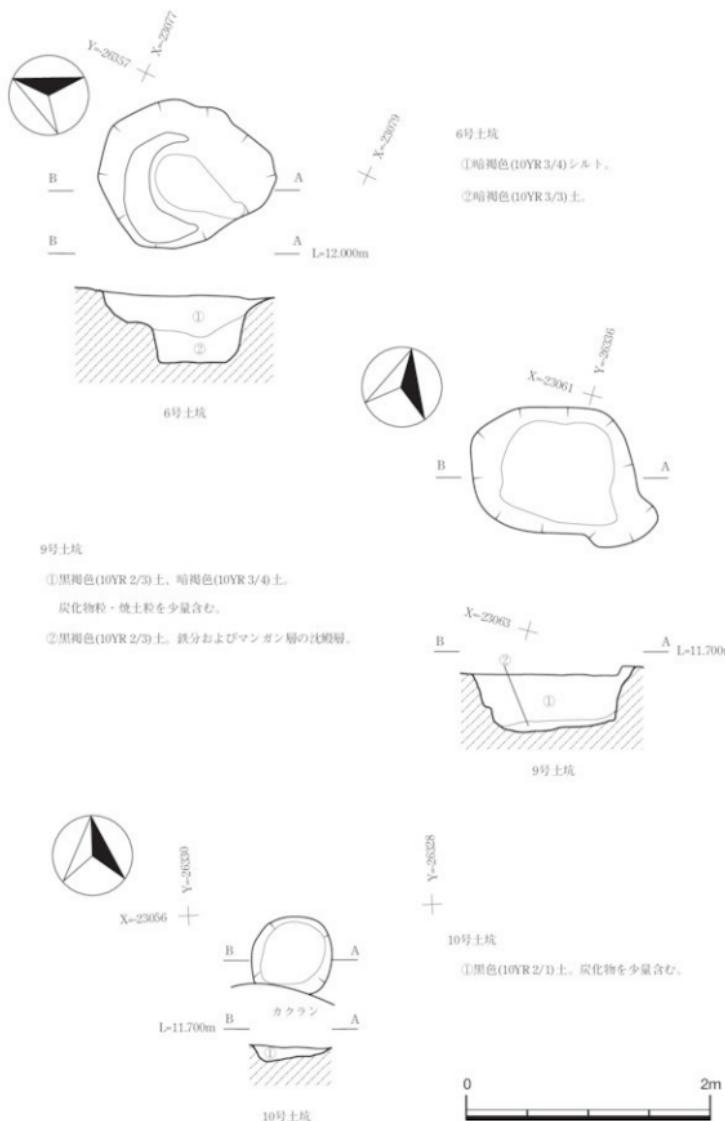


図-28 6号・9号・10号土坑 平面図及び断面図 (縮尺1/40)

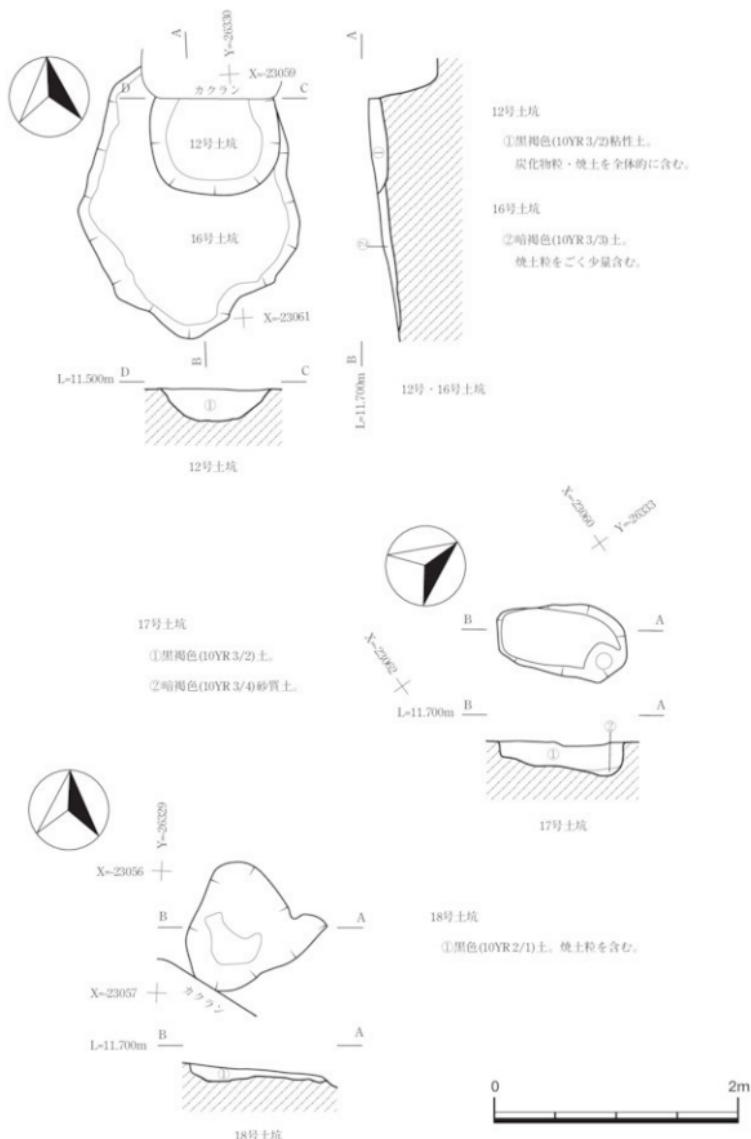


図-29 12号・16号・17号・18号土坑 平面図及び断面図（縮尺1/40）

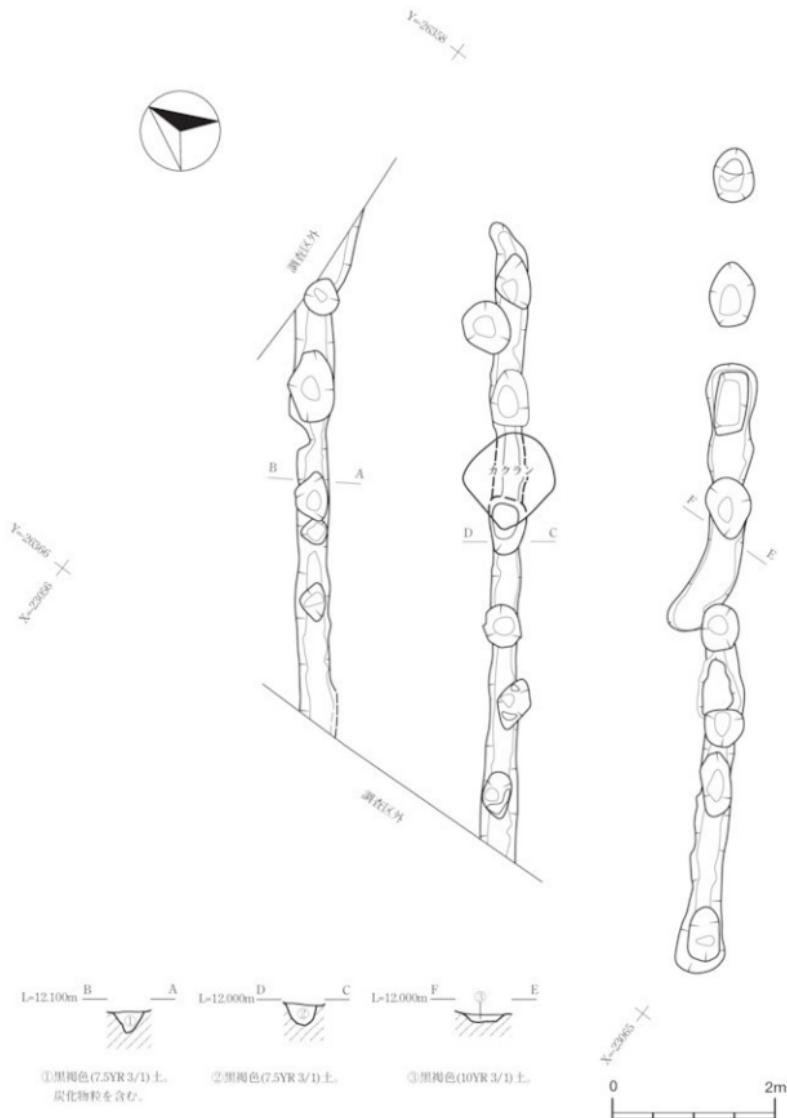


図-30 狹状遺構 平面図及び断面図 (縮尺1/60)

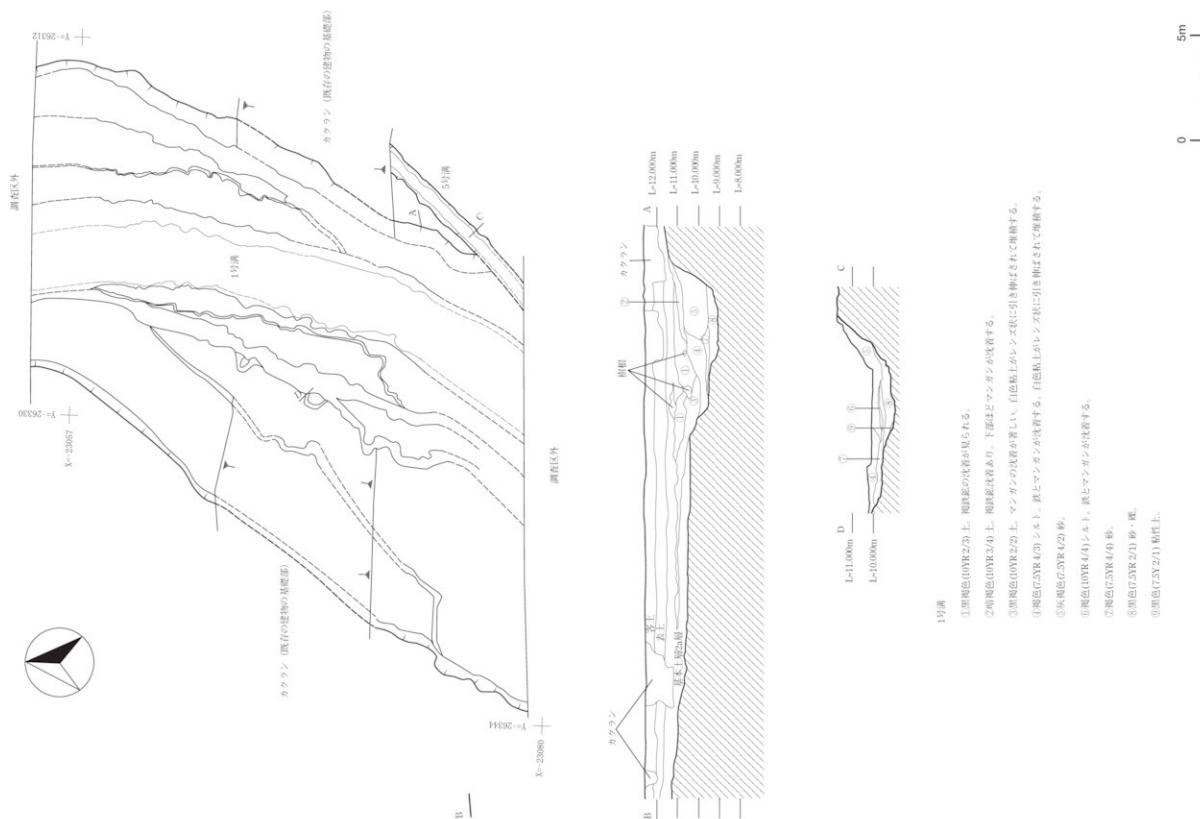


図-31 1号溝 平面図及び断面図（縮尺1/180）

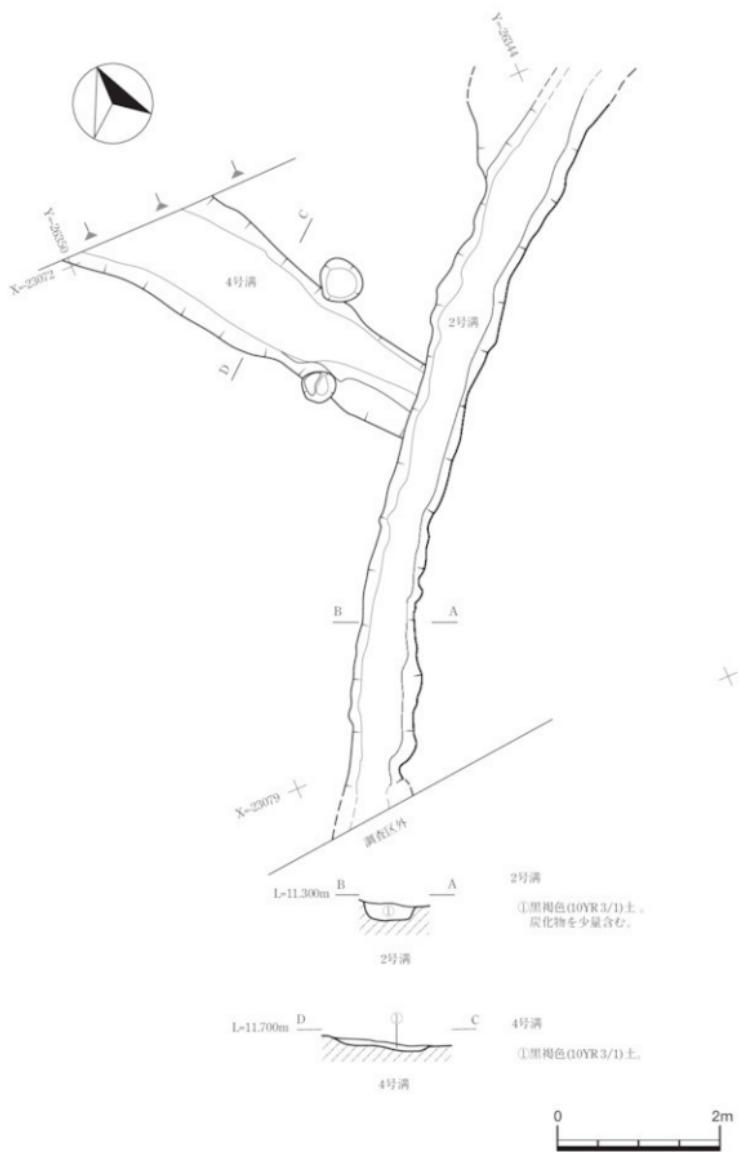
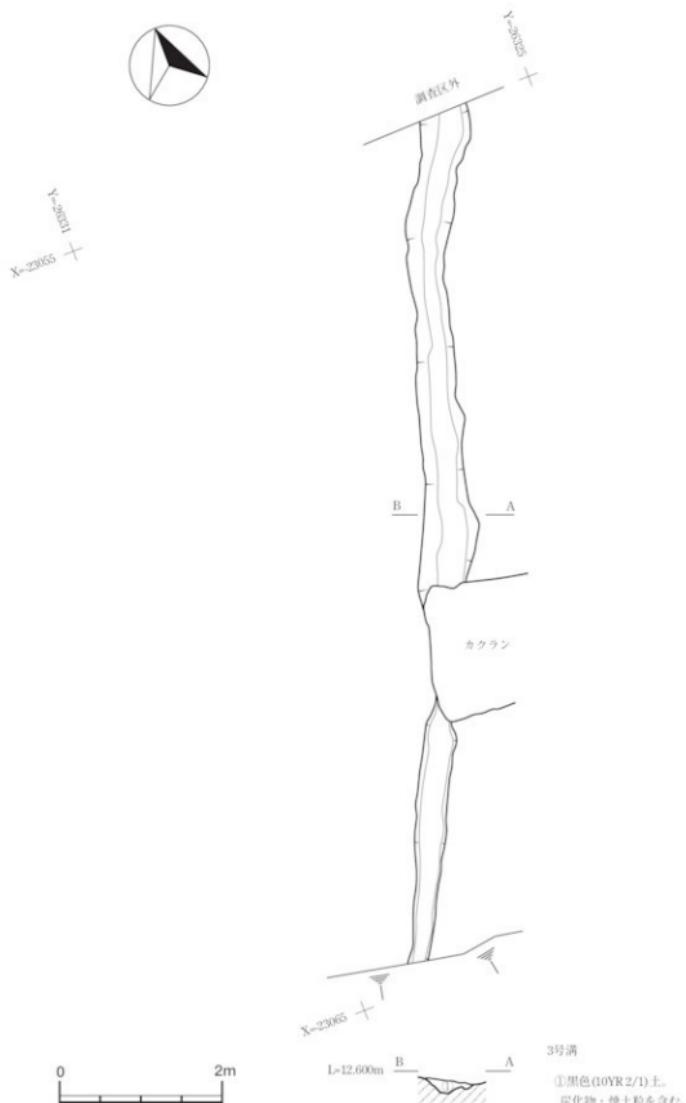


図-32 2号・4号溝 平面図及び断面図（縮尺1/60）



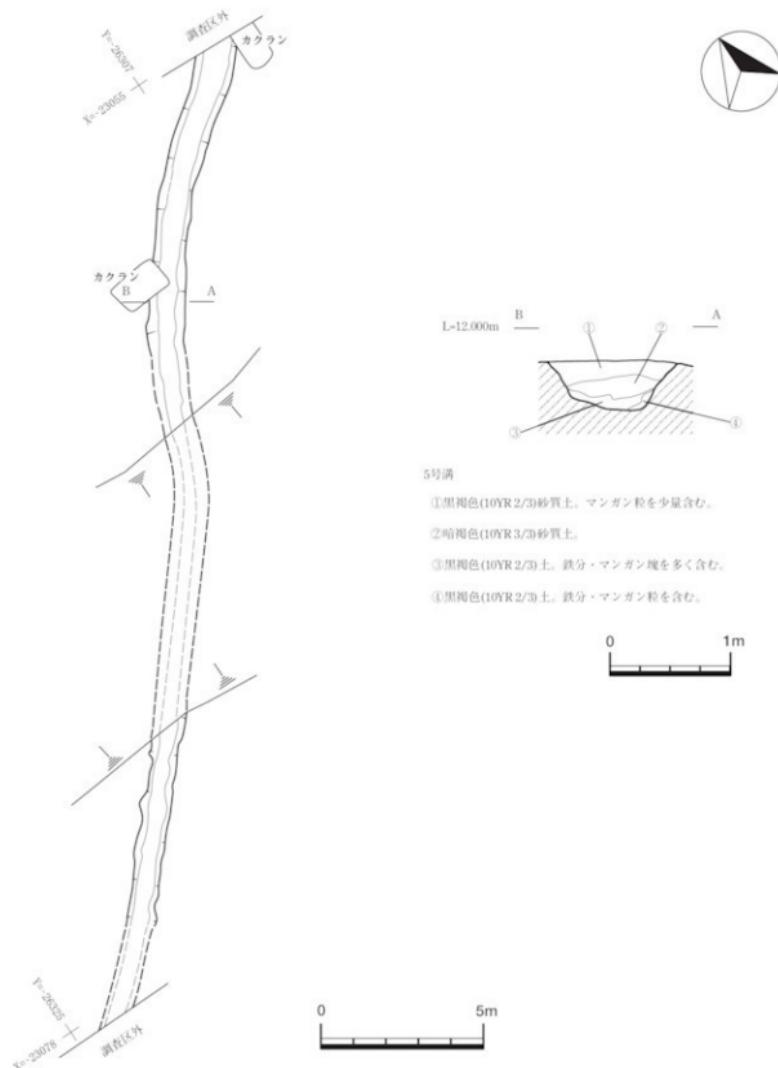


図-34 5号溝 平面図（縮尺1/150）及び断面図（縮尺1/40）

第4節 遺物

1 はじめに

遺構内及び遺物包含層からの接合できる遺物の出土が非常に少なく、細片が多かった。ただし、1号溝からは、多くの出土がありほぼ完形のものが多くあった。総量としては、コンテナ25箱程度である。尚、胎土については双眼実体顯微鏡による鉱物の同定を行っている。その際、雲母は、バーミキュライト化したものが多く見られたが、その区別は紙面の都合により割愛した。

2 遺構内出土遺物

1 土師器蓋。天井部から体部まで残存。体部から緩やかに傾斜し口縁部に至る。内面は、ヨコナナデ調整。外面は赤彩、ヘラミガキを行う。胎土は、石英を含む。

2 須恵器蓋。天井部から口縁部まで残存。天井部から緩やかに傾斜し、口縁部の下折点には溝を付ける。見受けの返りがなく器高が高い。天井部はヘラケズリ。体部外面から口縁部を経て内面見込み部までヨコナナデ調整を行う。胎土は、石英・長石をや多く含む。

3 須恵器蓋。ほぼ完形。天井部から段を形成することなく傾斜し口縁部に至り下方にやや折れる。天井部はヘラケズリ。体部外面から口縁部を経て体部内面ナナデ。見込み部はナナデ後不定方向ナナデ調整。胎土は、1mm程の砂粒を少し含む。

4 土師器壺。口縁部から底部の一部までが残存。体部は、ほぼ直線的に立ちあがる。内外面とも回転ナナデ調整、赤彩を施す。胎土は、石英・長石の粒子を含む。

5 土師器高壺。脚部のみ残存。内面は左方向へのヘラケズリ。外面は下方向へのヘラケズリ後、ナナデ調整。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。

6 土師器壺。やや丸みのある底部から緩やかに体部が立ち上がる。内面見込み部はヨコナナデ後ナナデ、内面体部から外面体部に至るまでヨコナナデ調整・赤彩を施す。底部に、指頭圧痕がある。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含む。

7 土師器壺。口縁部から底部の一部まで残存。体

部は、ほぼ直線的に立ち上がり、内外面ナナデ調整で赤彩が施されている。底部はナナデ調整。胎土は、石英・角閃石を含む。

8 土師器壺。口縁部から体部まで残存。体部は直線的に大きく開いて立ち上がる。内外面とも回転ナナデ調整。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母を含む。

9 土師器甕。小型のものである。口縁部内外面はナナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。煤が多く付着している。

10 土師器甕。口縁部から胴部まで残存。口縁部は回転ナナデ。口縁下部から胴部外面はハケメ後回転ナナデ調整、胴部内面はヘラケズリ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石・火山ガラスを含む。

11 土師器高壺。底部と脚部のみが残存。底部外面・脚部内外面回転ナナデ、底部内面ナナデ調整。胎土は、石英・長石を含む。

12 土師器甕。口縁部から胴部まで残存。口縁部内外面はナナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、角閃石の量が多い。

13 土師器把手甕。ほぼ完形。把手より上は内外面ヨコナナデ、下は外面ハケメ調整を行う。把手は、ヘラケズリ後ナナデ調整を行い、胴部・底部内面はヘラケズリ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。

14 須恵器壺。やや丸みのある底部から緩やかに体部が立ち上がり、わずかに外反する。体部内外面・口縁部は回転ナナデ、見込み部は不定方向ナナデ、底部はヘラ切り離し後未調整。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。

15 須恵器壺。口縁部から体部まで残存。体部は直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・黒色粒（有色鉱物及びガラスの溶融したもの？）を含む。

16 土師器甕。小型のものであり、口縁部から頭部まで残存。口縁部は内外面ナナデ、頭部内面はケズリを行う。胎土は、石英・長石・角閃石を多く含む。

17 土師器甕。小型のものであり、口縁部から胴部の一部が残存。口縁部は内外面ナナデ、頭部から胴

- 部の内面はケズリ、外面はハケメ調整を行う。胎土は、石英・長石を多く含み、角閃石・雲母を少量含む。
- 18 土師器壺。平坦な底部から体部は開いて直線的に立ち上がる。見込み部及び体部内外面回転ナデ、体部外面下半にヘラケズリ、底部ヘラ切り離し後未調整。胎土は、石英・長石を含む。
- 19 土師器壺。やや丸みのある底部から体部は直線的に立ち上がる。底部外面はナデ、体部内外面はヨコナデ、見込み部はナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。
- 20 土師器壺。平坦な底部から体部は丸みを持ち立ち上がる。底部外面はヘラ切り離し後ナデ、体部内外面はヨコナデ。見込み部は不定方向ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。
- 21 土師器壺。やや丸みのある底部から体部は直線的に立ち上がる。体部内外面及び見込み部は回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。内外面に赤彩が施され、内面に少量煤が付着している。胎土は、石英・長石・角閃石が含まれる。
- 22 土師器高壺。内外面ヨコナデ、見込み部は不定方向ナデ調整を行う。脚部内面に線刻が施されている。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母が含まれる。
- 23 土師器高壺。脚部のみ残存。内外面ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・雲母が含まれている。
- 24 土師器盤。やや丸みのある底部から体部は丸みを持ちながら立ち上がる。内外面ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデ調整を行う。内外面に赤彩を施してある。胎土は、石英・雲母を含む。
- 25 土師器甕。中型のもの。口縁部から頸部まで残存。内外面ヨコナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含む。
- 26 土師器皿。やや丸みのある底部から体部はかなり外側に開いて立ち上がり、口縁部がやや外反する。底部ヘラ切り離し後ナデ、内外面回転ナデ調整を行う。内外面に赤彩を施す。胎土は、長石・雲母を含む。
- 27 土師器壺。平坦な底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面回転ナデ調整、底部はヘラ切り離し。内外面に赤彩を施す。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。
- 28 土師器高壺。内外面回転ナデ。見込み部、底部及び脚部外面は回転ナデ後ナデ調整を行う。胎土は、長石を含む。
- 29 土師器甕。口縁部から頸部はナデ、頸部内面はヘラケズリ後ナデ、胴部内面はヘラケズリ、頸部から胴部外面はハケメ調整を行う。底部には、直径約10cmの穿孔を施している。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。
- 30 土師器甕。口縁部から胴部まで残存。口縁部から頸部内面はハケメ、頸部内面は指頭による調整、胴部内面はヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。
- 31 土師器甕。口縁部から胴部の一部まで残存。口縁部内外面はナデ、胴部内面はヘラケズリ、胴部外面はハケメ調整を行う。胎土は、長石・雲母・角閃石を含む。口縁部の外面に黒斑がある。
- 32 土師器甕。口縁部から胴部の一部まで残存。口縁部から胴部は回転ナデ、胴部内面はヘラケズリ、胴部外面はハケメ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含み、長石の量がやや多い。
- 33 土師器皿。底部と体部の一部が残存。平坦な底部から屈曲して緩やかに立ち上がる。内外面ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。底部外面に墨書を施してあるが訛読はできない。胎土は、石英・角閃石を含む。
- 34 須恵器蓋。平らな形を呈し、身受けの返しを小さくつまみ出している。体部内外面及び口縁部は回転ナデ、天井部から体部外面にかけヘラケズリ後ナデ、体部内面は回転ナデ後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・雲母を含む。
- 35 土師器壺。平坦な底部から段をなし緩やかに体部が開いて立ち上がる。体部下位と見込み部は回転ナデ後ナデ、底部はヘラ切り離し後ヨコナデ調整を行う。内外面に赤彩を施す。胎土は、長石・雲母・赤褐色粒を含む。
- 36 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかに傾斜し体部となり身受けの返りを下方に小さくつまみ出している。体部外面から体部内面まで回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、天井部はヘラケズリ後ナデ

調整を行う。胎土は、石英・長石を含み、長石の量が多い。

37 石鏸。ほぼ完形である。黒曜石製の凹基無茎鏸である。茎の抉りは非常に浅く、両側辺とも直線的に調整されており、二等辺三角形の形状を呈する。

38 ガラス小玉。10号住居址の竈から出土。直径0.7cm、孔径0.15cmを測る。色調はコバルトブルーである。完形であり、気泡が観察される。

39 紗錘車。滑石製である。約3分の2が残存する。丁寧な研磨が施されている。

40 鉄製刀子。刀子片で刃部のみが残存し、現存長6.6cm、最大幅1.9cmを測る。透過X線撮影により外形線を確認した。

41 土師器環。口縁部から底部の一部が残存。平坦な底部から体部は丸みを持ちながら直線的に立ち上がる。外面回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ヨコナデ調整を行う。胎土は、長石・角閃石・雲母を含む。

3 1号溝（自然流路）からの出土遺物

42 須恵器環。口縁部から底部の一部まで残存。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。口縁部から体部の内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ、底部はヘラ切り離し後ヨコナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石・雲母・赤褐色粒が含まれる。口縁部から体部外面に黒斑が見られる。

43 土師器皿。平坦な底部から体部は大きく開いて直線的に立ち上がる。口縁部から体部の内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。

44 須恵器環。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。口縁部から体部の内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ、底部はヘラ切り離し後未調整である。胎土は、石英・長石を含む。

45 土師器環。やや丸みのある底部から屈曲し体部は直線的に立ち上がる。口縁部から体部内外面及び見込み部は回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ

調整を行う。外面に赤彩を施す。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む。

46 土師器杯。平坦な底部から屈曲し、体部は直線的に立ち上がる。見込み部から口縁部を経て体部に至るまで回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含む。

47 土師器椀。外面回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ、高台貼り付け後ナデ調整を行う。体部外面には沈線がある。胎土は、石英・長石・雲母を含む。

48 須恵器椀。平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる。体部から口縁部の外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、底部はヘラ切り離し後未調整。高台は外に開き、貼り付け後回転ナデ調整。胎土は、石英・長石を含む。

49 須恵器椀。口縁部から体部の外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ、高台は貼り付け後回転ナデ調整を行う。

高台は、内側がへこむ型である。胎土は、石英・長石を含む。

50 須恵器椀。平坦な底部から屈曲し体部は直線的に立ち上がる。口縁部から体部の外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含む。

51 龍泉窯系青磁碗。II-b類。外面ともに釉がかかり、外面には蓮弁文が認められる。

52 須恵器蓋。扁平な形状を呈し、見受けの返しを小さくつまみ出している。外面とも回転ナデ後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・ガラス質黒色粒が含まれる。内面には自然釉が観察される。

53 須恵器蓋。平坦な天井部から屈曲し体部は緩やかに傾斜し身受けの返りをやや外側につまみ出している。体部と口縁部内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ、天井部はヘラケズリ調整を行う。胎土は、石英・長石・黒色ガラス質粒子を含む。

54 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかに傾斜し体部となり身受けの返りを下方に小さくつまみ出している。体部内外面と口縁部は回転ナデ、天井部はヘラケズリ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ調整を行う。つまみは扁平なもので貼り付け後回転ナ

デ調整を行っている。胎土は、石英・長石・角閃石・白雲母を含む。

55 土師器鉢。口縁部から頸部は回転ナデ、胴部内面はナデ、頸部外面から底部までハケメ調整を行う。把手部は腐食が著しく調整は不明である。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含む。

56 須恵器壺。口縁部から底部の一部が残存。口縁部・頸部外面・胴部内面は回転ナデ、胴部から底部の外表面はハケメ後タタキ、胴部内面には同心円で具痕が残る。胎土は、石英・長石を含む。

57 須恵器鉢。内面は回転ナデ、外面上位は格子目タタキ後回転ナデ、外面下位は格子目タタキ後ヘラケズリ、底部はヘラ切り離し後高台貼り付け後回転ナデ調整を行う。胎土は、石英を含む。

58 須恵器鉢。荒尾産？口縁部から体部まで残存。内外面とも回転ナデ調整。胎土は、石英・長石を含む。

59 土師器壺。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。見込み部から体部外面まで回転ナデ、底部はヘラ切り離し後未調整。外表面に赤彩が施され煤が付着している。胎土は、石英・長石・雲母が含まれる。

60 土師器壺。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。見込み部から体部外面まで回転ナデ。底部はヘラ切り離し後未調整。内面に煤が付着している。灯明皿として使用？ 胎土は、石英・長石・雲母・赤褐色粒を含む。

61 土師器壺。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。口縁部から体部は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後不定方向ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤褐色粒が含まれる。

62 土師器壺。平坦な底部からやや丸みを持ちながら体部が緩やかに立ち上がる。口縁部と体部内外面が回転ナデ、見込み部が回転ナデ後ナデ、体部外面下位は回転ナデ後ヘラミガキ、底部は糸切り離し後ヘラミガキを行う。胎土は、長石・雲母・角閃石を含む。

63 須恵器壺。平坦な底部から屈曲して体部は直線的に立ち上がる。口縁部及び体部内外面、見込み部は回転ナデ。底部はヘラ切り離し後未調整。高台は

内側にへこむ型のもので、貼り付け後回転ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含む。

64 須恵器壺。平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる。口縁部と体部の内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、体部下位は回転ナデ後ヘラミガキ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。高台は、貼り付け後回転ナデ調整。胎土は、石英・長石・角閃石を含む。

65 須恵器壺。ほぼ完形。平坦な底部から体部はやや丸みを持ち直線的に立ち上がる。口縁部及び体部の内外面は回転ナデ、体部外面下位はケズリ、見込み部は不定方向ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。高台は、外に開き、貼り付け後にヨコナデ調整を行う。胎土は、石英・長石で量的に多い。ガラス質黒色粒も少量含む。

66 須恵器壺。平坦な底部から体部はやや丸みを持ちながら直線的に立ち上がる。見込み部から口縁部を経て体部外面に至るまで回転ナデ、体部外面下位はケズリ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。高台は、外に開き、貼り付け後にヨコナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含む。

67 須恵器壺。平坦な底部から体部はやや丸みを持ちながら直線的に立ち上がる。口縁部と体部内外面は回転ナデ、見込み部は回転ナデ後ナデ、体部外面下位は、ケズリ後回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。高台は、やや外に開き、貼り付け後ヨコナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・ガラス質黒色粒を含み、長石が多い。

68 須恵器壺。荒尾産？平坦な底部から直線的に立ち上がる。見込み部から口縁部を経て体部外面に至るまで回転ナデ、底部は糸切り離し後ナデ調整、高台は外に開き、貼り付け後ヨコナデ調整を行う。胎土は、石英と長石を含み、黒色粒を多く含む。

69 土師器壺。平坦な底部から屈曲して直線的に立ち上がる。口縁部と体部内外面は回転ナデ、見込み部はナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。高台は貼り付け後ナデ調整を行う。内外面に赤彩を施す。胎土は、長石・雲母を含む。

70 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかな傾斜で口縁部に至る。口縁には小さな返りが付く。偽宝珠

形のつまみがつく。内外面とも回転ナデ調整。胎土は、石英・長石・ガラス質黒色粒を含む。

71 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかに傾斜し口縁部に至る。口縁には小さな返りが付く。扁平なつまみがつく。内外面とも回転ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含む。

72 須恵器蓋。平らな器形を呈し、身受けの返りを小さくつまみ出している。口縁部と体部の内外面は回転ナデ、天井部は回転ナデ後ナデ、見込み部は不定方向ナデ調整を行う。やや扁平の偽宝珠形のつまみがつく。胎土は、石英・長石・雲母を含む。

73 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかに傾斜し口縁部に至る。口縁には小さな返りが付く。丸みのあるつまみがつく。天井部から口縁部内面まで回転ナデ、体部内面から見込み部はナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含み、石英の量が多い。

74 須恵器蓋。平坦な天井部から緩やかに体部を経て口縁部に至る。身受けの返りを外に小さくつまみ出している。内外面とも回転ナデ後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石・ガラス質黒色粒が含まれる。

75 須恵器蓋。荒尾産。平坦な天井部から傾斜し口縁部に至り、つまみを下方に小さくつまみだしている。輪状つまみを取り付けてある。内外面とも回転ナデ調整。胎土は、長石・ガラス質黒色粒を含む。

76 須恵器椀。平坦な底部から丸みを持ちながら体部は直線的に立ち上がる。高台は外に大きく開いて貼り付ける。見込み部から体部外まで回転ナデ、体部下位から底部へラケゼリ後ナデ調整を行う。胎土は、石英・長石を含む。

4 遺物包含層からの出土遺物

77 須恵器蓋。平らな器形を呈し、身受けの返りを小さくつまみ出している。天井部から体部はヘラ切り離し後未調整、口縁部から体部まで回転ナデ調整を行う。偽宝珠形のつまみがつく。

78 土師器椀。内外面とも回転ナデ、高台は、外に開いて貼り付け後回転ナデ調整を施す。内外面に赤彩を施す。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含む。

79 土師器壺。底部から体部まで残存。体部内外面と見込み部は回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ

調整。内外面に赤彩を施す。胎土は、石英・角閃石・雲母・赤褐色粒を含む。

80 土師器壺。平坦な底部から屈曲し体部は直線的に立ち上がる。見込み部から体部外まで回転ナデ後ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。内外面ともに赤彩を施す。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石を含み、角閃石の量が多い。

81 土師器壺。平坦な底部から屈曲して体部が立ち上がる。見込み部から体部外まで回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。内外面とも煤が付着。胎土は、石英・長石・赤褐色粒と少量の角閃石を含む。

82 土師器壺。平坦な底部から体部は屈曲し直線的に立ち上がる。見込み部から体部外まで回転ナデ、底部はヘラ切り離し後ナデ調整を行う。底部にスタンプがある。胎土は、石英・長石・雲母を含む。

83 土師器椀（黒色土器 A 類）。体部の一部から底部まで残存。平坦な底部から緩やかに直線的に立ち上がる。内面は黒色。体部外は回転ナデ、底部はヘラ切り離し後、高台を貼り付け回転ナデ調整を行う。底部外に墨書がなされており「万」と釈読できる。胎土は、石英・雲母を含む。

84 土師器壺。見込み部の磨耗が著しい。平坦な底部から緩やかに大きく外に開いて立ち上がる。口縁部から体部の内外面は回転ナデ、底部は、ヘラ切り離し後ナデ調整を行う。底部外に墨書がなされている。釈読できない。胎土は、石英・長石・雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。

85 鉄製紡錘車。透過 X 線撮影を行い欠損の程度を確認した。一部欠損がある。

86 鉄鎌。現存長 5.0 cm、現存幅 2.05 cm である。透過 X 線撮影を行い欠損の程度を確認した。脚部は欠損ではない。作出が特徴的である。また、中央部に穿孔がある。脚近くにある穴は腐食によるものである。

87 土錐。一部欠損がある。管状土錐であり、刺網系の魚網錐であろうと考えられる。胎土は、石英・角閃石を含む。ナデ調整である。

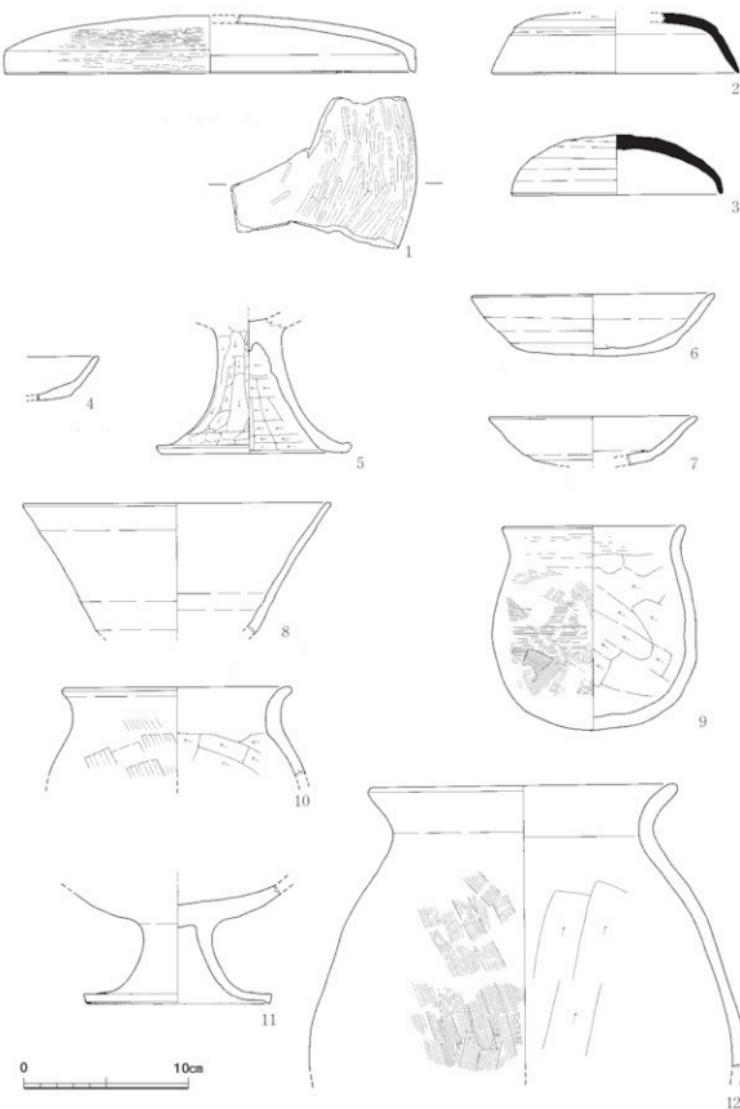


図-35 3号・4号・5号・6号・7号住居址出土遺物実測図

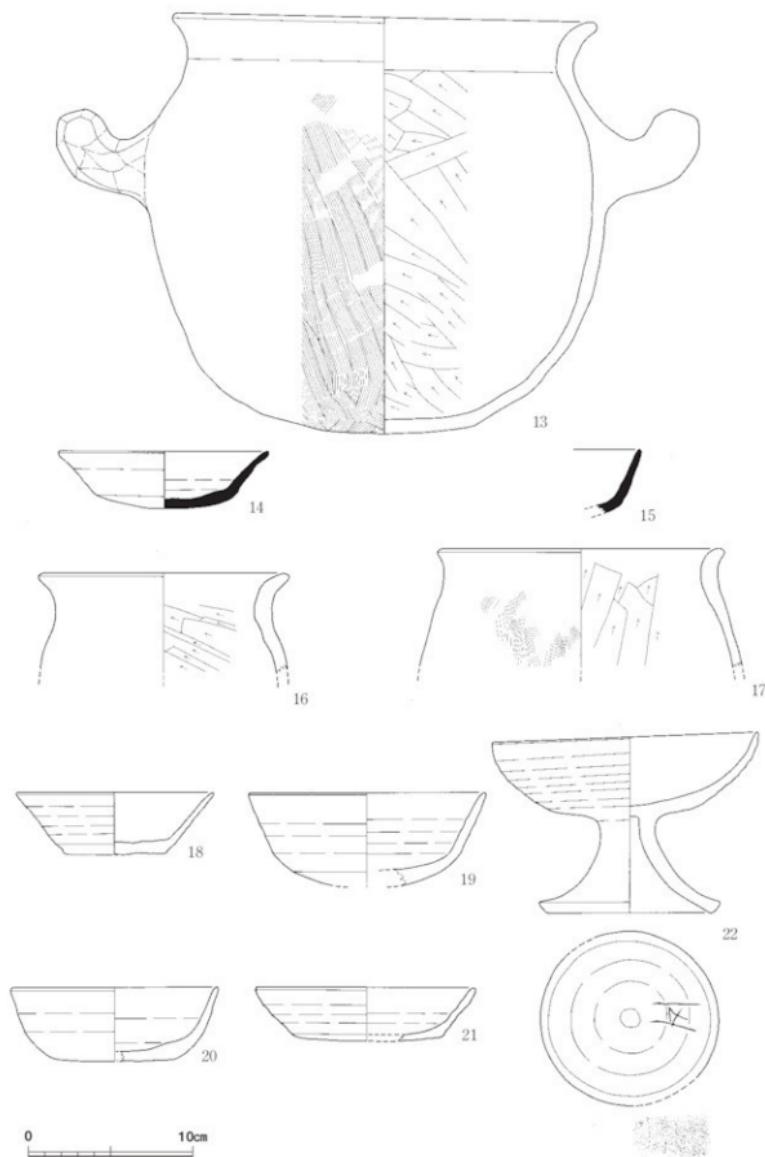


図-36 7号・10号・11号住居址出土遺物実測図

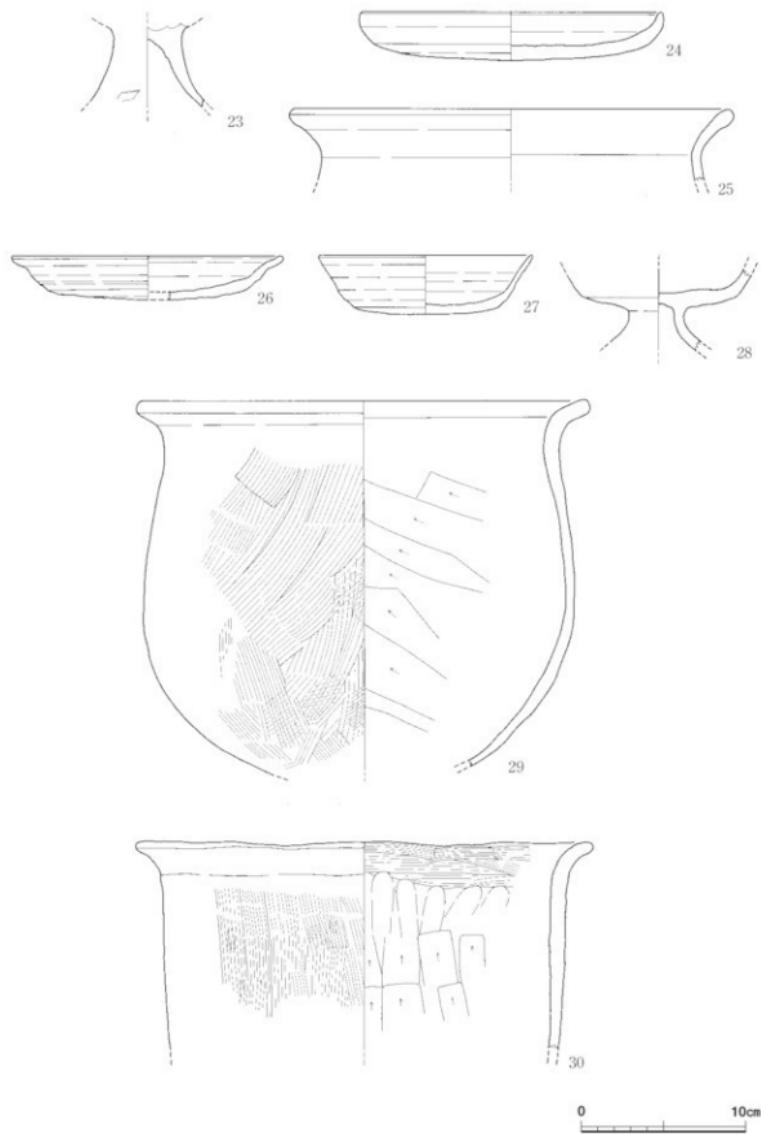


図-37 16号・17号住居址出土遺物実測図

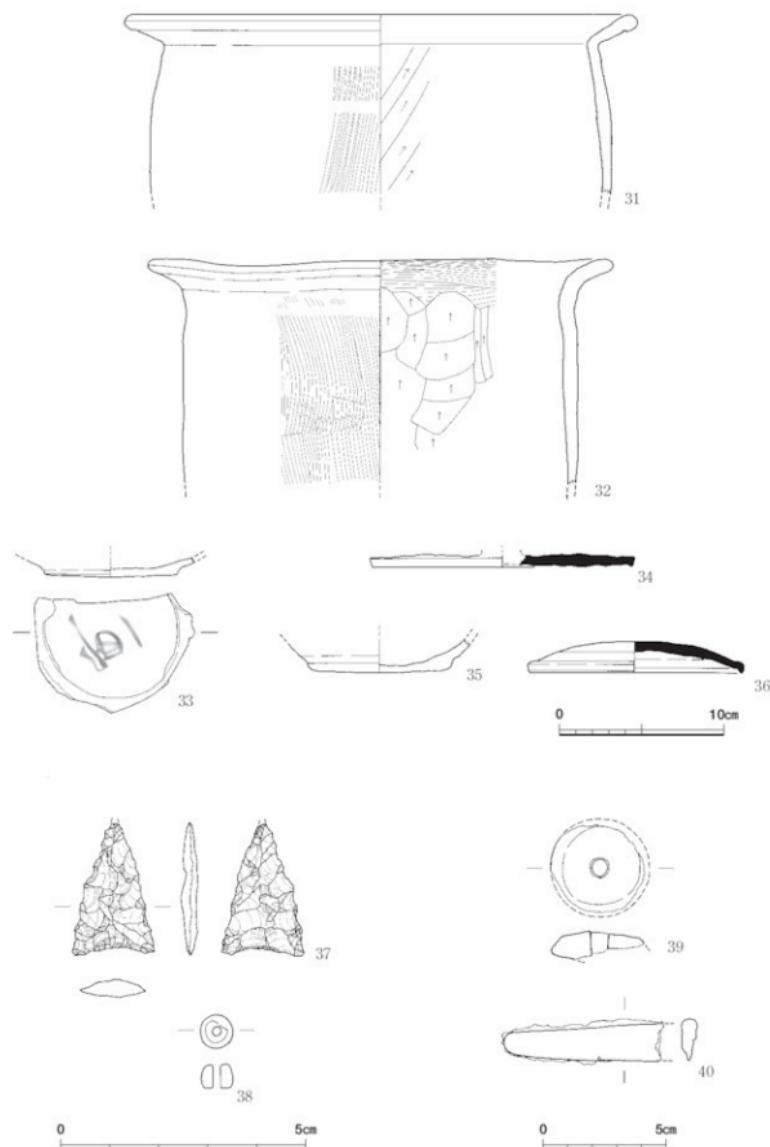


図-38 17号・18号住居址、2号方形竪穴遺構出土遺物及び遺構内出土鉄器・石器実測図

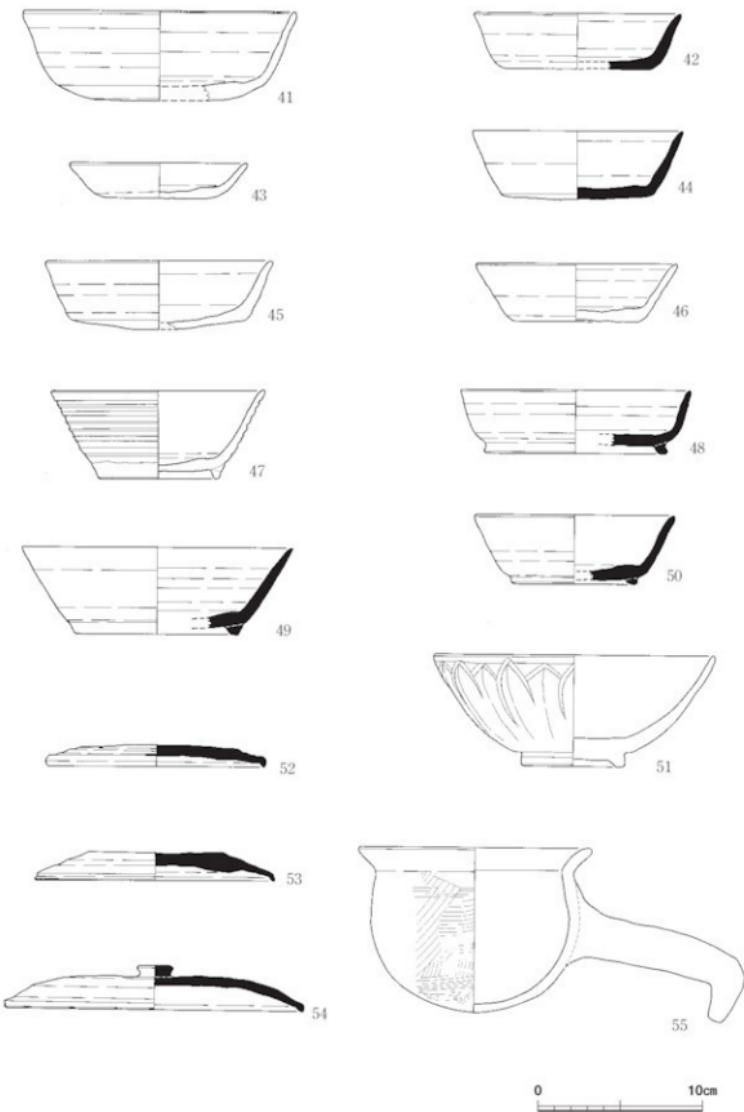


図-39 7号土坑及び1号溝上層（第31図、①②③）出土遺物実測図

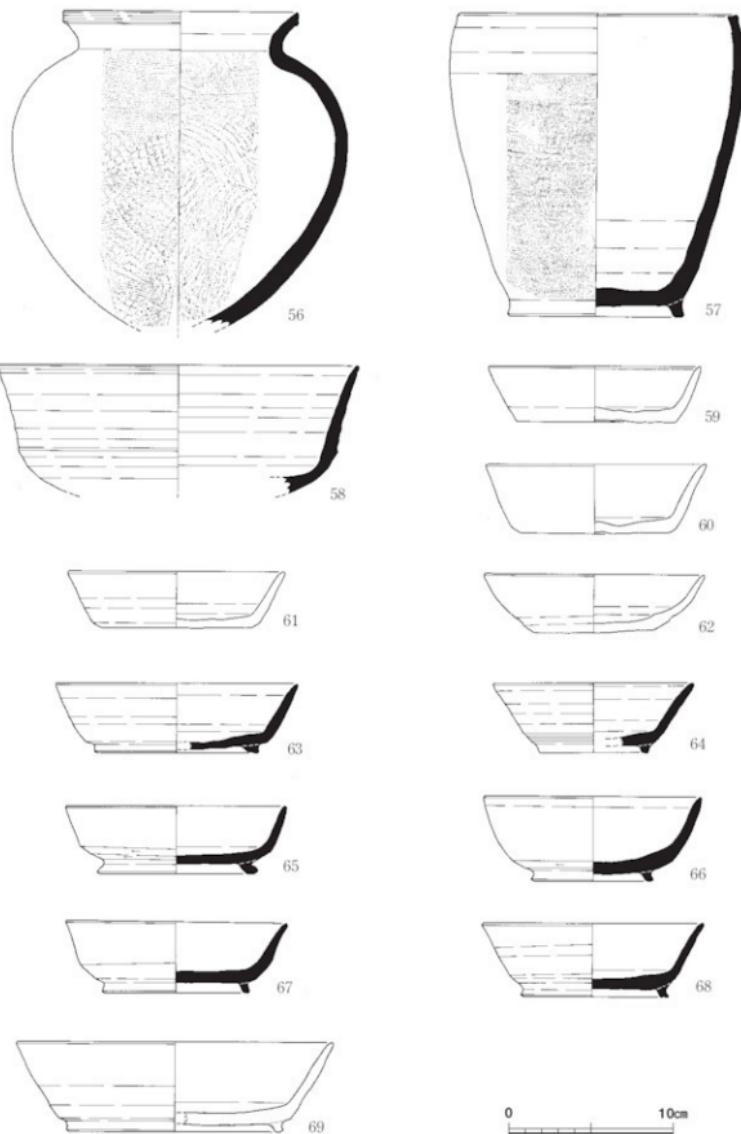


図-40 1号溝下層（第31図、④）出土遺物実測図

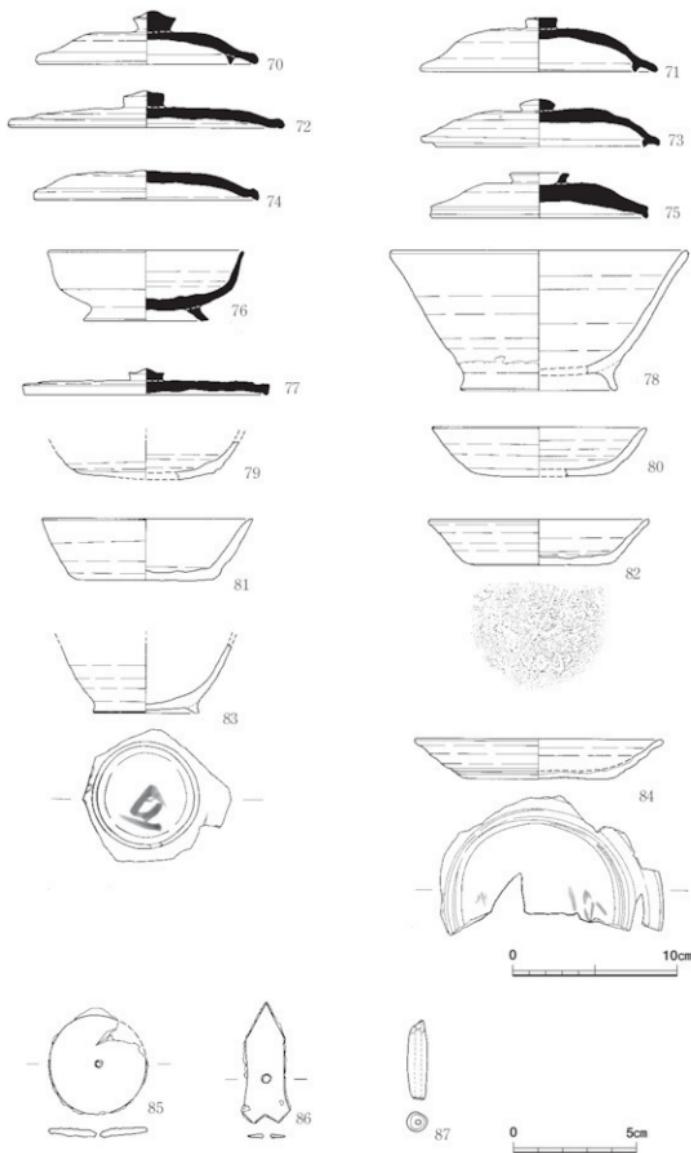


図-41 1号溝下層（第31図、④⑥）、1159・1116ピット、遺物包含層出土遺物実測図

第IV章 理化学分析

株式会社 古環境研究所

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料と方法

① 14 C 年代測定値

試料の $14\text{C} / 12\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 14C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

② $\delta 13\text{C}$ 測定値

試料の測定 $14\text{C} / 12\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($13\text{C} / 12\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

③ 補正 14C 年代値

$\delta 13\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $14\text{C} / 12\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta 13\text{C}$ 値を -25(%) に標準化することによって得られる年代である。

④ 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の 14C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。なお、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正 14C 年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 14C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

(2) 所見

加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1 の堆積物では 3740 ± 40 年 BP (1 σ の曆年代で BC2200 ~ 2120, 2090 ~ 2050 年)、No.2 の堆積物では 3840 ± 40 年 BP (同 BC2340 ~ 2210 年)、No.3 の堆積物では 4300 ± 60 年 BP (同 BC2920 ~ 2880 年)、No.4 の堆積物では 5910 ± 50 年 BP (同 BC4810 ~ 4720 年)、No.5 の堆積物では 19420 ± 90 年 BP (同 BC21560 ~ 20620 年)、No.6 のクロボク土では 1960 ± 40 年 BP (同 AD10 ~ 80 年) の年代値が得られた。

文献

Suiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

表-2 放射性炭素年代測定試料一覧

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ボーリング、2.9 m	堆積物	酸洗浄、石墨調整	AMS
No.2	ボーリング、6.1 m	堆積物	酸洗浄、石墨調整	AMS
No.3	ボーリング、7.4 m	堆積物	酸洗浄、石墨調整	AMS
No.4	ボーリング、8.0 m	堆積物	酸洗浄、石墨調整	AMS
No.5	ボーリング、8.9 m	堆積物	酸洗浄、石墨調整	AMS
No.6	0047G、クロボク土 (2b 層)	堆積物	酸・アルカリ・酸洗浄、石墨調整	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

表-3 放射性炭素年代測定結果

試料名	測定No.	14C 年代 (Beta-) (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 14C 年代 (年 BP) (1σ : 68% 確率, 2σ : 95% 確率)	暦年代 (西暦)
No. 1	203361	3740 ± 40	-25.0	3740 ± 40 1σ : cal BC 2200-2120, 2090-2050 2σ : cal BC 2280-2030	交点: cal BC 2140
No. 2	203362	3820 ± 40	-23.8	3840 ± 40 1σ : cal BC 2340-2210 2σ : cal BC 2450-2190, 2170-2150	交点: cal BC 2290
No. 3	203363	4170 ± 60	-16.9	4300 ± 60 1σ : cal BC 2920-2880 2σ : cal BC 3030-2870, 2800-2770	交点: cal BC 2900
No. 4	203364	5870 ± 50	-22.4	5910 ± 50 1σ : cal BC 4810-4720 2σ : cal BC 4900-4890, 4860-4690	交点: cal BC 4780
No. 5	203365	19310 ± 90	-18.3	19420 ± 90 1σ : cal BC 21560-20620 2σ : cal BC 21670-20520	交点: cal BC 21080
No. 6	203366	1860 ± 40	-19.1	1960 ± 40 1σ : cal AD 10-80 2σ : cal BC 40- AD 120	交点: cal AD 50

2. 花粉分析（紙面の都合により方法は割愛する）

(1)はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試料

分析試料は、ボーリング試料の深度2.3m、2.5m、2.55m、2.9m、6.1m、6.9m、7.4m、8.0m、8.4m、8.9m、9.6mから採取された11点、および遺物包含層（2a層上部・2a層下部）、2b層、白色粘土から採取された4点の計15点である。

試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 結果

①分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉14、シダ植物胞子2形態の計50である。花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ツタ、ツバキ属、ミズキ属、カキ属、ハイノキ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

表-4 遺物包含層等における花粉分析結果（個体数が少なくダイアグラムで表すことができず表を掲載）

学名	分類群 和名	遺物包含層			ボーリング 白色粘土
		2a層上部	2a層下部	2b層	
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Betula</i>	カバノキ属			1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			3	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科イラクサ科			1	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Allium</i>	ネギ属	2		3	
<i>Rubus</i> <i>oleracea</i>	スズクリ属	1			
Rubiaceae	アカネ科		1		
<i>Momordica</i>	ニガウリ属			10	
Lactuceidae	タンポポ科	1			
<i>Xanthium</i>	オナガミ属	1			
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			2	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monocolpate spore	單条溝胞子	3			
Trilete type spore	三条溝胞子	1			
Arboreal pollen	樹木花粉	1	1	3	0
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	0	0	1	0
Nonarboreal pollen	草木花粉	0	6	13	0
Total pollen	花粉總數	1	7	17	0
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	0.8	6.3	1.9	0.0
Unknown pollen	未同定花粉	×10	×10	×10 ²	
Unknown pollen type 1	未同定花粉type 1	0	2	4	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	31	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeons	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

〔草木花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ナデシコ科、アブラナ科、セリ亜科、ミツガシワ、シソ科、ナス科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

②花粉群集の特徴

1) 遺物包含層（2a層）及び2b層

2b層では、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、草木花粉のネギ属、ニガウリ属、ヨモギ属、および未同定花粉type 1などが検出されたが、いずれも少量である。未同定花粉type 1は、大きさ約30μmで、球状～や長球状、外層はグラニュレートで満たして長く伸びるという特徴があり、ケシ科（クサノオウ属）に近似している。2a層下部では、ネギ属、タンボボ亜科、およびシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。2a層上部では、花粉はほとんど検出されなかった。

2) ボーリング試料

試料9.6mでは、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、イネ科などが検出されたが、いずれも少量である。試料8.9m～8.0mでは、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、タンボボ亜科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

試料7.4mと試料6.9mでは、樹木花粉の占める割合が草木花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属-マテバシイ属、ハンノキ属が優勢であり、エノキ属-ムクノキ、ニレ属-ケヤキ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草木花粉ではイネ科が優勢であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。

試料6.1mでは、草木花粉の占める割合が樹木花粉より高い。草木花粉では、カヤツリグサ科が優占し、イネ科、ヨモギ属などが伴われる。樹木花粉では、ハンノキ属やエノキ属-ムクノキが見られなくなり、ニレ属-ケヤキも減少している。

試料2.9mでは、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、カヤツリグサ科などが検出されたが、いずれも少量である。試料2.55m、試料2.5mと試料2.3mでは、花粉が検出されなかった。

（4）花粉分析から推定される植生と環境

① 遺物包含層（2a層）及び2b層

弥生時代中期とされる2b層および2a層の堆積当時は、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、2b層ではネギ属、ニガウリ属、ヨモギ属、ケシ科近似種などが認められることから、日当たりのよい比較的乾燥した環境が示唆される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾温を繰り返す堆積環境下で花粉

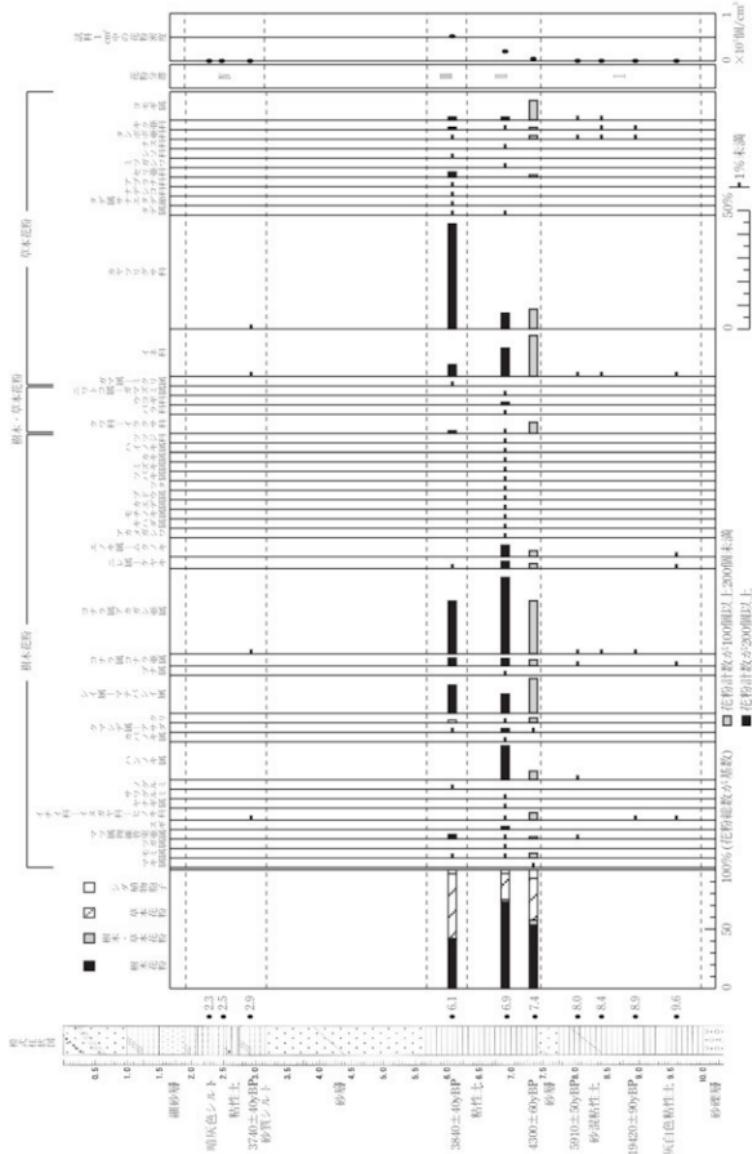


図-42 大江遺跡群ボーリング試料における花粉ダイアグラム

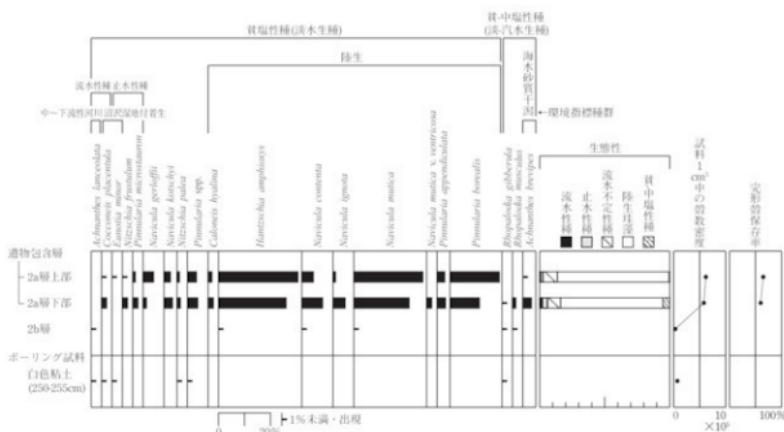


図-43 遺物包含層、2b層、白色粘土における主要珪藻ダイアグラム

などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。なお、ニガウリ属やケシ科近似種については、その他の分類群と比較して花粉の保存状態がかなり良好であることから、上層から後代のものが混入した可能性も示唆される。

②ボーリング試料

放射性炭素年代測定で 5910 ± 50 年BPの年代値が得られた試料8.0mより下位の層準では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、タンボボア科やヨモギ属などが認められることから、比較的乾燥した堆積環境であった可能性が示唆される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、水流による淘汰を受けたこと、および土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

4300 ± 60 年BPの年代値が得られた試料7.4mから試料6.9mにかけては、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）やシイ類（シイ属マテバシイ属）などの照葉樹を主体としてハンノキ属、エノキ属一ムクノキ、ニレ属一ケヤキなどの落葉樹も生育する森林植生が分布していたと考えられ、林縁などにはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと推定される。

3840 ± 40 年BPの年代値が得られた試料6.1mの黒色粘土の堆積当時は、カヤツリグサ科などが生育する湿地の環境であったと考えられ、周辺にはカシ類やシイ類を主体とした照葉樹林が分布していたと推定される。

3740 ± 40 年BPの年代値が得られた試料2.9mの砂質シルト層では、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。試料2.55mの白色粘土層および試料2.5mと試料2.3mの固く締まった暗灰色シルト層では、花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。

中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110。

中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

3. 珪藻分析（紙面の都合により方法は割愛する）

（1）はじめに

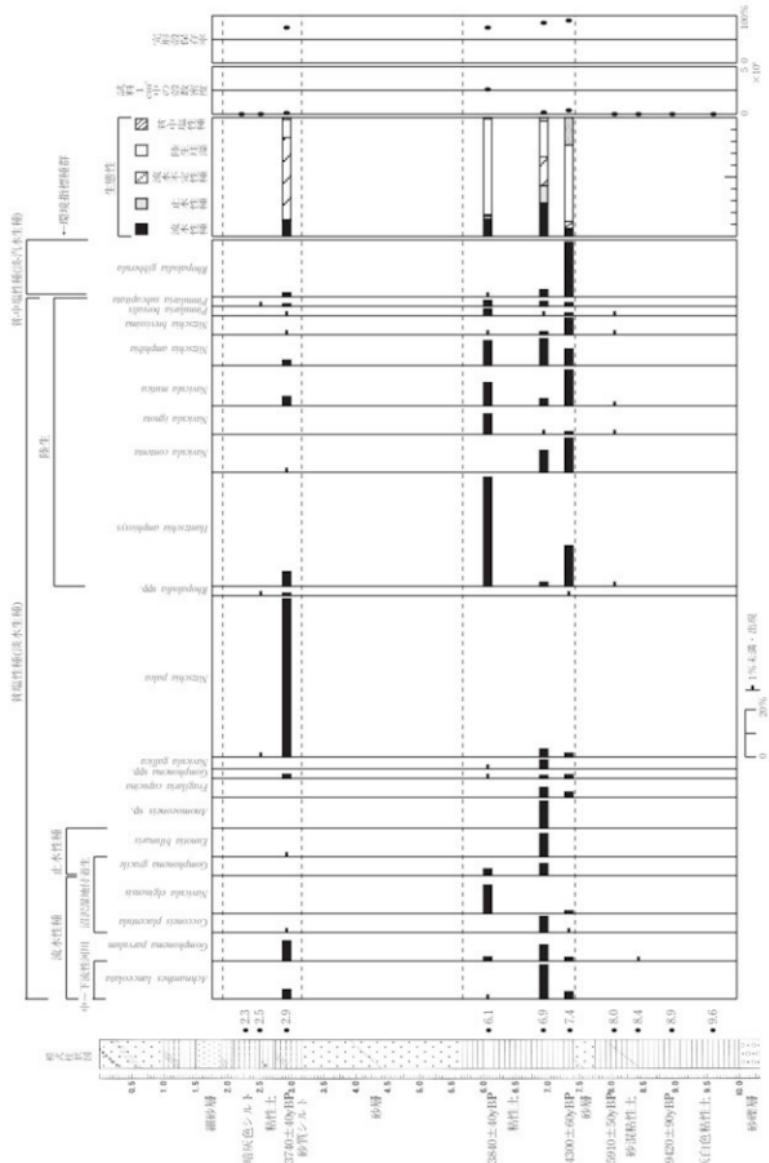


図-44 大江遺跡群ボーリング試料における主要珪藻ダイアグラム

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持つている。

珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

(2) 試料

分析試料は、花粉分析に用いられたものと同一の計15点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 結果

①分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）87分類群、貧－中塩性種（淡－汽水生種）2分類群、中－真塩性種（汽－海水生種）4分類群である。珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図-43・図-44に示す。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Anomoeoneis sp.*, *Coccconeis placentula*, *Eunotia bilunaris*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula elginensis*, *Navicula gallica*, *Navicula ignota*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia brevissima*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia subcapitata*, *Rhopalodia spp.*

〔貧－中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔中－真塩性種〕

Caloneis westii, *Nitzschia granulata*

②珪藻群集の特徴

1) 遺物包含層（2a層）及び2b層

2b層では、樹木花粉のコナラ属アカガシ亞属、草本花粉のネギ属、ニガウリ属、ヨモギ属、および未同定花粉type 1などが検出されたが、いずれも少量である。未同定花粉type 1は、大きさ約30 μ mで、球状～やや長球状、外層はグラニユレートで溝

は長く伸びるという特徴があり、ケシ科（クサノオウ属）に近似している。2a層下部では、ネギ属、タンボボア属、およびシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。2a層上部では、花粉はほとんど検出されなかった。

2) ポーリング試料

試料9.6mと試料8.9mでは、珪藻が検出されなかった。試料8.4mと試料8.0mでも珪藻がほとんど検出されなかつたが、試料8.0mでは中－真塩性種（汽－海水生種）の*Caloneis westii*や*Nitzschia granulata*が認められた。

試料7.4mでは、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia brevissima*などの陸生珪藻が優占し、貧－中塩性種（淡－汽水生種）の*Rhopalodia gibberula*も比較的多く検出された。試料6.9mでは、流水性種、止水性種、流水不定性種、陸生珪藻がほぼ同じ割合であり、流水性種で中～下流水性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*や*Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Coccconeis placentula*、止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の*Gomphonema gracile*や*Eunotia bilunaris*、流水不定性種の*Anomoeoneis sp.*や*Fragilaria capucina*、陸生珪藻の*Nitzschia amphibia*や*Navicula contenta*などが検出された。試料6.1mでは、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*, *Navicula ignota*が優勢であり、流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*などが伴われる。

試料2.9mでは、流水不定性種の*Nitzschia palea*が優占し、流水性種の*Gomphonema parvulum*や中～下流水性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Nitzschia amphibia*などが伴われる。試料2.55m、試料2.5mと試料2.3mでは、珪藻がほとんど検出されなかつた。

（4）珪藻分析から推定される堆積環境

①遺物包含層（2a層）及び2b層

弥生時代中期とされる2b層および2a層の堆積

当時は、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、2b層ではネギ属、ニガウリ属、ヨモギ属、ケシ科近似種などが認められることから、日当たりのよい比較的乾燥した環境が示唆される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾温を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。なお、ニガウリ属やケシ科近似種については、その他の分類群と比較して花粉の保存状態がかなり良好であることから、上層から後代のものが混入した可能性も示唆される。

②ボーリング試料

放射性炭素年代測定で 5910 ± 50 年BPの年代値が得られた試料8.0mより下位の層準では、珪藻がほとんど検出されないことから、堆積環境の推定は困難である。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、水流による淘汰を受けたこと、および土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。なお、試料8.0mでは微量ながら中-真塩性種（汽-海水生種）が認められることから、何らかの海水の影響を受けている可能性が示唆される。

4300±60年BPの年代値が得られた試料7.4mでは、陸生珪藻が優占し、貧-中塩性種（淡-汽水生種）も比較的多いことから、温潤な陸域が優勢な環境であり、淡水域から汽水域の影響も受けていると考えられる。その後、試料6.9mの時期には河川の影響のある湿地が拡大したと考えられ、汽水域の影響は見られなくなったと推定される。3840±40年BPの年代値が得られた試料6.1mの黒色粘性土の堆積当時は、温潤な陸域が優勢な環境であり、水流の影響のある湿地も分布していたと推定される。

3740±40年BPの年代値が得られた試料2.9mの砂質シルト層では、流水性種を伴う水流不定性種が優占することから、水流の影響もある不安定な水域の環境が示唆される。試料2.55mの白色粘土層および試料2.5mと試料2.3mの固く締まった暗灰色シルト層では、珪藻がほとんど検出されないことから、堆積環境の推定は困難である。珪藻が検出されない原因としては、前述のようなことが考えら

れる。

文献

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol.Suppl.15,p.131-506.

Patrick, Reimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13. The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms, 333p, National Environmental Research Center.

Patrick, Reimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13. The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—、植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究, 27, p.1-20.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用、東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌, 6,p.23-45.

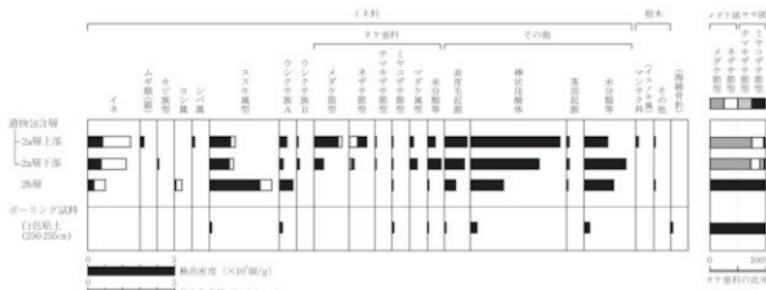


図-45 遺物包含層、2b層、白色粘土における植物珪酸体分析結果

4. 植物珪酸体分析

(紙面の都合により方法は割愛する)

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プランツ・オ・パール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

(2) 試料

分析試料は、ボーリング試料の深度2.2m、2.3m、2.4m、2.5m、2.55m、2.6m、2.8m、2.9m、5.9m、6.1m、6.6m、6.9m、7.1m、7.4m、7.8m、8.0m、8.4m、8.6m、8.9m、9.2m、9.6m、9.9mから採取された22点、および遺物包含層（2a層上部・2a層下部）、2b層、白色粘土から採取された4点の計26点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 分析結果

①分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を図-45・図-46に示した。

[イネ科]

イネ、ムギ類（穀の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ

族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Bタ

イブ

[イネ科・タケ亞科]

メダケ節型（メダケ属・メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属・チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属・ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科・その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

②植物珪酸体の検出状況

1) 遺物包含層（2a層）及び2b層

2b層では、ススキ属型が多量に検出され、イネ、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども検出された。イネの密度は3,500個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。2a層下部では、イネが大幅に増加しており、ススキ属型は減少している。また、メダケ節型、ネザサ節型などが出現している。イネの密度は7,700個/gと高い値である。2a層上部では、イネ、メダケ節型、ネザサ節型が増加しており、ムギ類（穀の表皮細胞）、シバ属、マンサク科（イスノキ属）が出現している。イネの密度は8,600個/gと高い値であ

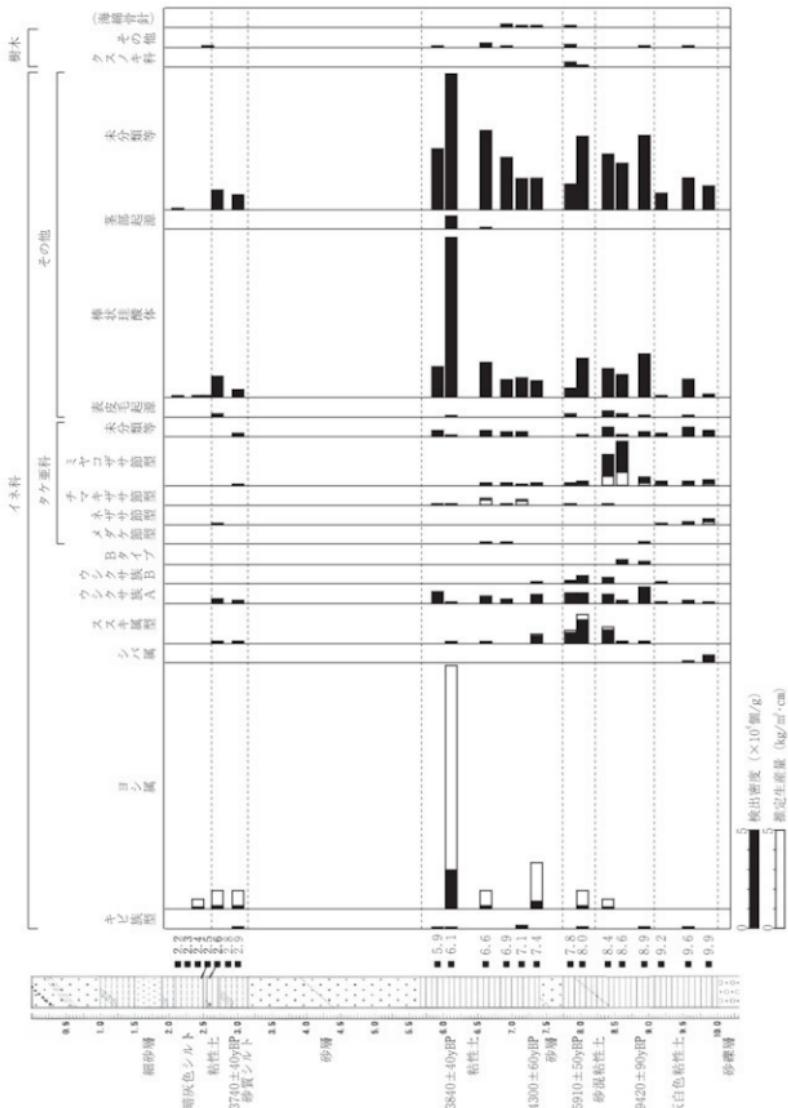


図-46 大江遺跡群ボーリング試料における植物珪酸体分析結果

る。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は2,100個/gと比較的低い値であるが、穎（糊殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、2b層ではスキ属型が優勢であり、2a層下部ではイネ、スキ属型、2a層上部ではイネ、スキ属型、メダケ節型が優勢となっている。

2) ポーリング試料

試料9.9m～9.2mでは、シバ属、ウシクサ族A、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。試料8.9mでは、ウシクサ族Aが比較的多く検出され、キビ族型、スキ属型、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。試料8.6mと試料8.4mでは、スキ属型やミヤコザサ節型が増加しており、ヨシ属も出現している。試料8.0mでは、スキ属型がさらに増加しており、ミヤコザサ節型は減少している。また、同試料では樹木（照葉樹）のクスノキ科が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山、1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。試料7.8mでは、スキ属型が減少している。

試料7.4m～6.6mでは、ウシクサ族Aやミヤコザサ節型が少量検出され、部分的にヨシ属、スキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型なども検出された。試料6.1m（黒色粘性土）では、ヨシ属が多量に検出され、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族Aなども少量検出された。試料5.9mでは、キビ族型、ウシクサ族A、チマキザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

試料2.9mと試料2.6mでは、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。試料2.55m（白色粘土）では、スキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、および海綿骨針などが検出されたが、いずれも少量である。試料2.5m～2.2m（固く締まった暗灰色シルト）では、植物珪酸体はほとんど検出されなかった。

なお、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

（4）植物珪酸体分析から推定される植生と環境 ①遺物包含層（2a層）及び2b層

弥生時代中期とされる2b層の堆積当時は、スキ属などが生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、調査地点もしくはその近辺では稲作が行われていたと考えられる。

2a層の堆積当時は、おもに稲作が行われていたと考えられ、同層上部の時期にはムギ類の栽培も行われていたと推定される。また、周辺にはスキ属やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが分布していたと考えられ、調査地周辺にはイスノキ属などの樹木（照葉樹）が生育していたと推定される。

②ポーリング試料

試料9.9m～9.2mの灰白色粘性土層の堆積当時は、メダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹苞類、およびシバ属やウシクサ族などが生育するイネ科植生であったと考えられ、比較的乾燥した環境であったと推定される。なお、植物珪酸体密度が低いことから、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったことや、土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

放射性炭素年代測定で 19420 ± 90 年BPの年代値が得られた8.9mから8.4mにかけての砂混粘性土層の堆積当時は、ササ属（ミヤコザサ節）などの竹苞類を主体として、スキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったと考えられ、比較的乾燥した環境であったと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期一間氷期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山、2001）。ここではササ属（ミヤコザサ節）が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候であったと推定される。

5910±50年BPの年代値が得られた試料8.0mから試料7.8mにかけての砂混粘性土層では、スキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。照葉樹のクスノキ科が見られることから、当時は比較的温暖な気候であったと推定される。

このように、試料8.0mの下位を境に植生・環境が異なっており、年代測定値も大きく異なることから、この付近に不整合が存在しており、この間の堆積層が欠如している可能性が考えられる。

4300±60年BPの年代値が得られた試料7.4mから試料5.9mにかけての粘性土層の堆積当時は、部分的にヨシ属やウシクサ族などは見られるものの、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。なお、3840±40年BPの年代値が得られた試料6.1mの黒色粘性土層の時期には、一時的にヨシ属などが繁茂する湿地の状況になっていたと推定される。

3740±40年BPの年代値が得られた試料2.9mの砂質シルト層や試料2.6mの粘性土層の堆積当時は、スキ属やチガヤ属、ヨシ属などは見られるものの、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物

の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。

試料2.55mの白色粘土層および試料2.5m~2.2mの固く締まってた暗灰色シルト層では、植物珪酸体がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。植物珪酸体が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物図報告、第31号、p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.

杉山真二（2001）テフラと植物珪酸体分析、月刊地球、23：645-650.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.

5. 竪石部材の蛍光X線分析

（紙面の都合により方法は割愛する）

（1）はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出さ

表-5 大江遺跡群における蛍光X線分析結果

単位: wt (%)

原子No	化学式	地点・試料		4号住居址		10号住居址		ボーリング試料	
		1 竪石	2 竪石	3 2.3 m	4 2.5 m	1 竪石	2 竪石	3 2.3 m	4 2.5 m
11	Na ₂ O	1.617	1.421	1.478	1.599				
12	MgO	0.949	0.507	1.147	1.132				
13	Al ₂ O ₃	23.853	24.569	20.138	20.367				
14	SiO ₂	48.966	49.706	52.554	53.887				
16	SO ₃	0.223	0.749	0.433	0.794				
19	K ₂ O	0.497	0.502	1.347	1.072				
20	CaO	6.692	5.915	7.975	7.119				
22	TiO ₂	1.607	1.603	1.488	1.337				
23	V ₂ O ₅	0.045	0.066	0.067	0.070				
25	MnO	0.250	0.312	0.237	0.304				
26	Fe ₂ O ₃	15.214	14.551	13.029	12.225				
38	SrO	0.088	0.100	0.107	0.095				

れ、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

(2) 試料

試料は、竈址（4号住居址、10号住居址）の袖石部材から採取された2点、およびボーリング試料の固く綿った暗灰色シルト層（試料2.3m）、白色粘土（試料2.5m）から採取された2点の計4点である。

(3) 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表-5および図-47に示す。

(4) 考察

竈址（4号住居址、10号住居址）の袖石部材の試料では、珪酸（ SiO_2 ）の含量が49.0～50.0%、アルミニウム（ Al_2O_3 ）が23.9～24.6%、鉄（ Fe_2O_3 ）が14.6～15.2%、カルシウム（CaO）が5.9～6.7%であり、珪酸が主成分となっている。ボーリング試料の固く綿った暗灰色シルト層から採取された試料2.3mと2.5mでは、珪酸（ SiO_2 ）の含量が52.6～53.9%、アルミニウム（ Al_2O_3 ）が20.1～20.4%、鉄（ Fe_2O_3 ）が12.2～13.0%、カルシウム（CaO）が7.1～8.0%であり、珪酸が主成分となっている。

両者の比較では、竈址の袖石部材の方がボーリング試料の固く綿った暗灰色シルト層および白色粘土よりもアルミニウムと鉄の含量がやや高く、珪酸の含量はやや低い傾向が認められるが、明瞭な差異ではない。また、ナトリウム（ Na_2O ）、マグネシウム（MgO）、チタニウム（ TiO_2 ）などの微量元素についても、両者の間でとくに明瞭な差異は認められなかった。

以上の結果から、竈址の袖石部材とボーリング試料の固く綿った暗灰色シルト層および白色粘土は、給源が同一である可能性が考えられる。

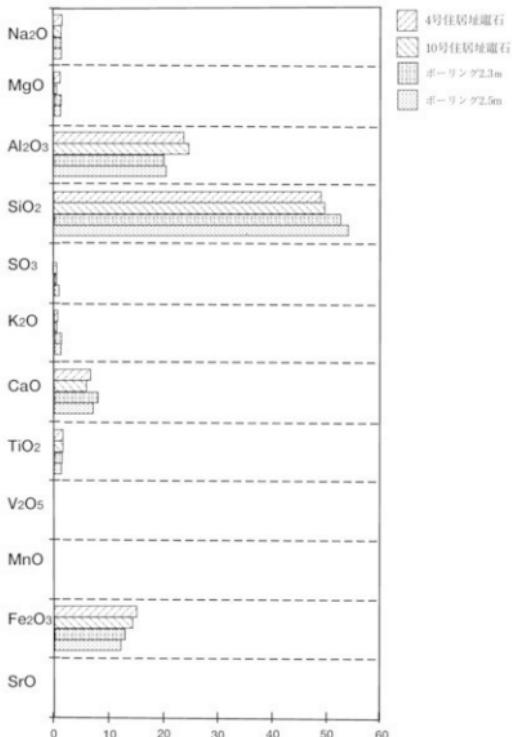


図-47 大江遺跡群における蛍光X線分析結果 (wt%)

第V章 総括

県営九品寺団地の建て替えに伴い実施した調査範囲は、総面積1,657m²であった。

今回の調査で検出した遺構は、住居址、溝及び土坑、畝状遺構、方形竪穴遺構であった。主な成果として、大江遺跡群の南端部の地域では、古墳時代から集落となっており、古代まで集落として継続されていたことが理解できたこと。また、住居址の壠に使用した袖石の石材として本調査地を流れる流路から切り出していたこと。さらには、土壤の調査を行うことにより、縄文時代から中世までの層序が確立でき、古環境がある程度復元できることにある。

住居址は、総数22軒検出された。6世紀後半の古墳時代後期から古代までの時代幅があり、ほぼ連続的に存在していたことがわかった。集落として8世紀に繁栄し、9世紀になり急激に住居址がなくなる。それ以降は、生活の痕跡が認められない。9世紀になり急激に住居址がなくなることは、集落としての繁栄と廃絶される時期が、今まで大江遺跡群で指摘されているように国府の移転に伴う集落の廃絶として考えられる。古代の集落では、下級の役人たちが生活していた可能性があり、墨書き土器の存在はその可能性を引き出すひとつの証拠になると見えよう。検出の状況も、古墳時代の住居址は、ある程度の切り合いを示すが、古代になると切り合いが顕著になってくる。これまでの大江遺跡群の調査でも住居址が集中して検出される特徴があり、今回の調査でも同じような結果が得られた。また、住居址の規模も古墳時代から古代（繁栄期）までは大型化するが、廃絶される時期（9世紀）には小型化する傾向を示すという結果が得られた。

溝については、1号溝（自然流路）は、古墳時代には形成されていて、13世紀には完全に埋まつたと考えられる。1号溝以外の溝は、遺物の量が極端に少なく、時代が特定できる遺物が少ないため詳しい時期特定はできないが、1号溝を境に西側が中世で、5号溝は近世と考えられる。特筆すべき点として、1号溝の底に見られる粘土（7層）及び凝灰質砂岩（6層）である。溝の底には、明らかに切り出した痕跡が認められる。切り出した石材は、（30

×20×15）cmサイズくらいに加工され、壠の袖石として使用された。蛍光X線分析により自然堆積の粘土及び凝灰質砂岩と壠の袖石の分析値が一致しており、この調査区内の流路の底から切り出していることが判明した。尚、この粘土は、分析の結果、成因としては、火山性の泥流の発生により粘土鉱物を多く含む泥水が沈殿固結したものであると思われ、時期として約3,740年前（縄文後期）から約1,960年前（弥生中期）の間で、その中でも古い時期に形成されたと言える。

尚、土坑については、出土遺物が少なく、詳細な時期特定は困難であるが、古代の土師器を産出し、住居址に隣接して検出されることから、大方、古代に構築されたものと考えている。

壠の袖石については、今回の調査によって、1号溝の底から石材となった粘土及び凝灰質砂岩が検出でき、この粘土及び凝灰質砂岩から切り出した痕跡を確認できた。本調査区はもちろんのこと、大江遺跡群の他の調査地、新南部遺跡群など他の遺跡でも壠の袖石として出土している。白川流域では、この自然流路から粘土及び凝灰質砂岩を切り出し、壠の袖石として使用しているようである。今後、本流路の出土例が増えることで、どの程度の範囲で切り出せた場所があったか推定できるようになると考えられる。

大江遺跡群は、縄文時代から明治時代の遺跡としているが、周辺の遺跡の調査において、縄文時代の層位が確認できない等の課題もあった。さらに、この地域は、すでに宅地化が進み、現地形から洪積台地と沖積地との境界を読み取るのは非常に困難であり、縄文海進期の海岸線など不明な点も多かった。そこで、縄文時代の遺物包含層の層位の確定や時代ごとの自然環境の把握のため、ボーリング試料による古環境調査を行った。その結果、深度約8m（標高4m）で約5,910年前の年代を得て、この時期には少なからず海水の影響を受けた時期であることがわかった。その後は、乾陸化し河川周辺に見られる自然堤防となり現代に至っている。乾陸化した後の植生については、調査区では草木、周辺では照葉樹が生育していた環境であったと考えられる。

表一六 出土遺物觀察表

器士

固有 名	出土地点	器種	大きさ (cm)			材質	調査番号	外観	内面	色
			長	幅	高					
1	49号小切地	土師器 錐	(24.8)			陶瓦	3.5	赤褐色(深)と黄褐色(浅)の2種類	赤褐色	良好
2	59号小切地	土師器 錐	(14.8)			陶瓦	3.7	赤褐色(深)と黄褐色(浅)	赤褐色	良好
3	59号小切地	土師器 錐	12.7		3.7	陶瓦	4.0	赤褐色	赤褐色	良好
4	39号小切地	土師器 錐				陶瓦	2.7	赤褐色	赤褐色	良好
5	59号小切地	土師器 錐	(11.4)			陶瓦	8.3	赤褐色	赤褐色	良好
6	63号小切地	土師器 錐	14.8	8.4	4.0	陶瓦	6.5	赤褐色	赤褐色	良好
7	63号小切地	土師器 錐	(12.6)			陶瓦	3.0	赤褐色	赤褐色	良好
8	63号小切地	土師器 錐	(18.6)			陶瓦	8.1	赤褐色	赤褐色	良好
9	7号小切地	土師器 錐	10.8		12.5	陶瓦	6.5	赤褐色	赤褐色	良好
10	73号小切地	土師器 錐	(13.4)			陶瓦	5.4	赤褐色	赤褐色	良好
11	73号小切地	土師器 錐	(11.0)			陶瓦	7.3	赤褐色	赤褐色	良好
12	73号小切地	土師器 錐	18.4			陶瓦	17.4	赤褐色	赤褐色	良好
13	73号小切地	土師器 錐	25.3		25.4	陶瓦	6.5	赤褐色	赤褐色	良好
14	10号小切地	土師器 錐	(12.7)	8.1		陶瓦	3.5	赤褐色	赤褐色	良好
15	10号小切地	土師器 錐	(14.6)			陶瓦	3.9	赤褐色	赤褐色	良好
16	10号小切地	土師器 錐	(16.8)			陶瓦	6.2	赤褐色	赤褐色	良好
17	10号小切地	土師器 錐	(11.9)	6.1	3.8	陶瓦	7.2	赤褐色	赤褐色	良好
18	11号小切地	土師器 錐	(14.2)			陶瓦	5.7	赤褐色	赤褐色	良好
19	11号小切地	土師器 錐	(12.4)	4.5		陶瓦	3.6	赤褐色	赤褐色	良好
20	11号小切地	土師器 錐	13.2	8.8	3.3	陶瓦	5.0	赤褐色	赤褐色	良好
21	11号小切地	土師器 錐	16.15	10.0	11.1	陶瓦	5.5	赤褐色	赤褐色	良好
22	11号小切地	土師器 錐	(27.0)			陶瓦	22.8	赤褐色	赤褐色	良好
23	16号小切地	土師器 錐	(18.2)	(10.0)	3.0	陶瓦	12.0	赤褐色	赤褐色	良好
24	23号小切地	土師器 錐	(26.4)			陶瓦	11.0	赤褐色	赤褐色	良好
25	26号小切地	土師器 錐	(16.4)	7.9	2.7	陶瓦	13.8	赤褐色	赤褐色	良好
27	27号小切地	土師器 錐	(12.9)	8.8		陶瓦	1.2	赤褐色	赤褐色	良好
28	27号小切地	土師器 錐				陶瓦	0.7	赤褐色	赤褐色	良好
29	27号小切地	土師器 錐				陶瓦	2.1	赤褐色	赤褐色	良好
30	17号小切地	土師器 錐	(30.2)			陶瓦	12.5	赤褐色	赤褐色	良好
31	17号小切地	土師器 錐	(27.5)			陶瓦	12.5	赤褐色	赤褐色	良好
32	18号小切地	土師器 錐				陶瓦	12.5	赤褐色	赤褐色	良好
33	18号小切地	土師器 錐	(15.7)			陶瓦	1.0	赤褐色	赤褐色	良好
34	23号小切地	土師器 錐	(12.9)	(8.2)	1.95	陶瓦	0.5	赤褐色	赤褐色	良好
35	23号小切地	土師器 錐	(16.4)	(8.4)	5.5	陶瓦	1.2	赤褐色	赤褐色	良好
36	23号小切地	土師器 錐				陶瓦	1.2	赤褐色	赤褐色	良好
37	23号小切地	土師器 錐				陶瓦	1.2	赤褐色	赤褐色	良好

42	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.4)	(6.0)	3.4				W6110YR/1	良好	内面に捕獲された体部が外面に露出あり。
43	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.7)	(6.7)	2.2				W6110YR/1	良好	内面に二重着。
44	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.6)	(6.3)	4.2				W6110YR/1	良好	内面に二重着。内面にホタルアリ。
45	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.6)	(10.7)		4.2		W6110YR/6	良好	外面上にホタルアリ。	
46	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.0)	(7.6)	3.55			W6110YR/6	良好	外面上にホタルアリ。	
47	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.8)	(7.0)	5.4	0.6	7.25	W6110YR/4	良好	外面上にホタルアリ。	
48	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.8)	(10.8)	3.9	0.5	(11.15)	W6110YR/4	良好	内面に二重着。	
49	1号捕獲	須虫器 置	环	(16.2)	(9.9)	5.3	0.55	(10.6)	W6110YR/5/1	良好	外面上にホタルアリ。	
50	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.0)	(7.2)	4.25	0.35	(7.6)	W6110YR/5/1	良好	外面上にホタルアリ。	
51	1号捕獲	須虫器 置	环	(16.8)	(6.0)	6.85	0.4	6.3	W6110YR/5/3	良好	内面にホタルアリ。	
52	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.2)		1.3			W6110Y/1	良好	内面に二重着が見られる。	
53	1号捕獲	須虫器 置	环	(14.1)		1.75			W6110Y/1	良好	内面に二重着が見られる。	
54	1号捕獲	須虫器 置	环	(18.0)		2.7			W6110YR/1	良好	内面に二重着。	
55	1号捕獲	土附器 置	环	(14.0)		10.6			W6110YR/4	良好	内面に二重着。	
56	1号捕獲	須虫器 置	环	(14.1)					W6110YR/3	良好	内面に二重着。	
57	1号捕獲	須虫器 置	环	(16.8)	(10.5)	18.5	0.7	(10.7)	W6110YR/3	良好	内面に二重着。	
58	1号捕獲	須虫器 置	环	(21.8)					W6110YR/2	良好	内面に二重着。	
59	1号捕獲	土附器 置	环	(12.7)	9.7	3.4			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
60	1号捕獲	土附器 置	环	(13.3)	9.0	4.2			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
61	1号捕獲	土附器 置	环	(13.1)	(9.2)	3.45			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
62	1号捕獲	土附器 置	环	(13.3)	(7.2)	3.7			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
63	1号捕獲	須虫器 置	环	(14.6)	(9.9)	4.25	0.45	(9.95)	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。自然施か見られる。	
64	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.1)		6.6	0.25	0.4	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
65	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.3)	9.3	4.15	0.65	9.75	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
66	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.1)	7.0	5.2	0.5	7.4	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
67	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.4)	8.8	4.45	0.55	8.95	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
68	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.3)	8.8	4.55	0.55	8.9	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
69	1号捕獲	土附器 置	环	(14.0)	(12.6)	5.0	0.5	(13.15)	W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
70	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.1)		3.3			W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
71	1号捕獲	須虫器 置	环	(14.2)		3.3			W6110Y/2	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
72	1号捕獲	須虫器 置	环	(14.6)		2.25			W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
73	1号捕獲	須虫器 置	环	(12.65)		2.9			W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
74	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.6)		1.8			W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
75	1号捕獲	須虫器 置	环	(13.0)		2.75			W6110YR/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
76	1号捕獲	土附器 置	环	(11.8)	(7.4)	4.3	0.7	(7.6)	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
77	合合器(007G)	土附器 置	环	(17.8)	(9.2)	1.6	0.05	(9.6)	W6110YR/4	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
78	合合器(007G)	土附器 置	环	(17.8)	(9.2)	8.6	1.05		W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
79	合合器(008G)	土附器 置	环	(12.0)		8.5			W6110YR/8	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
80	合合器(008G)	土附器 置	环	(12.0)	8.2	3.1			W6110YR/8	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
81	合合器(006G)	土附器 置	环	(12.7)	8.2	3.8			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
82	合合器(004G)	土附器 置	环	(13.2)	(7.4)	2.8			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
83	合合器(004G)	土附器 置	环	(16.6)		6.4	0.3	6.45	W6110Y/1	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	
84	合合器(005G)	土附器 置	环	(15.0)	(9.2)	2.45			W6110YR/6	良好	内面にホタルアリ。壁付着。	

表—6 出土遺物観察表

石製品

目次 番号	出土地點	器 種	幅 (cm)	長 さ		幅 (cm)	厚 さ	重 さ (g)	備 考
				前 縁	後 縁				
37	59号床頭	石圓		2.7	1.7	0.35		1.2	加藤行
38	10号床尾	ガラス小玉				0.5	0.15	0.3	色濃・コバルトブルー ガラス含まない。
39	6号床頭	幼獣頭	3.8	3.5	1.15	0.8	2.0	16.5	清仁

鉄製品

目次 番号	出土地點	種 類	器 種	長 さ		幅 (cm)	厚 さ	重 さ (g)	備 考
				前 縁	後 縁				
40	19号床頭	鉄製品	J/F	6.6	1.9	0.65			
85	台窓脇(002G)	鉄製品	馬銜	4.4	4.05	0.4			
86	1116北ツト	鉄製品	鉗頭	5.0	2.05	0.15			

土製品

目次 番号	出土地點	器 種	幅 (cm)	長 さ		幅 (cm)	厚 さ	重 さ (g)	備 考
				前 縁	後 縁				
87	台窓脇(002G)	土浦		3.25	0.85	0.80	0.85	0.25	1.7 鉛頭形 脈上；石英・陶質；清仁・酒井；ナダ

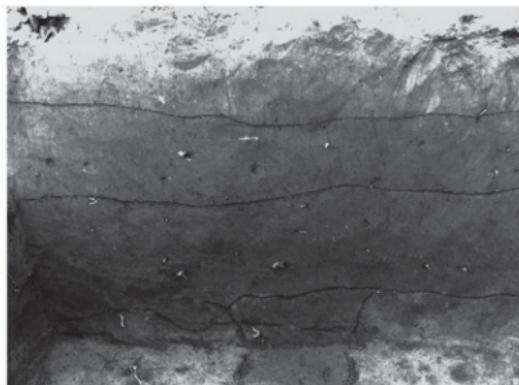


写真-7 基本土層



写真-8 作業風景



写真-9 1号住居址完掘状況



写真-10 5号住居址完掘状況



写真-11 6号住居址完掘状況



写真-12 7号住居址完掘状況



写真-13 11号住居址完掘状況

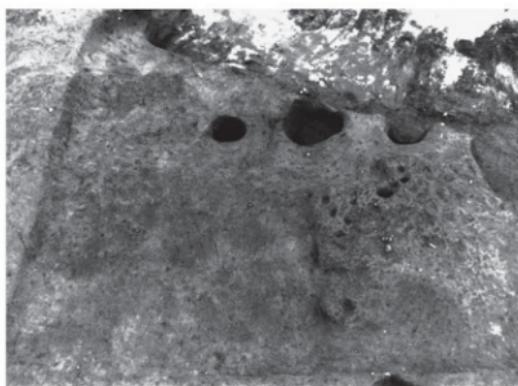


写真-14 13号住居址完掘状況

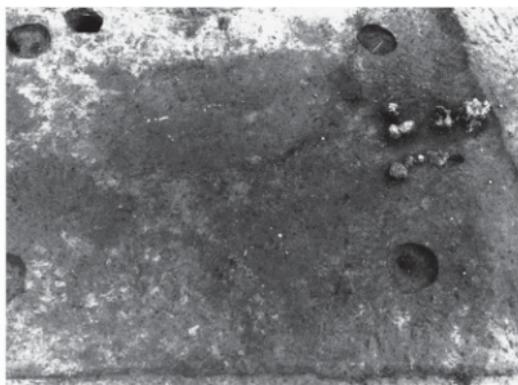


写真-15 15号住居址完掘状況



写真-16 17号住居址完掘状況



写真-17 18号住居址完掘状況



写真-18 5号住居竪坑
出土状況



写真-19 6号住居東側竪址
出土状況



写真-20 7号住居竪址
出土状況



写真-21 11号住居竪址
出土状況



写真-22 5号住居址遺物
出土状況



写真-23 7号住居址遺物
出土状況



写真-24 18号住居址遺物
出土状況



写真-25 2号方形竪穴遺構
完掘状況



写真-26 2号土坑完掘状況



写真-27 6号土坑完掘状況

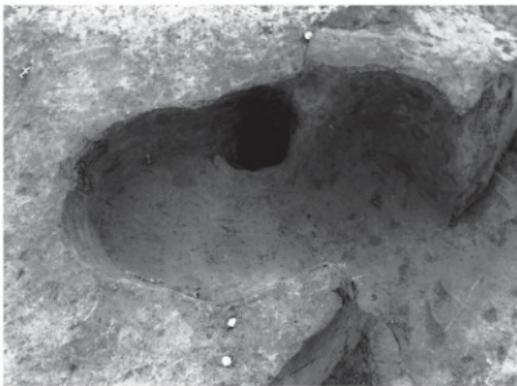


写真-28 7号土坑完掘状况



写真-29 19号土坑完掘状况



写真-30 1号溝完掘状況

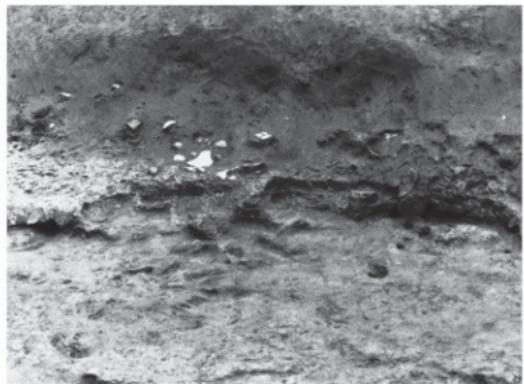


写真-31 1号溝石材切出部
出土状況



写真-32 2号溝完掘状況



写真-33 3号溝完掘状況

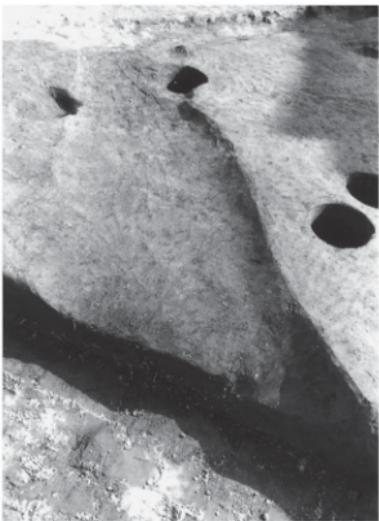


写真-34 4号溝完掘状況



写真-35 5号溝完掘状況



写真-36 故状遺構完掘状況

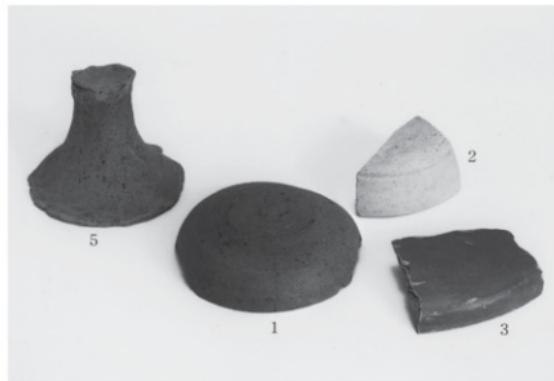


写真-37

4号・5号住居址出土遺物

図-35 1 2 3 5



写真-38

6号住居址出土遺物

図-35 6 7 8



写真-39

7号住居址出土遺物

図-35 9



写真-40
7号住居址出土遺物
図-35 10 12



写真-41
7号・10号住居址出土遺物
図-35 11
図-36 14 15



写真-42
7号住居址出土遺物
図-36 13



写真-43
11号住居址出土遺物
図-36 18 19 20

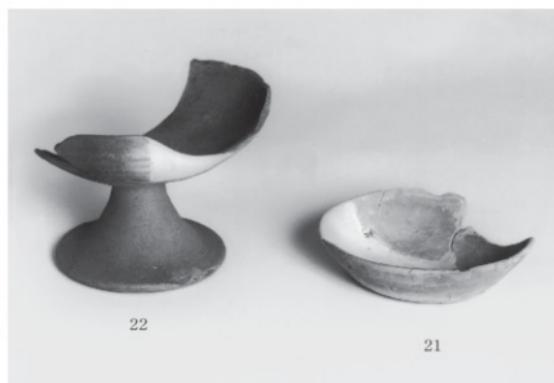


写真-44
11号住居址出土遺物
図-36 21 22



写真-45
16号住居址出土遺物
図-37 23 24 25



写真-46
17号住居址出土遺物
図-37 26 27 28



写真-47
17号住居址出土遺物
図-37 29

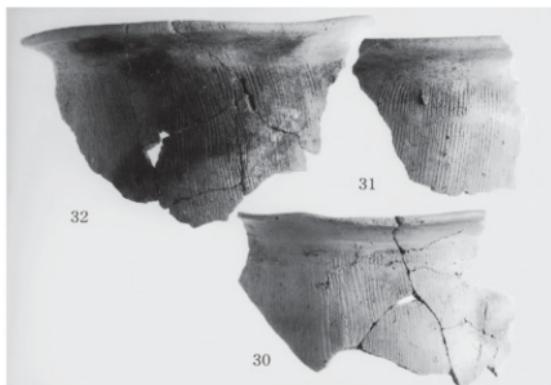


写真-48
17号・18号住居址出土遺物
図-37 30
図-38 31 32

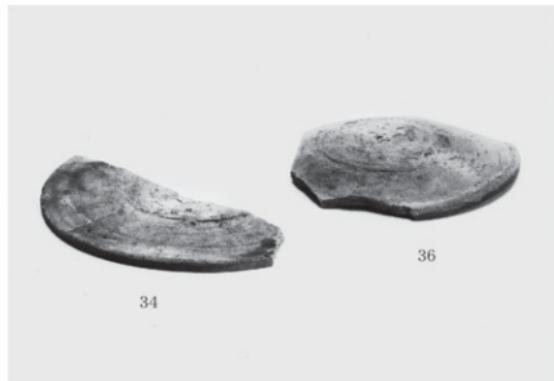


写真-49

18号住居址・2号方形竪穴
遺構出土遺物

図-38 34 36

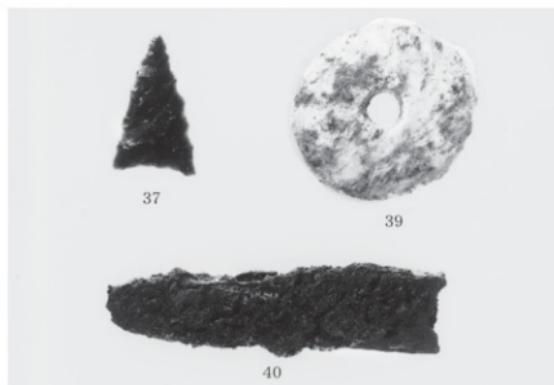


写真-50

5号・6号・19号住居址
出土遺物

図-38 37 39 40

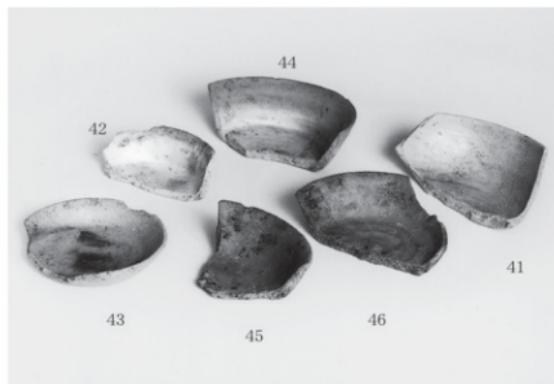


写真-51

7号土坑・1号溝上層
出土遺物

図-39 41 42 43
44 45 46



写真-52
1号溝上層出土遺物
図-39 47 48 49
50 51

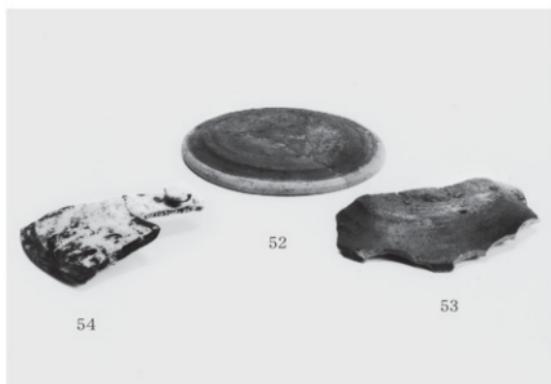


写真-53
1号溝上層出土遺物
図-39 52 53 54



写真-54
1号溝下層出土遺物
図-39 55

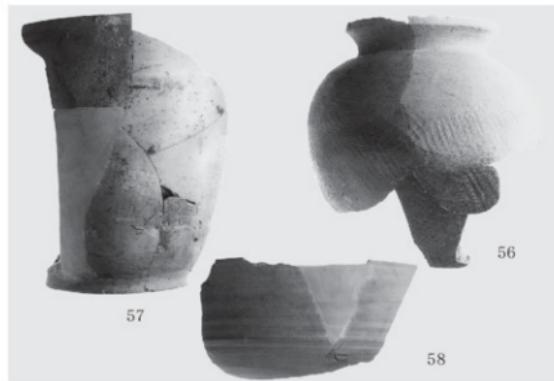


写真-55

1号溝下層出土遺物

図-40 56 57 58

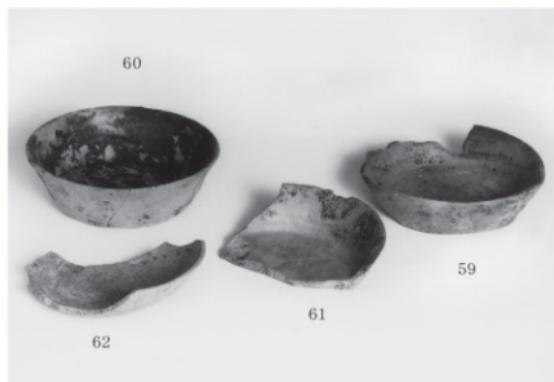


写真-56

1号溝下層出土遺物

図-40 59 60 61

62



写真-57

1号溝下層出土遺物

図-40 63 64 65 66

67 68 69

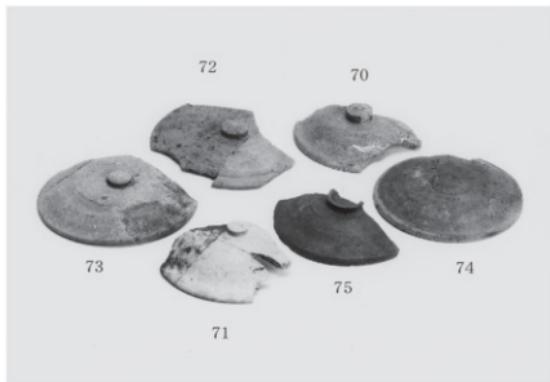


写真-58

1号溝下層出土遺物
図-41 70 71 72
73 74 75

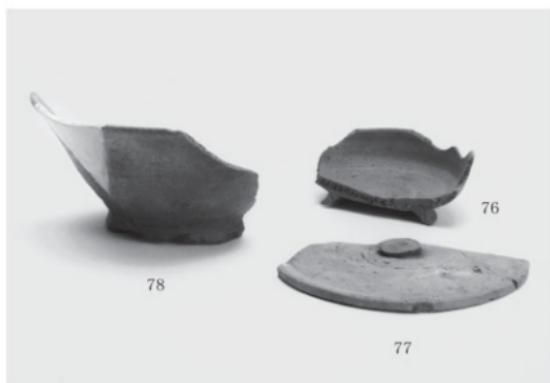


写真-59

1159ピット・遺物包含層
出土遺物
図-41 76 (1159ピット)
77 (0037グリッド)
78 (0027グリッド)



写真-60

遺物包含層出土遺物
図-41 79 (0038グリッド)
80 (0037グリッド)
81 (0130グリッド)
82 (0048グリッド)



写真-61

遺物包含層出土遺物

図-41 82 (0048グリッド)

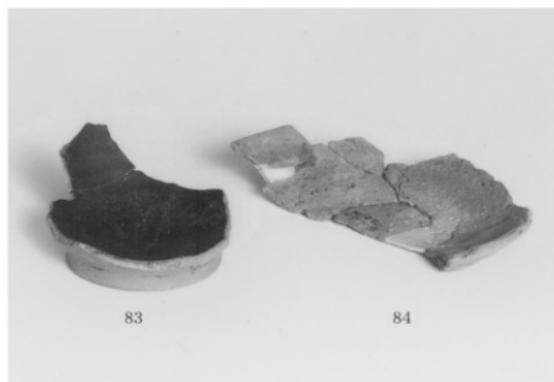


写真-62

遺物包含層出土遺物

図-41 83 (0048グリッド)

84 (0037グリッド)

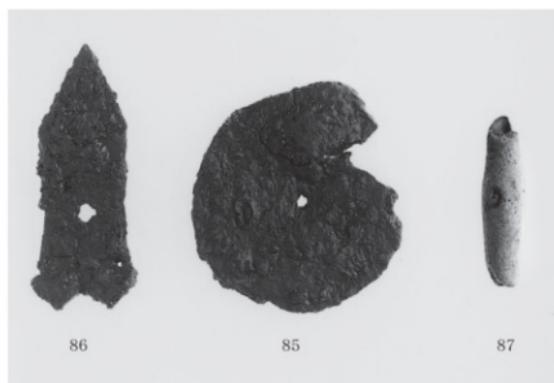


写真-63

1116ピット・遺物包含層

出土遺物

図-42 85 (0027グリッド)

86 (1116ピット)

87 (0029グリッド)



写真-64

18号住居址出土墨書き土器

図-38 33

遺物包含層(0048グリッド)

出土墨書き土器

図-41 83



写真-65

10号住居遺址出土ガラス

小玉

図-38 38

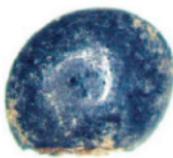


写真-66

住居址から出土した竪の

袖石(①、②)と流路に露出

している原岩(③、④)



ケシ科種子



ケシ科種子

— 1.0mm

5号住居遺址から出土



モモ核片



モモ核片



カラスザンショウ種子片

— 5.0mm

6号住居遺址から出土

— 1.0mm

10号住居遺址から出土



カヤツリグサ科果実

— 1.0mm

11号住居遺址から出土



センダン核

— 1.0mm

18号住居遺址から出土

写真-67 住居遺址から出土した種実

報告書抄録

ふりがな	おおいせきぐん							
書名	大江遺跡群Ⅲ							
副書名	県営九品寺団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第232集							
編著者名	馬場正弘							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	平成18年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおいせきぐん 大江遺跡群	くまもとけんくまもとし くほんじょうちゅうめ 熊本県熊本市 九品寺3丁目	43201	283	32度 47分 30秒	130度 43分 08秒	平成17年1月 平成17年3月	1.657m ²	団地建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大江遺跡群	集落址	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	竪穴住居址 土坑 溝 烟	掘立柱建物	土師器 須恵器 石製品 鉄製品 輸入陶磁器		墨書き器少量出土	

遺跡の概要

主な成果として、本調査地の所在する大江遺跡群の南端部の地域では、古墳時代から集落として形成され、古代まで集落として継続されていたことが理解できること。また、住居の竪穴に使用した袖石の石材として本遺跡群を流れる流路から切り出していたこと。さらには、土壤の調査の結果から、調査地周辺の縄文時代から中世までの層序が確立でき、古環境がある程度復元できたことがある。

住居址は、総数22軒検出された。6世紀後半の古墳時代後期から古代までの時代幅で、ほぼ連続的に存在していたことがわかる。集落として8世紀に繁栄し、9世紀になり急激に住居址がなくなる。それ以降は、顕著な生活の痕跡が認められない。溝については、1号溝(自然流路)が、少なくとも古墳時代には形成されていて、13世紀には完全に埋まったと考えられる。1号溝の底に見られる粘土及び凝灰質砂岩の層から明らかに石材として切り出した痕跡が認められた。蛍光X線分析により粘土及び凝灰質砂岩と竪穴の袖石の分析値が一致しており、この調査地内の流路の底から切り出していることが判明した。

ボーリング試料による古環境調査は、古環境の復元のみならず、周辺地域の調査や熊本平野の低湿地の調査を行う際にも貴重な参考資料になると考えられる。

参考文献

- 赤星雄一（1997）「大江遺跡群Ⅲ」，熊本市教育委員会。
- 赤星雄一（2004）「大江遺跡群V」，熊本市教育委員会。
- 網田龍生（1994）「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究－熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集－』，龍田考古学。
- 網田龍生（2003）「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究IV－熊本大学文学部考古学研究室創設30周年記念論文集－』，龍田考古学。
- 木村元浩（2002）「大江遺跡群」，熊本県文化財調査報告第211集。
- 熊本市新熊本市史編纂室（1996）「新熊本市史 史料編 第一巻考古資料」
- 県営九品寺団地地質調査業務委託報告書（2003），熊本県土木部住宅課。
- 水野哲郎（2003）「立願寺大塚遺跡」，熊本県文化財調査報告第210集。
- 丸山伸治・川俣恵（1996）「陣山遺跡」，熊本県文化財調査報告第155集。
- 長岡信治・横山祐典・中田正夫・前田保夫・奥野淳一・白井克己（1997）有明海南東岸玉名平野の地形発達史と完新世海面変化，地理学評論，70A-5, 287-306。
- 日本土器事典（1998），雄山閣。
- 小畠弘己・大坪志子・坂元紀乃（2003）「熊本大学構内遺跡発掘調査報告I」，熊本大学埋蔵文化財室。
- 田村実・ほか6名（1990）熊本平野における完新世の古環境変化に関する研究，平成元年度特定研究成果報告書。
- 横山勝三・渡辺一徳（1991）熊本市および周辺地域の地形・地質概要と研究課題，熊本市史研究くまもと第2号。
- 山本信夫（2000）「太宰府条坊跡 XV」『陶磁器分類編－太宰府市の文化財第49集』，太宰府市教育委員会。
- 和田 萃（1992）「大系日本の歴史（2）古墳時代」，小学館ライブラリー。

熊本県文化財調査報告 第232集

大 江 遺 跡 群 Ⅲ

平成18年3月31日

編 集 熊本県教育委員会

発 行 〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号

印 刷 株式会社 トライ

〒861-0105 熊本県鹿本郡植木町味取373-1

TEL 096-273-2580

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第232集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大江遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>